
炉心融解 -the another melt down-

te-ta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炉心融解 - the another melt down -

【Nコード】

N8318U

【作者名】

te-ta

【あらすじ】

「それでも君はここに帰ってこられた。感謝しなきゃね、この星にいる皆に」

これは私、鏡音凜という一人の人間の「この世界」での最後の五年間の話。そこで私は多くのものを失い、絶望し、最後には私自身も失うはずだった。

かつて彼女がそうしたように。

iroha氏のボーカロイド楽曲、炉心融解を題材にし、限界まで妄想した限りなく一次に近い二次創作。一つの解釈の終着点、無限

にあるうちの一つの解。凜は「この世界」で何を失い、何を願ったのか？物語の鍵を握る、高次元核融合炉の正体とは？

この物語は、炉心融解に対するあくまで私個人の解釈です。読んでいただいてから、改めて炉心融解の世界に思いをはせるきっかけにいただけたら幸いです。残酷な描写タグは、直接的なものはありませんが、死人が出ない訳ではないのでつけておくことにしました。

落下

プロローグ

私の周りに広がるのは、巨大な筒状の炉と、そこから放たれる眩い光。

重水素、リチウム、はたまたヘリウム³。この光がどんな物質から放たれているかは知らない。代わりにこの光がおそらく数秒後には私を確実に消し去るであろう事は、火を見るよりも明らかだ。けれど、それらは私の目には全く入っていないかった。

私の頭の中で二十年にも満たない短い人生の、だからこそ一つ一つが鮮やかな記憶が浮かんでは消えていつていたのだ。それこそ、太陽の輝きにも劣らぬほど鮮明に。

私は苦笑を漏らした。こんな人間のこんな人生でも、このような状況ではここまで映えるらしい。都合のいいことだ。

その中で最も強く浮かんだ記憶は、一人の少年の姿だった。この街に、いや、この三次元の空間と一次元の時間軸が形作るこの世界のどこにも存在しない少年の。

そしてこれから私が作り直すとしてこの空間にも、彼はいない。たとえそれが人類を一世紀近く支えていて、数秒後には人類を滅亡させるかもしれない物だとしても、彼を取り戻すことなどできない。

そう思ったとき、唐突に疑問が湧いてきた。

私は誰の為に、こんなことをやっているんだろう。

私の記憶に浮かぶ、あの少年は誰だったんだろう。

この世界を誰よりも思った少年は、どうしてこの世界に存在しないのだろう。

私はどうして、この疑問の答えを持っていないのだろう。

.....。

高次元核融合炉は、その存在が消える直前に、私と彼女が願った
思いを一つだけ叶えた。

「君はもう覚えていないかも知れないけれど、そうして君はここに
戻ってきたんだよ。ほんとうに心配したんだからね。僕が尊敬する
あの人と同じことを、君はやろうとしたんだからさ。」

それでも君はここに帰ってこられた。感謝しなきゃね、この星にい
る皆に」

一、分断

まるで巨人でも住んでいるのではないかと思わせるほど巨大なビル群。そしてそれらが放つ異様なほど華やかな街明かり。

私はその暴力的な光に目を細め、夜の街を歩いていた。

もし一世紀前の人々がこの光景を目の当たりにしたら、ほぼ間違いないく猛抗議するだろう、なんて無駄遣いをしているんだ、って。

そう、今私が住んでいる「この世界」は、はたから見れば大変な無駄使いをしている。

なぜそんなことが可能かと言うと、人類はその生活形態によらず、どんなに贅沢をしてお釣りが来るようなエネルギー源を獲得していたからだ。

人類はいつだって何かに頼って生きてきた。紀元前では奴隷や動物に、産業革命以降では石炭、石油、そして原子力、というふうに、歴史が続くにつれてそれらは増えていく一方だった。

しかしそれらは世界人口が百億人まで増えた時、もはや人類を支えることはできなくなり、むしろそれらを元にした科学技術は地球上の環境を良くしているとは言えなかった。

二十一世紀以降、肥大した世界人口とは裏腹に、人類が生きていくような場所はどんどん限られていき、それらをめぐって紛争が頻発した。そしてその時によく使われていた戦術が、今では人類最大の汚点とされている「国家動力破壊作戦」だ。

その名の通りその国家の主要なエネルギー源を直接叩くといった単純かつ究極的な戦術だったけれど、問題はその動力源が、原子力発電所ばかりなことだった。

二十一世紀初頭では環境問題により遠からず人類の住める場所が無くなるということが分かって、環境に負荷を掛けないエネルギー源の開発が急がれた。しかし、自然エネルギーの利用は効率的とはほとんど言えなくて、結局人類は原子力エネルギーに頼りきってい

ただ。

広場の噴水を見た。その上には「聖域」をかたどったエンブレム。普通に考えれば、その原子力発電所に景気よく大陸弾道ミサイルをぶち込んでしまえば、その場所は人類が生きていける場所では無くなることは誰にでも予想できる。紛争の目的はそこにいる人たちを殺して自分たちがそこにとって代わることなのに、そんなことをしてしまつては元も子もない。しかし、紛争を起こしていた者達とははや共同体とも呼べないバラバラに瓦解した国家だったものだったし、第一、彼らの頭は相当煮え切っていた。環境に押しつぶされる恐怖から来る脅迫観念によって。

そうして、世界中の原子力発電所に様々なブツが投げ込まれることになる。あるところではクラスター爆弾、またあるところではRPGが、はたまた大陸間弾道ミサイルが・・・という風にその手段は驚くほど多彩で、私は装甲を分厚く固めた日本製トラクターで自爆特攻したという冗談のような話を半ば信じていたりする。

そのようにブツが投げ込まれて制御不能に陥った原子力発電所は、決まって「あの雲」を上げることとなった。炉心溶融という言葉が流行語よりも使われていた時代は、他には無かっただろう。

少なくとも私が学んだ歴史の教科書は当時の様子をそんな風に物語っている。

光に溢れる川の対岸を見た。電波塔を飾る、三つの欠けた扇と一つの丸。

斯くして、人類は生存可能なスペースを、速やかに減らしていった。大地には無数のクレーターが刻まれ、森は放射線によって枯れて、その奥からはこれまで隠されていた未知のウイルスが人類を脅かした。

その光景を見て、人類はようやく自分達が絶滅の危機に瀕していることを知った。同時に気づくのが遅すぎたことも含めて。

しかしそれでは人類の歴史は終わらなかった。それから人類は大変な努力をし、様々な発明、発見を繰り返す。

その人類の「本気」が生み出したのが、今の私達の世界を支えている動力。「高次元核融合炉」と呼ばれる、途方もなく巨大なエネルギー源だった。

核融合炉を作ることは、それまでも検討され続けてきたことだったけれど、いささか地球上で扱うにはエネルギーが馬鹿みたいに巨大で、仮にコントロールできたとしても、その本質は太陽そのものなのだから、地球上に置いて安全な訳がない。だったら宇宙空間に作るのはいかがでしょうかという案も出されたけれど、宇宙から膨大なエネルギーを送ることは効率的に問題があつて、実現できたとしても大したエネルギーにはならないことはすぐに分かった。

そこで注目されたのが当時エネルギー問題とは無縁とされてきた、いわゆる「高次元」の研究だった。

正直、歴史が得意な私でもここまで来ると、なんだか分からなくなってくるけれど、どうやらその理論を持つてすれば放射線を抜きにして必要なエネルギーだけ核融合炉から引っ張ってくる事ができるらしい。

「高次元核融合炉」の設計方法はこうだ、まずなんとかして「この世界」の裏側にもう一つの世界を作り出し、またなんとかしてそこに核融合炉をこしらえる。あとはどうにかしてそこからこっち側の世界にそのエネルギーを持つてくる。

このような馬鹿みたいな無理難題を解決しなければ「高次元核融合炉」は作ることができないのだけれど、当時の科学者達は大真面目になつてこの問題を研究した。

そうして「この世界」には「高次元核融合炉」が作られた。と言ってもそれは「この世界」には存在してないのだけれど、それこそが研究が成功した証であるらしい。

とにかくこうして私が住んでいる世界がこのように存在しているのだ。

ちなみにこれらの内容はまさに一般常識で、中学校で真面目に歴史の授業を受けていたのなら誰でも知っている。女子高生である私が

そんなことも知らないなんて言ったら、世間から非難の目を浴びせられること間違いなしだ。

高次元核融合炉の仕組み以外は。

ふと、交差点のこれまた巨大な時計台を見上げると、その針は午前二時を指していた。

なぜ女子高生である私がこんな時間に町を出歩いているかと言うと、なんてことは無い。私が不眠症患者だったからで、けっこうな頻度で夜歩きをしていたのだ。

最近では医者からもらった睡眠薬もあまり効かなくなってきた。なぜ違う薬をもらおうとしないのかは、今のところ秘密。

「おい、凜、また夜歩きしてるのか？」

突然後ろから声を掛けられたけれど、それが聞きなれた声だったので私は驚かない。

「あんたも同じようなモンでしょ、魁人^{かいと}」

私が振り返ると、古めかしクラシックギターを持って呆れた表情を浮かべた魁人がいた。

「俺はこれを聞いてくれる人を探してるんだ。俺はいいけどおまえみたいな女の子がこんな時間にほつき歩いてたら、夜歩きしてる他のろくでなしどもに何されるか分かんないぜ？」

まったくこの友人は何度言ったら分かるのだろうか？まあ向こうも同じようなことを思っているのは火を見るよりも明らかだけど。

「私が不眠症なのをあんたは知ってるでしょ。しかもその理由まで」
魁人はこれを聞いて、若干俯いた。

「確かに廉^{れん}のことはひどいことだった。けどな、おまえまで同じ道を辿っちゃだめだ。なんとかして普通の生活に戻るように努力した方がいい」

努力。そういえば私達はとてもよくこの言葉を聞く。人類が絶滅しかけたあの時代。人類は努力によって新たなエネルギー源を獲得し、自らが住める環境を立て直したのだ。だから努力をすればできないことは無い、と私達は教わる。少なくとも私の担任教師が努力

という言葉を使わなかったことは一日だってなかった・・・はず。

「そう思うもならあんたのギターを聞かせてよ。あんたの曲はつまなくて絶対眠くなるから。電子ギターが主流になった今じゃ、そんなギターを使う奴なんてどこにもいないし」

魁人は余計なお世話だというように肩をすくめた。

「馬鹿にすんじゃねえよ。それよりこんなところで寝てたらおまえの安全が保障できねえだろ。最悪レイプされるな」

「あはは、それは勘弁」

大人達が私達に努力しろ努力しろと言う割には、この町には倫理的に墮落した大人が結構な数いる。大概、思春期を迎えるころにそのことに気づく子供達が多くて、私もその一人だった。気づいてからは、そんな大人になりたくないと思って、努力という言葉に反感を覚えながらもやはり努力をする私みたいなやつと、そんな大人の言うことを聞けるかと不良行為に走るやつの二極化が起きる。そんなことを意識せず、言葉通りに努力をすることができるのはほんの一握りの幸せ者だけ。

「しかたねえな・・・今日は俺がおまえの散歩につきあってやるよ」

「それって私が目当て、ととれるわね」

「馬鹿、今の俺には楽器しか見えてねえよ」

そうして私は歩き始める。魁人は黙って付いてきた、まったくどこまでもおせっかいなやつね。

「で、今日の散歩はどこに行くつもりだ？まさか未成年なのに居酒屋にでも行くつもりじゃねえよな」

「・・・『聖域』に行くつもり」

魁人は虚を突かれたような顔になった。

「『聖域』？そいつはもの好きだな。まあ海外からの最大の観光地ではあるが・・・どうしてそんなところに行くんだ」

「核融合炉に飛び込んでみたいと思って」

これは半分ぐらい出まかせ。

しかし魁人は信じられないような事を聞いたような表情で私を見

た。これだから魁人をからかうのはやめられない。

「おいおい、そんなこと・・・」

「冗談よ、まさか本気だと思ったワケ？核融合炉に飛び込むなんて、やろうとしてもできることじゃないわ」

「ちえ、馬鹿にされた気分だ」

そんなことを言っているうちに、いつの間にか私達はその「聖域」の前に来ていた。

三つの欠けた扇と一つの丸。

ここは「高次元核融合炉」の丁度裏側に当たる場所。一世紀前ではとてもとても嫌悪されてきた放射性物質を表すマークが、ここにはでかでかと書き込まれており、それを囲むように三本の巨大な摩天楼、主に核融合炉からエネルギーを引っ張って来るための施設が建っている。

「廉がね・・・言った言葉だったのよ」

私がぼつりと言うと、魁人はこちらを向いた。

「核融合炉に飛び込んでみたいって」

「そうか・・・」

しばらくの沈黙。私は、今は亡き私の双子の弟のことを想った。

私が助けることができなかった廉、私が死に追いやった廉。

「廉はね、僕達が歴史に刻まれることはないって言ってたわ、ここまで生きることにならなくて、前の時代にあまりにも『英雄』が居過ぎて、ここまで人類が墮落した時代もないって」

魁人は黙って聞いている。

「それで、僕達が歴史の教科書に載るには、核融合炉に飛び込むぐらいしか無い、できるかできないかはともかく、核融合炉のある高次元空間に押し入って原子レベルまで分解されるぐらいしないと、歴史は全く僕達に振り向いてくれないって言ってた」

「高次元核融合炉」の仕組のことを教えてくれたのは、廉だった。私なんかよりもずっとやさしくて、頭がよくて、それゆえ孤独にならざるえなかった弟。

私の全てだった鏡音廉。かがみねれん

「私の両親の事も、廉の事も、全てが嘘だったら、本当によかったのね」

魁人は何も言わない。

ねえ、私はこれからどう生きていけばいいの？家族も無く、生きていくのに全く困らない「この世界」で、なんの変化も無い世界で生きていくなんて。そんなことなら、核融合炉に飛び込んだ方が百倍マシだ。そうすればきっと不眠症で苦しむこともなく、昔みたいに眠れるんだ。

そんなことを考えながら「聖域」に一步近づいた。

その瞬間、突如として世界が歪んだ。吐き気がする、胃が焼けつくように痛い。それらがあまりにも唐突になだれ込んできたので私は混乱した。

とにかく落ち着かなきゃ。

確か右ポケットに煙草があっただはず・・・ライターも一緒だった。私は乱暴にそれらを取り出し、火をつけようとした。が、ライターはオイルが切れていた。

最後の望みを失ったような格好の私は、苦痛に耐えかねてその場に倒れ込んだ。

「おい！凜！大丈夫か！」

魁人の声が聞こえる。が、私にはもう魁人の顔は見えていなかった。その時私に見えていたのは、何処までも広がるような空と海。そして・・・真っ赤な太陽のようなもの。

私がバラバラにされていく。速やかに、音も無く。

空は何処までも蒼く、海は何処までも碧い。

ああ、このまま私は消えるのだろうか。

「凜！おい！凜！返事しろ！」

私が目を開けたとき、そこには青年の顔。

さすがにもう覚えていないけれど、この時私はこう言っただけ。

「凍って、誰？」

この言葉を聞いた魁人は、泣きそうな表情で、こう言った。

「おまえの名前だよ！鏡音凛^{かがみねりん}っていうさ！」

そうして僕を見た「この世界」は、

地上は何処までも明るく、空は何処までも昏い。

イヴが禁断の果実を取り、

その身に罪を刻み込んだように、

一人の女性がその罪を背負った。

イヴの罪でしか人は知恵を手に入れることは叶わず、

彼女の罪でしか人類は救われなかった。

一、分断（後書き）

ボーカロイド楽曲、炉心融解の二次小説を書いてみました、t e - t aと申します。

歌詞の内容やP V、また私たちの身の回りで起こっていることをこちやまぜにして話を構成していますが、まあこれが私のモラトリアムといったところでしょうか。

というわけで妄想全会でまっすぐに後ろ向きに突っ走っております。短編にするつもりでしたが、現在進行形で伸び続けております、八ぐらいまで行くと思うので付き合ってやってくださいませ。

念のためですがフィクションですよー。

二、贖罪

「どうやら記憶喪失が起きたようですね」

老眼鏡を掛けた医者が僕をまじまじと見つめている。

僕は魁人^{かいと}という青年に無理やり病院に連れてこられ、訳が分からないままいくつか検査を受けさせられた。CTスキャンはもう生涯御免だと思ったぐらいだ。

「それにしても奇妙なのは、凜^{りん}さんの記憶から感情の部分だけ抜け落ちている事です。人間は感情から記憶を呼び覚ますものですから、何も思い出せなくなっても不思議ではありませんが……。まあ生活習慣など体に染みついていることは、覚えている可能性は十分ありますから、実生活には困らないでしょう。」

しかし完全に感情だけが抜け落ちているというのは……」

魁人が心配そうに質問をする。

「記憶は戻るんですか？」

「記憶喪失には大体二つのパターンがあります。一つは認知症や脳の外傷記憶障害のように完全に記憶が消えてしまう場合。もう一つは何かのショックにより記憶があっても思い出せなくなってしまう場合です。しかし凜さんの場合は、どちらにも属さないんです」

「それはどういう……」

「さっきも言った通り、記憶から感情だけが抜け落ちています。海馬には外傷が全くないのに、そこだけ完全に抜け落ちている。これは何か外からの要因があつたとは思えません、これは前例が無いものですから、戻るかどうかは微妙なところです」

「あ、あと、『聖域』の前で倒れたあと、凜の一人称が変わってしまっているんです、数分前は『私』だったのが『僕』に」

医者は唸った。

「それは記憶喪失の症状の一つでしょう。一気に記憶が欠落してしまつと、脳はそれを補填しようとして、その結果性格が変わってし

まうのです。それに個人の人格は記憶に依るところが大きいですから」

それから医者は一呼吸置き。

「それと凜さん、あなたは『エーテル』を使っていたようですね、CT検査でそれらしき痕跡がありましたよ」

ここで魁人が度肝を抜いたのは言うまでも無い。当時エーテルといえば、コカインと並ぶ薬物乱用の代名詞だった。

「幸いと言うべきか、不思議なことになぜか凜さんの脳だけは薬物による記憶が完全に消え去っているのです。」

とにかく、凜さんが薬物を使用していたということは、何らかのトラウマを抱えていた可能性もあるでしょう。もつとも、それがこの症状を引き起こしている、という可能性もあるわけですが。

まあ記憶自体は完全には消えて無いはいないですから、いつかは記憶が戻ることは十分にありえます」

僕はといえば、薬物を使用していたなんてそんなことあったような無かったような、とにかく実感がなかった。

「それにしても、おまえがエーテルを使っていたなんてな。ホントだったら一晩中叱つてもいいぐらいなんだが、当の本人が忘れちゃってるんじゃないかな」

病院から出てきて、魁人が最初に言った言葉だった。

「で、夜はすっかり明けちゃったが、家の場所は覚えているのか？」

「多分」

「だったら早く帰った方がいい、明日は学校だろ」

そう言う割にこの青年は僕と同年代に見える。

「あんたも同じ学生だと思うけど」

「まったく記憶喪失になってもその性格は変わんねえな、言っとくが俺とおまえは同じ学校に通っている。フォローしてやるからとりあ

えず安心しな」

とくに返す言葉も無かったので、僕は魁人に背中を向けて歩き出した。

そこまで大きくも無いマンションの十三階。1LDK。どうやら孤児の僕は政府からの生活支援を受けているらしい。部屋でそれらしい書類を見つけた。

それから僕は他にすることも無かったので部屋を隅から隅まで調べた。

人にはそれぞれ物語がある。これは本棚で見つけた数少ない小説の一文。確かに鏡音凜かがみねりんという人間の物語は、この部屋にしっかりと刻みつけられていて、おかげで夜には僕がどういう人間だったのかが大体分かっていて。部屋にあった二台のパソコンのうち、一台はロックが掛かっていて見ることはできなかったけれど、さして問題は無かった。

部屋が物語る「私」はすんなりと僕の中に入ってくるけど、やはり実感は無い。

それからシャワーを浴びた。鏡を見たときに自分が首輪のアクセサリーを着けていたことに気が付き、外した。それから明日の準備をする。そうしているうちに大あくびがでて、昨日は一睡もしていないことに気が付いた。

そして僕はベットにもぐりこんだ。棚の上に睡眠薬が置いてあったけれど、そんなものを使わなくてもすぐに眠れそうだ。

そして朝。

君の首を絞める夢を見てしまった。

なぜ「君」という表現を思いついたのかは分からない。その君と
いうのは真っ白なワンピースを着た九、十歳ぐらいの少女。僕はそ
の少女の首を絞めていた。僕を言えば憎しみの表情を浮かべるので
はなく、ただ泣き出しそうな目で相手の首が苦しそうに跳ねるのを
見ていたのだ。

これが元々の僕の記憶なのかは分からない。けれど気になったの
はその場所が何処までも広がるような碧い海だったことだ。

身支度を始めなければ遅刻してしまいそうな時間だったので、僕
はベッドから起き上がり、着替え始める。

一人暮らしなので、ご飯は自分で作っていたことは分かっている、
やってみると、なるほどすんなりとできた。冷蔵庫の中に入ってい
たミカンが何となく気になったので鞆に入れる。

学校の校門まで行くと、魁人が待っていた。本当におせっかいな
やつ。

「あれ、くまが無い、昨日はちゃんと眠れたのか？」

「そ、睡眠薬も必要無かった」

「そうか・・・一応、先生には一昨日のことは伝えておいたから」
そこまで手間を惜しまないとは、どこまでもおせっかいなやつだ。
授業自体はほとんど問題が無かった。やはりすんなりと内容が僕
の中に落ち込んでいく。

放課後、別のクラスにいた女子二人が僕に駆け寄ってきた。

「凜！魁人から聞いたよ『聖域』前で倒れて記憶喪失になったって、
大丈夫なの？」

確か今話しかけてきたのが亞北^{あきたねる}？で、その後ろにいるのが巡音^{めぐりねる}瑠^る
香^か。

「僕はこのとおり元気、魁人のおせっかいが事態を大きくしてるよ
うな気もするけど」

「確かに、あの魁人の様子には、凜は学校に行けないんじゃないかと思うぐらい心配させられたわ」

「？があきれた口調で安心したような表情を見せる。」

「それにしてもその声で『僕』だなんて、なんだか廉を思い出しちゃうね」

今度は瑠香が口を開いた。鏡音廉。どうやら僕の双子の弟だった少年。小学生の頃から僕と廉と瑠香は仲良しだったらしい。

「ねえ、記憶喪失になるってどんな感じ？私達もあなたの力になりたいの」

瑠香が真剣に聞いてきたので、僕はすごい考え込んだ。

「なんていうか・・・みんなの言う『私』と、僕が別人に感じられるの。だけど身に覚えの無いはずなのに知っていることがあったり、なんだか不思議な感じ。魁人に医者に連れて行かれた時は、こんな症状は初めてだって言われた」

「・・・そっか、私なりに調べてみるね」

その日から僕と魁人と？と瑠香で、ほぼ毎日会って記憶喪失をどう直すかが話し合われた。けれど解決策は一向に出ず仕舞い。

一時期、僕の一人称を私に戻そうという試みがなされたけど、どうやっても一人称は僕になつてしまふのだった。

「まあ、女の子なのに一人称が『僕』って、ちょっとキャラが立つしね・・・」

しまいには、？がそんなことを言う始末だった。

いつしかみんな僕の記憶を戻すことを諦めていた。別に生活に困る訳でもないし、もうすでに今の僕自身がみんなの中に定着してしまっただ。

生きていくのに全く困らない日常。何の変化も無い日常。

それらが唐突に終わりを告げたのが高校二年の夏休み前。その日

も特に変わったことも無く。瑠香と一緒に校門を出た時だった。

それは一瞬で数人の生徒をなぎ倒し、道路のガードレールに突っ込んだ。がんつ、とものすごい音がして僕の目はそれに釘づけになった。

車だ。

それがあまりにも唐突だったので僕はそうとしか認識できなかった。その瞬間、車が人間に突っ込んだなんてことは考えられなかったのだ。

その車から一人の男が出てきた。その男がナイフを持っているのを見て、僕は唐突に何が起っているか理解した。

この男は誤って突っ込んだんじゃない、誰かに危害を加えるために車を突っ込ませたのだ。そしてさらに多くの人に危害を加えようとしている。

そんな考えがよぎると同時に、獲物を探す肉食獣のような眼で回りを見るこの男に、僕は強い恐怖を覚えた。けれど僕はそこに釘づけになってしまったように足を動かすことができず、逃げるのができなかった。そんな僕を最初の「獲物」ととらえたのか、男がこちらにやってきた。

しかしその歩みが唐突に止まる。その顔は紛れもなく驚愕を物語っていた。

「瑠香……」

男が驚愕の表情をして瑠香を呼んだように、瑠香も驚愕した様子になった。

「あなたは……」

「そうか……そういうことか……」

男はそうつぶやくと、ぞっとするような笑い声を響かせた。

「なんてこった！今までおれはこの社会がおれの邪魔ばかりすると思っていたのにさ！たまたま来た場所に『復讐』すべき相手がいるなんてな！」

男の支離滅裂な発言に対して、瑠香が口を開いた。

「どうして・・・こんなことを・・・！」

それを聞いた男はさも嬉しそうな様子で答えた。

「どうしてって？それはな、おまえを含めてこの世界がおれを裏切ったからだ！あの時おれが街のチンピラのやつらとやりあったってだけで、どんな会社もおれを雇おうとしなくなった。それどころか冷めた目でおれを見やがった！おまえもだ！おまえだけは何があっても理解してくれると思ってたのに！おまえだけはおれを愛してくれていたのに！」

僕は男の言ったことに関して大いに混乱した。男の言っていることが正しければ、この男は瑠香の元彼かなにかだ。瑠香・・・知らない間に男なんか・・・。

「だからおれはこの社会に復讐してやろうと思った！おれを無視してきた社会にな！おれはこれを成し遂げて社会におれを振り向かせてやるんだ、粗末にしてきたものがどんな仕返しをするか分からせてやるんだよ！おまえを殺すことだな！」

そう言っただけで男はナイフを構えて突進してきた。瑠香は石になってしまったようにその場から動けずにいる。僕は反射的に瑠香をかばった。

「凜っ！」

僕は瑠香の叫び声で、自分がやったことがどういう結果を生むかを意識し、それを裏付けるように、ナイフが刺さると同時に腹に焼けつくような痛みが走った。・・・が、刺されていたのは腕、しかも、その痛みはすぐに消えてしまった。

何かがおかしい。

痛みはすぐに消えた。目の前には男の驚愕した表情。見ると、男の持っていたナイフが「手ごと」無くなっていた。しかも男の腕からは血が出ておらず、最初から手など無かったかのようにそこには当然顔の「手首」があった。そして僕と言えば、なんの傷も負っていない。

すぐに近くにいた男子生徒達によって男は捕まえられ、警察に連

行された。僕と瑠香も当事者ということで聴取を受けた。

男の手が無くなったことに関して、警察は大いに頭を悩ませたが、どちらにせよ正当防衛の域は出ないということで、僕は事件当時の状況を説明させられただけだった。

幸いというべきか、死者はいなかったのだ。

「凜、ありがとう、凜がかばってくれなかったら私、どうなっていたか・・・」

先に出てきていた瑠香が感謝の言葉を口にした。

「ごめんね、巻き込んだじゃって。元はといえば私のせいね」

瑠香はそう言うが、それは違う気がする。

「そんなことないよ、悪いのは全部あの男のせい、瑠香があいつを振ったのは正解だったと思うよ」

「・・・ありがとう」

「それにしても瑠香に男がいたなんて、驚きね」

我ながらあんな事件のあとによくこんなことが言えたと思うけど、瑠香は本当に申し訳なさそうな顔をして話し出した。

「うん・・・。彼とは、丁度一年前に出会ったの。最初はすごく優しい人で、彼と一緒にいるだけでとっても楽しかった。だけど・・・」

「辛いんだったら、話さなくてもいいのよ？」

瑠香のあまりにも悲壮な表情に、僕はそんな言葉を口にした。けれど瑠香は首を振ってそれを否定する。

「ううん。話させて。私が凜を巻き込んだから・・・話さなきゃ。」

あれは私と彼が街を歩いてる時のことだったわ。チンピラみたいなやつらにちよつと絡まれたの、ちよつとバカにするような感じの言葉を投げかけられる程度だったんだけど、彼はそれにすごく怒ったの。私は彼にここから離れようって言って、止めようとしたんだけど、彼は止まらなかった。

彼は格闘技を習ってたの。それで、二人いたチンピラに思いつき

り殴りかかって、一人に大けがをさせてしまった。

命には関わらなかつたから、罰金と慰謝料はそこまで高くなくて、あっさりと示談が成立したわ。だけど、彼は前科が付いてしまった・・・。

彼が変わってしまったのはその時からなの。彼は夜間学校に通つてて、企業に就ける資格を持っていたんだけど、そのせいでどこにも受け入れてもらえなくなつて・・・それから彼は社会に対して敵意を持つようになったわ。街のギャングみたいな人たちと関係を持つてみたいだし・・・。

そんな彼が私は怖くなつた。それで、別れようつて言つたの。したら、彼は突然泣き出して、訳の分らないことを叫びだして・・・正直とても恐ろしかった。

今にしてみれば、その時私は彼に止めを刺してしまったんじゃないかと思ふの。そこで私は背中を向けて逃げてしまった。彼と向き合うことができなかった！

多分、あの時彼を助けられるのは私だけだった。私がちゃんと彼に向き合つて、彼を目覚めさせてあげなきゃいけなかった。なのに私は・・・！」

瑠香が感情の流れに耐え切れずに泣き出した。私は話の内容と瑠香の様子両方に困惑していた。まるでテレビドラマのような不幸な話。しかも最悪な事に、瑠香はそれを自分自身の罪だと思つてゐるのだ。

「でも、凜のおかげで彼は誰も殺さずに済んだわ。それだけは救いだったと思ふし、凜には彼の分も感謝しなきゃと思う。ありがとう。彼はまだ普通の生活に戻るはず。あなたのおかげだわ」

そう言つて瑠香は笑顔になった。

「いいのよ。でも瑠香にそんなことがあつたなんて、僕全然気づかなかつたな。そういうところは流石、瑠香「お姉さま」つてところね。ちよつと尊敬しちゃつた」

歯がゆくなつた僕はそんなことを言つて茶化したけれど、瑠香は

驚いたような表情を見せた。

「あれ？その言い回し。確か廉が言ってた・・・」

「え、そう？」

しばらく沈黙が流れる。やがて瑠香がためらいがちに口を開いた。

「あの、凜。あのとき凜はあいつに何をしたの？」

訝しむように聞かれて僕はどう答えるべきか迷った。

「・・・僕にも分からない。でも、あいつに刺された時、僕が記憶を失った時と同じ痛みが走ったの。もしかしたらそのことと関係があるのかもしれない・・・」

「そっか・・・。何だっただんたろうね」

またしばらくの沈黙。

「ねえ瑠香。廉みたいに高次元核融合炉のことに詳しい人を知らない？もしかしたら何か分かるかもしれないわ」

男の手が「消える」。そんな奇天烈怪奇な出来事を起こすのは私が記憶を失った場所、高次元核融合炉しかない。なんだかそんな予感がした。

それを聞いた瑠香が少し考え込む。

ひやまきよてる

「冰山清輝・・・そういえば私の父さんの知り合いで、核融合炉の制御施設の職員をやっていた人がいたわ、今は大学の教授をやっているはずだけど、夏休み中なら会いに行けるかも」

それからの毎日、僕はどこのテレビ局かわからないマスコミに追い回される羽目になった。それも当然といえば当然で、科学技術の発達でほとんどのことが明らかにされているこの社会では、そのような謎は格好のネタだったのだ。

自分でも全く分からないことを聞かれまくって、謎自体は一向に解決しない、テレビで自分の姿が報道されるたびに、僕は暗澹たる気持ちになった。

僕が瑠香にそう言うと、瑠香はちよつといたずらな笑みを浮かべた。

「それは大変だったね、今日何か分かると良いけど・・・」

そう、今日は目的の大学の学校公開の日。

「早く行こう！」

僕は待ちきれない気持ちで、氷山清輝のいる研究室まで急いだ。

目的の研究室の扉には「高次元科」と書かれていた。中に入ると優しいような笑顔を浮かべた眼鏡の男の人が出迎えてくれた。

「これはこれは、鏡音凜さんですね、はじめまして、僕は氷山清輝と、こっちは久しぶり、巡音瑠香さん。お父さんは元気かな？」

「はい、おかげさまで。あの、今日は高次元核融合炉の事について教えていただきたいのですが」

「まあ座つて。それにしてもあれのことか、ずいぶんと勤勉だね。どうして知りたいんだい？」

そこで僕はこれまでの経緯を説明した。なにしろ起こったことが体が奇天烈なことなのでつつかえつつかえの説明になってしまったけれど、この教授が真剣な表情をして聞いてくれるのが救いだっただなるほど、本当にその男の手が消えてしまったのなら、その手は別次元へ飛んで行ってしまったということも考えられるね」

「飛んで行った？」

「そう、その男に刺された時、君は『聖域』で倒れた時と同じ感覚に襲われたのだろうか？もしかしたら君の存在自体が、こことは少しずれたところにあるのかもしれない」

瑠香の訳が分からないといった表情。

「どういうことですか？」

「高次元核融合炉が、この世界には存在しない事は知ってるね、それと同じようなことが、きみの体にも起こっているかもしれないんだ。例えば、君は宇宙船のハッチにいて、男の手とナイフはそこに突っ込んだ。そうしたらハッチが開いてしまって、宇宙空間に放り出されてしまった。君は丁度ハッチにつかまっていたから、なん

ともなかった。といったところだね。

つまり、今の君はこの世界と別の世界の狭間にいるのかもしれない。もしかしたら、記憶はその別の世界に流れ出てしまったということもありうる」

普通に聞いたら、そんなことありえないって一蹴されるような論だ。けれど、別次元があることを他でもないこの世界の主要エネルギーが証明してしまっているのだから反論のしようが無い。

高次元核融合炉は確かに存在しているのだから。

それにしても、ずっと知りたかったことがこうまであっさりと分かってしまうと、なんだか拍子抜け。難解な事件の解答編が難解であるとは限らないようだ。

「でも、なんで凜にそんなことが起きたんでしょう？」

「それは分からない。まあこれは仮説に過ぎないわけだし、もっと他に理由があるのかも知れないね。これから真実が明かされることを祈るよ」

少なくとも、僕にとってはこれだけで十分だった。僕達はお礼を言って大学を後にした。

と、いうわけで僕は今から消えるかも知れない。

日記にそう記して僕は自分の部屋の窓の外を見る。さっき試しにナイフで指を切ろうとしてみただけで、指は切れずナイフの方が指の厚さの分消えて、真っ二つになった。あの教授が言う通り、別の世界に飛ばされたのだろう。そんなじゃ刃物失格ね、とひとりごちた。

もし今僕がここから飛び降りたら、なにが起きるのだろうか、まさか地面を削りつつ地球の中心まで行ってしまうのだろうか。それはそれで興味深いけれど、それよりも僕はもう一つの可能性を見つけた。

僕自身がもう一つの世界に行ってしまうこと。

そこで記憶を取り戻せたなら万々歳。もしそれができなくても僕に起こっていることがはっきりするのだ。

十三階から飛び降りるのはけっこう、というかなり怖い。僕はつかの間この方法を選んだことを後悔したけれど、今のところ他に方法が思いつかないのだから仕方ない。

僕は迷いを振りきるように首を振って、窓の外へ飛び出した。一瞬重力が無くなったようになったけれど、すぐに地面が迫ってきて内臓がせりあつてくるような恐怖感を覚える。僕は咄嗟に目をつぶった。

地面に着かない・・・。

目を開けると、どこまでも広がる空と海。そしてそこには「私」がいた、今の僕と寸分違わぬ。

当然ながら、僕は困惑した。「私」はそこにいるけど、どうすれば・・・。

その時、その「私」が手を伸ばしたのを見て、僕は何をすればいいか理解した。

思い切って「私」の前に降り立ち、その手を握った。

しかしその瞬間、僕がバラバラにされていくのが分かった。これは・・・。

「嫌だ！消えたくない！」

僕がそう言うのも空しく、僕と私はここから姿を消した。あるのはどこまでも広がる蒼い空と、碧い海のみ。しかしそれらが長く続くことは無かった。

その瞬間、私の中に開いた僕という穴が塞がれたのだから。

その時、なぜ私が僕という一人称を使ったのか、はっきりとわかった。

答えは「僕」の無くした、私の記憶の中にあった。

空はどこまでも蒼く、

海はどこまでも碧い。

けれどそれは長く続くことは無かった。

続くはずがなかった。

それを成したのは一人の人間でしかなかったのだから。

二、贖罪（後書き）

t e - t aです。実は一話を投稿した時点で四話まで書き終わっております。なので四話まではスムーズに投稿できますがそこからはどうなるかわ神のみぞ知るってところですよ。

三、喪失

「おーい！廉^{れん}！」

私とよく似た顔の男の子が振り返る。

「そんなに大きな声を出さなくても聞こえるよ」

廉はもう十四歳だというのにまだ声変わりをしてなくて、たまに声だけだと私と間違われることもしばしば。私の声が少し男の子っぽいついていうことも原因ではある。けれど、そんな廉の声を私は気にいつている。きつと大人になったら、すごくかっこいい声になるにちがいない。

「ねえ、今日もあの核融合炉の話、聞かせてよ！」

私と一緒にいた美玖^{みく}がそうせがむ。初音美玖^{はつねみく}。私と同じクラスの女の子。彼女は数少ない廉の話し相手だった。廉に話しかけるときの美玖はすごく楽しそう。

「ええつと、この前は核融合炉が高次元空間にあるところまでは話したよね。今日は、どうやって作ったかってことを話そうか。実は、その高次元空間は偶然できたものだったんだよ・・・」

自分達が住んでいる世界とは別の所にもう一つの世界を作る。その無理難題に科学者たちは果敢に挑みかかったけれど、やっぱりそこにはエネルギーの問題が付きまとった。当然、空間を別の場所から作りだす事には膨大なエネルギーが必要なんだ。それも宇宙を滅亡させるぐらいのエネルギーが。

だけど宇宙の始まりがそうであったように、その空間はぽろっと生まれ出た。それはどの科学者も予想できなかったことだったんだ。どうして空間が出来てしまったのかは分からない。けれど、とにかく空間は出来てしまった。

ここで科学者達はまた頭を悩ませることになるんだ。出来た空間の不可解さがその原因で、一言で言えば次元が違ったんだ。その空間はまさに混沌としていて、何とかそこに物質を送り込んでもその瞬

間にバラバラになってしまふ。そこはどう考えても核融合炉の建設場所には向かない場所だった。

そこで新たな仮説を立てた科学者がいた。その空間が混沌として
いるのは、その空間がかなり高い次元を持っているからじゃないか
だったらそれを利用してやればいいってというのが彼女の言い分だ
った」

「彼女？その科学者は女性だったの？」

不意に、美玖が割って入った。

「そう、僕が知るなかで最も気高い女性。ローラ・ゼロ。教科書に
はほとんど女性の科学者の名前は載って無いけど、あの時代にはそ
うやって活躍した女性もいっぱいいたんだよ。」

それで彼女はこう言った。私達がこうやってこの次元に存在して
いられるのだから、私達の意味を反映する次元があってもいいんじ
やないかって。

もちろん他の科学者達はその話を一蹴した、だけど彼女は本気で
それを信じていたんだ。だから彼女は身を持ってそれを証明して見
せた」

廉は大袈裟に一呼吸おいてみせた。

「彼女は、その空間に物質を送り込む装置を使って、自らその空間
に飛び込んだんだ。」

その結果。その空間には空と海、そして太陽が出来た。その太陽
は細長い形をしていて、その周りには僕達の世界にエネルギーを送
り込む装置が形作られた。まるで世界創生のようなだったと、他の科
学者は口を揃えて言ったそうだよ。

けれど嘆かわしいことに、命を犠牲にしたっていうのに彼女の功
績は今ではほとんど知られていない。その論はあまりにも非現実的
なものだったし、実際にその功績を受け取ることになったのは、そ
のエネルギーが世界中に届けられることを発見した男性の科学者だ
ったからだ。その人ならみんな知ってるはず」

「レオン・ゼロっていう人だったわけ？」

美玖が答えたのに対して廉はうなずいた。

「そう、でも彼は彼女が遺した論文どうりに装置を操作しただけだったんだ。一部の評論家の中では、ローラ・ゼロをイヴに、レオン・ゼロをアダムに例えている人もいるんだ。彼女が行動を起こさなければ、レオン・ゼロの名前が歴史の教科書に載ることも無かったってね。二人は夫婦だった訳だし」

「お、廉、また核融合炉の話をしているのか？」

突然、魁人かいとが話の中に入ってきた。

「またとは何さ、この世界を支えているエネルギーについてなのに」「いまさらそんな話、誰も聞かねえよ、テレビだって原理を知らなくても使えるっていうのによ」

魁人の話によれば、廉のいるクラスでは誰も核融合炉の話なんて聞こうとしないらしい。そのせいで、廉は変な奴だと思われるようだった。

「私は聞いてて楽しいけどな、なんだかすつごくドラマチックでさ、凜りんもそうでしょ？」

「うん、ちよつと難しいけど、この話をしている廉ったら、なんだかすごく楽しそうなんだもん」

私は核融合炉の話をしている時の生き生きした廉が好きだった。

廉は私の知る子供のなかで、一番頭が良い男の子だった。テストでもほとんど満点。私の知らないことを何でも知ってる。

歌もすごく上手で、私がつらいことがあって落ち込んでいるときも、廉の歌を聞くと暗い気持がどこかにいってしまふのだ。そのかわり美術はちよつと苦手。

本来なら廉はもつといい学校に行くべきだったのかもしれない。いや、間違いないくそうすべきだった。

それが出来なかったのは、私達の両親がもうこの世にはいないからだだった。

それは私が九歳の時、仕事で忙しい父が久々に休暇を取れたので、四大家族全員で遊園地に行った時のことだった。お気に入りだった真っ白なワンピースを着て、廉と一緒に遊園地中を走って回った。本当に夢のようだった。

だけど、それは母の死によって引き裂かれた。

頻発する猟奇事件のせいで今ではほとんど忘れ去られてしまった。その事件は、犯人も合わせて実に二十四人も命を奪ってしまった。その時、父と廉はジェットコースターに乗っていて、母と私はそれを下で見ていた。コースターが最高点に達した瞬間、銃声が鳴り響いた。

その女は狂ったように自動拳銃を振りまわし、周りの人という人をなぎ倒して回った。母はすぐに私を抱えて物陰に隠れ、安全を確保したけれど、私には状況は上手く理解出来ていなかった。

ただ、ひたすらに怖かったのだ。

私は泣き叫んでしまった。母はすぐに声が漏れないように口を塞いだけれど、遅かった。

女がこつちに向かってきてしまったのだ。母はその瞬間逃げようともせず私をかばった。

放たれた弾丸は、二発。恐怖で動けなくなってしまった私は、母が私をかばって撃たれるのを何もできずに見た。

一発はおなかに、もう一発は胸に当たった。血まみれになってもまだ私を守ろうとする母の姿を見たのを最後に、私の意識は途切れた。

その後どうやら弾薬が一発しか残っていないことが分かった、女がおもむろに頭に銃を向けたのが目撃されている。

父は母の死体を見つけると、まるで子供のように泣き叫んだ。父は母を愛していた。私達が想うよりもずっと深く。それを見て私と廉はただ茫然とするだけだった。

その時はあまりに突然のことだったので、何の感情も湧かなかった。

たけれど、それから酒に溺れるようになった父の姿を見て、私は事の重大さを意識した。

その父の自殺体が発見されたのが、その一週間後だった。第一発見者は、実の息子。私の双子の弟。かがみねん鏡音廉。

廉は私に決してその時のことを話さなかった。その悲惨な死を。

けれど私は廉に母が撃たれた時のことを話してしまった。

「ごめん……。私があの時泣き叫んだせいだ……。私が静かにしていれば母さんは死なずに済んだのに……。ごめんね、廉……ごめんね」

私が泣きながら謝るのを聞いて、廉は黙り込んだ。

「母さんが死ななければ、父さんは死なずに済んだのに。多分、私が生んでも父さんは死ななかった……。私が死ななければいけないかったんだ」

「凜、そんなことを考えちゃいけない。君は母さんに生かしてもらったんだ。生きなきゃだめだ」

廉は一言一言、諭すように言った。

「だから、凜。母さんが生かしてくれた君を、僕は何があっても守るよ」

そう言った廉は、私よりもずっと大人びていた。今になって思えば、父の自殺が、廉の中の何かを変えていた。その時から廉はとも努力したのだ。

国からの補助があつたので、私達が生活に困ることは無かった。けれど、廉がその才能を発揮できるような学校に行くには、それらは全く足りなかったのだ。

廉はそれを埋めるように、様々な知識を吸収していった。けれどそうするほど廉を理解してくれる人は少なくなり、少しずつ、廉は孤独になっていった。

だからときどき、廉は私を憎んでいるのではないかと思うことがあった。けれど廉はどこまでも優しく、それを聞いてしまったら、余計に廉を傷つけることになると思って、聞くことはできなかった。

「それよりも、早く弁当食っちまわないと、休み時間終わっちまうぞ。おまえらも、難しい話を聞いたから腹減ったろ？」

魁人がそう言ったので、私達は屋上に出てお弁当を食べることにした。魁人は生徒会の仕事があるとかで、一緒に来なかった。

「美玖……。今日もネギが弁当に入ってるけど」

廉は美玖の弁当の内容を見て、思わずそう聞いた。なんと美玖の弁当にはご飯の上にネギが一本切られたものが乗せられていたのだ。ちなみに廉はネギが苦手。

「だってネギ好きなんだもん。この苦みがたまんないの！廉だってバナナ好きでしょ」

「バナナは脳に必要な栄養分がたくさん入ってるんだよ、それで食べてたら好きになってただけで……」

「じゃあ凜は？なんで凜はミカンが好きなの？」

いきなり話を振られて、少し驚く。なんでって言われてもね。

「食べ物好きになるのに、理由なんてありません」

そんな私の適当な返事に反論しようとして、口を開きかけた美玖の言葉が遮られる。

「あれ！それネギ丼じゃない！その良さが分かるなんて、さっすが美玖！」

突然声を掛けてきたのは、巡音^{めぐりねる}瑠香だった。

「廉も食べてみたら？美味しいわよ！」

「やだ、無理して何か食べるのは健康に悪い」

「なによその屁理屈。そんなだから背が伸びないのよ」

廉に対してこんな態度になれるのは瑠香だけだ。私達にとっても瑠香はお姉さんの存在だった。

この時にはこんな風に、私と廉は幸せな日々を送っていたのだ。やがて弁当を食べ終わり、私達は屋上から街の景色を見る。高いフ

エンスを通して見える、菱形に彩られた景色。

巨大なビル群、高速道路を行きかう電気自動車の群れ。一世紀前の核融合炉が無かった時代から、この風景はどう変わったのだろうか。

「僕達は、多分歴史に刻まれることは無いと思う」

不意に、廉が口を開いた。

「ここまで生きることにならなくて、前の時代にあまりにも『英雄』が居過ぎて、ここまで人類が墮落した時代もない。

みんなが知っている会社はどんな会社かな？多分半分は人々の娯楽の為の会社だと思う。

一世紀前から比べて、その産業の需要が急激に上がったんだ。何故なら、人々は自分の幸福を第一に考えるようになってしまったから、本来親しい人と一緒に掴み取るべき幸福を、自分一人のために、企業を利用することで一人で幸福を手に入れようとしている。

人類は、進化しすぎたんだ。協力する必要もないほどに。だからみんなは、自分が幸福であればいいって思ってる。個人が、あまりにも個人になりすぎているんだ。

その結果、人が、人を想う事も弱くなってしまう。家族っていうコミュニティも次第に薄くなってきた。

だから、犯罪者や自殺者が増えているんだ。昔はつらいことがあっても相談出来る人がいた、それこそ自分よりもっと苦労してきた人に。

英雄だつて一人じゃなかった、誰かに支えてもらって、誰かを助けることで後世に名を遺した、人々に大切なことを教えた。言い換えれば、英雄が生まれるってことは、人が何かを学んだってことなんじゃないかな。その英雄すら僕達は生み出すことは無いんだ」

廉はなぜこんなことを知っているのだろう。そんな私の疑問をよそに、廉の言葉は続く。

「だからね、時々僕は核融合炉に飛び込んでみたいと思うことがあるんだ。今のままじゃ誰かが高次元空間にある核融合炉に押し入っ

て、原子レベルまで分解されるのを目撃されるぐらいしないと、人類は何も学ばない。人類の『歴史』は、全く僕らを理解しようとしていないんだ。僕達は、自分達全員がよりどころにしているものが、どんなものであるのかをみんなが知らなければならない。みんなが一つのものを共有していることに、気づかなければならない。

本当は僕が核融合炉に飛び込んでみたいぐらいだけど、核融合炉はこの世界には存在しないし、ローラが核融合炉を作った時点でその世界への道は閉ざされてしまったんだ。だから誰も核融合炉には飛び込めない。仮に飛び込めたとしても、それは悲劇でしかない。だからそんなことをしなくてもいいように、僕はみんなにもっと核融合炉の事について知ってほしいんだ」

この時廉が言った言葉を、今でも私は覚えている。けれど何を思っ
て廉がこんなことを言ったのかは分からない。廉がいなくなってしまった
今、もしかしたら永遠に知ることは叶わないかも知れない。
それから一ヶ月後。私の全てを変える出来ごとが起きたのだ。

最初に異変に気付いたのは廉が家に帰ってきたときだった。廉の頭に、大きな痣があつたのだ。どうしたの？と聞いたら、うつかりぶつけた、とだけ返してきたけど、それにしてはその痣は大きかった。

その時はあまり深くは考えなかったけれど、ある予感がよぎったのはその時からだった。

そして翌日、それは決定的なものとなる。

「凜！」

美玖が泣きそうな顔で私に話しかけてきた。

「どうしたの？美玖？」

「き、昨日ね、廉が……、廉が他の男の子達から……、たくさん暴力を受けてたの……」

廉はやり返そうともしないんだよ、私、もう見ていられなくて・
」

まさかとは思ったけど、本当に廉にそんなことが降りかかって
いたなんて・・・。

「とにかく、廉に話を聞こう」

放課後、やっと廉を見つけられてその事を聞いた。

「もう！どうして相談してくれなかったの？」

ひどく動揺していた私とは逆に、廉は落ち着いていた。

「心配されたんじゃないあ、君を守ることができないからだよ」

私は虚を突かれた感じだった。でもそれは絶対おかしい。

「でも、私達は姉弟でしょ、それにあれはもう五年も前の事じゃな
い！」

「そうか・・・」

しばらくの沈黙。

「帰ろうか」

廉の言葉に私は頷いた。

帰る途中。廉はこんなことを言った。

「経験が少ない人ほどね、自分と違うものを嫌悪するんだ。そりゃ
誰だってエイリアンが来れば怖いし、果敢に話してみようなんて人
は、ほとんどいないんじゃないかな。

それが、どの学校からも虐めが無くならない原因なんだと思う。
しかも、時によって人は敵を必要とするんだ。それは例えば環境問
題だったり、何処かの政府だったりする。人類はそういうものを倒
して発展してきたんだから。

でも、それに関して何が良いのか良くないのかをみんな考えなくなってきた。もしかしたら大人になっても誰かを痛めつけることに罪の意識を持たない人だっているかもしれない」

「それで頭が良いあなたが狙われたってこと？」

「多分・・・ね、魁人が言うように、僕は変な奴に見られてたようだし」

私はずっと疑問に思っていた事を口にした。

「ねえ、廉。なんで廉はそんなことを知っているの？」

「インターネットで調べれば大概の事は分かる。最初はニュースで見でなんでそんなことが起きるんだろって思ってた。けれどもみんなが知ろうとしないだけで、そういう人たちの声無き叫びっているのは、ネット上に溢れているんだ」

そう言っているうちに、私達はマンションに着いていた。十三階に上がるエレベータのなかで不意に廉が呟いた。

「知ろうとすれば・・・」

「知ろうとすれば？どういうこと？」

廉がびっくりしたような表情で振り向いた。ちょっと後悔したような顔で口を開く。

「知ること大事だけど、知らないほうが幸せなこともあるかも知れないなって」

それっきり廉は口を閉ざした。

そして、その夜。

私は廉の叫び声が聞こえたような気がして、飛び起きた。何か悪い予感がする。

廉の部屋を見ると、廉がいなかった。枕元を見ると、睡眠薬が置いてある。もしかして、廉は不眠症だったのだろうか。廉はこの時私の考えが及ばないほど、たくさんのことを抱えすぎていたのかも

しない。

胸騒ぎがして、私は夜の街に飛び出した。学校裏に急ぐ。そこには廉がいた。

大勢の男子生徒に囲まれ、廉は痛めつけられていた。同時に罵詈雑言が投げかけられている。私にはそれがこの世の出来ごととは思えなかった。

男子生徒の一人が、私を見つけた。私は逃げようと思ったけれど、廉の姿から目が離せず、逃げる事ができなかった。そしてすぐに私は捕まってしまった。

「おい、こいつは廉の片割れじゃねえか、見られちゃったな。これを警察にチクられたらまずいぞ・・・」

男子生徒の一人がそう言うと、廉と私を除く全員が頷いた。そうしてこの双子の姉弟をどうしようかと議論がされ始める。

「いつそのこと、殺しちゃうか？」

一人の男子生徒が、拳銃を弄びながらそう言う。何処で手に入れたのだろうか。

「いや、それは駄目だ、そんなことしたら絶対に隠しきれなくなるぞ」

そう言う他の男子生徒の心情が私には分からない。殺すことが怖くないのだろうか。殺すことに罪悪感は無いのだろうか。

不意に、廉の言葉が頭によぎった。

みんなは、自分が幸福であればいいって思ってる。

なんでこんな事になってしまったのだろう。ねえどうして、廉？廉はぐったりとしていた。そんな廉を二人の男子生徒が必要以上に押さえつけている。

「ならこんなのはどうだ？狂っちゃった廉がこいつを殺して、さらに暴れまわった廉を押さえつけていたら、なんと廉は死んでしまいました！っていう筋書き」

それを聞いて廉が弾かれたように顔を上げる。その顔には絶望の表情が浮かんでいた。

「それはいい、そうすれば目撃者はいなくなつて、俺達には害が無い。みんなそれでいいか？」

また廉と私を除いた全員が頷いた。それからほとんどの男子生徒はその場を離れ、無関係を装うことにした。

男子生徒の一人が、廉に無理やり拳銃を握らせようとする。その時だった。

廉が自分を抑えている二人を押しつけ、銃を握らせようとする男子生徒を殴った。全く信じられないほどの力だった。そうして一発で昏倒した男子生徒から銃を奪った廉は、叫び声を上げながら銃を撃ちまくった。

廉は信じられないほど正確に、男子生徒達の頭や胸を撃ち抜いていく。その場に残った六人は、あつという間に崩れ落ちていった。

「廉、いつの間に銃を使えるようになったの？」

私は六人を撃ち抜いて、後悔するように銃を見つめている廉に最初に言った言葉は、そんな疑問だった。

「僕達の母さんを殺したのが銃だったから。もしも銃を持っている人に君が狙われても守れるように、銃も含めて訓練していたんだ」

「だったら、なんで学校で暴力を振われた時に、抵抗しなかったの？」

「昼間にインターネットでは傷つけられている人達の声があるって言ったよね、僕はそんな人達を助けたいって思った。それで同じ境遇になったら正しい助言をできると思ったんだ。そしたら、彼らの暴行はだんだんエスレートしてきて、いつかは止めたほうがいいと思ってたんだけど、まさか夜中に待ち伏せされるなんて思わなかった。君が殺されそうになるなんてことも。結局、僕はこんなに人を殺してしまった訳だけだ」

「でも、廉は正しいよ！だってそうしなきゃ、私達はどうなったか・・・」

「理由は関係ないんだよ、僕は人を殺したんだ。自分が一番嫌悪し

ていたことをやったんだ。それに、僕はこの世界が好きなんだ、だから、そんなことをした人がここにいやいやいけない。死ぬぐらいじゃないと、この世界を愛してるって言うことはできない」

「廉！そんなことを……。そんなの……。絶対おかしいよ！駄目。もし廉がそんなことをしたら、私も死ぬから！」

私がそう言ったら廉は悲しそうな顔をした。

「君は生きるんだ。凜。君は死んじやいけない。五年前、君に言ったことだよ。君にはもう五年前の事だろうけど、僕にとっては昨日の出来事のような事なんだ」

そして廉が私に銃を向けたので、私は凍りついたようになった。

「それに君は知っているよね、君の知っている僕は銃なんか使えないし、こんなふうに君に銃口を向けたりなんかしない。これは夢だよ、悪い夢だ。さあ家に帰って寝るんだ」

そう言う廉の顔は今まで私が見たことの無いほど怖い顔をしていた。そして銃を向けられているという恐怖が私を支配した。

私は言われるがままに背を向けて走り出す。

自分の部屋に戻って布団を頭まで被った。大丈夫、廉は必ず戻ってくる。きっと、いつだって廉は帰ってきてくれた。

その朝。

街で七人の少年の銃殺体が発見されたというニュース。

その中に鏡音廉の文字

私は廉を死に追い詰めた。あの場に居合わせたことによって。

その日から、私は寝ることが怖くなった。

その日から、私は廉の言葉の意味を何処までも考えるようになった。

その日から、私は一人になった。
そうして、

魁人は廉が好きだった音楽に没頭した。廉の気持ちが知りたくて、美玖は塞ぎ込んだ。彼女は廉が好きだったのだ。それから廉の代わりに、と勉強に没頭した。廉が何を見ていたのか知りたくて。

瑠香は、変わらなかった。廉が帰る場所になるかのように。

親族が私だけの葬儀には皆が来てくれて、皆廉のために泣いてくれた。けれど、私はその全てに現実感が無く、ただ茫然とするだけだった。

すぐに私は睡眠不足で、とても勉強ができる体調ではなくなった。学校に通っている身だから、睡眠はちゃんと取らなければならない。だから私は医者に懸かって睡眠薬をもらった。けれど効果は長続きしなかった。

ある夜、廉がそうしたように夜の街を出歩いていると、エーテルという薬をもらった。使ってみると、ちゃんと睡眠がとれ、授業にも集中できるようになった。

その結果、私はそれを止めることが出来なくなった。典型的な薬物中毒。そうして私は私自身を少しずつすり減らしていき、いつしか私は抜け殻のようになった。廉がいなくなった今、そうなるまで時間はかからなかった。

不意に廉のよくしていた高次元核融合炉のことを思い出して、その日、私は夜の街に出かけた。そうしてあいつに会ったのだ。

「おい、凜、また夜歩きしてるのか？」

贖罪だったのだ。

私が「僕」を名乗ったのも。

「君」の首を絞める夢を見たのも。

彼女の罪は忘れ去られようとしていた。

それは彼女への断罪であり、また赦しでもあった。
ならばその罪が贖われるのは誰の為であろうか。

三、喪失（後書き）

三話で凜自体の謎が明かされるわけですが、ここでの屋上から見た風景というのは、現代と意外と変わっていないのです。もし今、核融合炉が発明されたらどうなるのかを想像してみると面白いかもしれません。

四、逃避

気が付くと私は自分の部屋にいた。わざわざもとの所に戻るなんて、なんだか都合のいいことだと思った。

記憶を無くす前の私は廉れんを死に追いやり、あとちよつとで不眠症と薬物中毒で既に普通の生活が送れなくなっていた。

多分私はいつ死ぬか分からない身だった。私の父がそうだったように。けれど私は都合のいいことに、記憶を一度無くしたことで不眠症と薬物中毒は無くなってしまった。

だから私は都合のいい考え方をする。廉が私を救ってくれたんだって。あの日廉の言ったことを思い出して「聖域」に行つてなければ、私は薬物中毒で既に死んでいたかもしれない、と。

そしてあの場になければ、廉は死ぬ必要は無かったという可能性。あの時からずっと存在していた考えが浮かんだ時、不意に瑠香の声が頭の中で再生される。

私は背中を向けて逃げてしまった。彼と向き合うことができなかった！

そうだ、私はあの時「背中を向けて」逃げだした、廉と向き合わなかったのだ。それは彼女をずっと苦しませてきた罪ではなかったか？

私は激しい自己嫌悪に苛まれた。そこに落ちていたナイフの先端をおもむろに左の手首に突きたてようとした。しかし、飛び降りる前と同じようにナイフは私を傷つける前に消えた。

今、私は死ぬことができない。

私が今できるのは、生きることと、廉への贖罪、廉を死に追いやった者として。

だから私はこうすればいいと思った。私という存在を「ここ」から消し去ってしまえばいい、私で無くしてしまえばいい。生きたまま、鏡音凜かがみねりんではない誰かとして、私を殺し続けることによってこの

罪を贖うのだ。

どう考えても狂った思考。私は自嘲的な笑みを浮かべた。

私は廉のいた部屋に入る。目にとまったのは、廉がいつも着けていたお気に入りの首輪。

あの時これだけが私の元に帰ってきた。廉の形見。廉がいなくなっ
てから、私が記憶を無くすまで、一時も放さなかった首輪。

私はそれを自分の首に着けて、部屋を出た。

私がエレベーターに乗ろうと廊下を歩いていると、恐らく同年代
であろう女性と鉢合わせになった。

「久しぶり、凜・・・」

この声には聞き覚えがあった。

そうだ、私達とは違う道を歩むことになった廉の友達。

はつねみく
初音美玖。あの時よりもずっと大人っぽくなっているし、眼鏡を
掛けていた。どうりですぐには気が付かなかったわけだ。

「ニュースで見たよ、記憶喪失になったって、それにあの事件の事
も」

美玖は思いつめた様子で言った。

「正確には記憶喪失『だった』ってところね、さっき記憶は取り戻
したの」

この街を出ようとした矢先に友人に再会してしまうとは、なんと
も間抜けだ。ついでに話している場所はさっき出たばかりの私の部
屋。私は心の中で苦笑を洩らした。

「そっか、それならよかった。でも凜、私ね、一つだけ聞きたいこ
とがあるの」

「なに？」

妙にもつたいぶった口調。私はちょっとじれったくなった。

「あなたが記憶を無くした時に、どういう光景を見たかってことな

んだけど……。凜はそれを誰にも話していないようだったから・
」

「どうして、私が何かを見たって思うの」

驚き。少なくとも、私は記憶を無くした時に見たあの光景を誰かに話したことは無い。どうして美玖はそんなことを思いついたのだろう。

「あの事件のことで、私なりに調べてみたの。それで、多分あなたはどこかの別次元と繋がっているんじゃないかって考えたの。変な事だっと思うけど……」

ここでも私は驚いた。美玖は大学教授と同じ結論を出したのだ。

美玖はこれまで私にたかってきた無知なマスコミとは違う。そう確信して、私は美玖にこれまでの事を話してみることにした。

どこまでも広がる空と海。そして真っ赤な太陽のようなもの。

「……もしかしてそれって」

明らかに動揺している美玖。

「何か知ってるの？」

「う、うん、でもそれって、あの高次元核融合炉のある空間そのままじゃない……」

私は咄嗟に廉の言葉を思い出した。核融合炉が作られた時、その世界創生。

「だとしたら……。凜はいま核融合炉のある空間と繋がっているのかもしれない。でも、おかしいわ、あの空間を作ったローラ・ゼ口はあの空間には誰も入れなくしていたのに」

言っていることがまるであの時の廉のよう。なんとなく美玖が遠くへ行ってしまったような気がした。

「そのことでね、凜。一つお願いがあるの」

またしても、もったいぶった言い方。

「私は今、他の国で高次元核融合炉の研究をしているの。この世界の主要なエネルギーなのに、その原理を知っている人はもうほとんど、いや、もういないの。だから研究する必要があるっていうのが

私達の考えなんだけど、それでね、凜、あなたに……」

「要するに、私にその核融合炉のある空間に入れる人として、協力して欲しいってことでしょ」

私はうんざりして言うと、美玖が後ろめたそうな顔をした。

「そう……。私は今、南米の『境界』って呼ばれているところで研究をしているわ。まだ入ったばかりで、手伝いしかできないから詳しいことはよく分からないけど。でも話を聞く限り核融合炉のある空間に入れないことが研究の妨げになっているの。それで凜と一緒に研究所に来てほしいのよ」

またしても驚き。「境界」と言えば高次元の研究の最先端の場所、この世界の動力源を研究しているがゆえに国際的な権限すら持っているぐらいの研究所があるところだ。

出鼻を挫かれたと思ったらその逆だった。ここから消え去るのに願いい叶ったりな理由。

「いいわ、でも一つだけ条件がある」

そう言うと美玖は不安げな顔をした。

「私を『境界』に連れていくときに、私の記録を全部消してほしいの」

美玖が驚愕の表情を見せる。

「どうして？」

「そう言う風に聞くとことは、それが可能ってことね。流石は『境界』の研究員様」

美玖が動揺した表情になった。どうやら凶星。

「どうしてって？それはね、私が廉の死んだ理由を作ってしまったからよ、だから私は鏡音凜っていう存在を消し去りたいの」

「違う！廉は虐められてたからあんなことになった。怒って当然だった！あなたは関係ない！」

美玖の露骨なまでの否定。

「そうだったね……。美玖は知らなかったものね。廉はね、廉がリンチされていたときに私がその場にいたから、それを利用しよう

とした男子生徒達に私と一緒に殺されそうになった。廉が私を殺したことにすればいいってね。そして銃で私を殺そうとした奴の銃を奪い取って六人を殺したの。そう、私があの場合にしなければ廉は殺すことも死ぬこともしなくて良かった」

「そんな……。そんなこと嘘よ！」

「美玖がどう思っても、関係無い。さっき美玖は言ったよね、私は核融合炉の空間と繋がってるって。もしこの条件が呑めないんだつたら、私は核融合炉に飛び込むわ。だって、もともと廉はそれを望んでいたもの」

「そんなの……。絶対おかしいよ！」

三年前に私が廉に言ったことと全く同じ。私は少し廉に近付けた気がした。

しばらくの沈黙。やがて美玖が口を開いた。

「わかった。凜を核融合炉に飛び込ませるわけにはいかない。条件を呑むわ。だから私と一緒に来て」

私は静かに頷いた。

相変わらず暴力的な光を発するビルのネオン。星すら見えない。まるで暗闇が自分達を殺すんじゃないかって怯えているよう。

人が暗闇を怖がるのにはね、理由があるんだよ。

不意に廉の声が蘇る。

僕達は一人で生きていくことはできない。別にそれは恥ずかしいことでもなんでもないし、当たり前のことなんだ。だから人はコミュニティを持つ必要がある。

それで、暗闇っていうのはね、人にそのコミュニティからの孤立をわずかでも連想させてしまうものなんだ。生きるための何かを失っている状態をね。

だから人は暗闇を怖がる。暗所恐怖症はその極端な例。まあ他に

も理由はあるだろうけど、一寸先は闇って言葉があるように、闇は不確定要素だらけだしさ。

でも不思議だよね、自分の幸せしか考えられない人がたくさんいて、自分だけで生きていけると思っている人も大勢いるのに、人は暗闇を恐れてる。どうしようもなく物事を照らそうとしてしまう。

廉は私達の中だけの哲学者だった。私は廉に多くの事を教えてもらったし、今の私があるのも廉がいたからだ。それは美玖も同じだった。

美玖の研究のことを聞いた後、私は美玖にどうして美玖は核融合炉のことを研究しようと思ったのかを聞いた。核融合炉が正常に作動しているんだったら、どうして研究しているのかって。

廉が最初にケンカ、といっても一方的にやられてたわけだけど、そのときに男の子の一人が廉にこう言ったの。おまえは人と違うことをすればいいと思ってるのかって。

そしたら廉はその男の子に、こう言ったの。確かに人と同じことをしていればこの社会の仕組みに入り込むことができる。けれどそのままじゃ前に進めないんだって、誰かが同じことだけじゃなくて周りと違うことをしないと新しい物を生み出せないって。だから周りと違うやつが一人ぐらいいたっていいじゃないかとも。

核融合炉の研究をするって言った時は周りに反対されたわ、凜の言っていた通り、核融合炉は問題無く作動してるしね。でも、それじゃ駄目なんだって思ったの、その場の事に身をゆだねるだけじゃなくて、知ろうとしなきゃいけないんだっていうことを廉は教えてくれた。だから私は核融合炉のことを知りたいって思ったの。そう思えたのも、全部廉のおかげだと思う。

そう言う美玖は、あの時みたいにすごく楽しそうで、誇らしげだった。そんな美玖に私はもう一つ言ってみたいことがあった。

「美玖は廉のことが好きだったんでしょ、隠してたつもりだったらしいけど、私と瑠香は気づいてたわよ」

そう言う美玖が赤くなった。凶星、本当に分かりやすい。

「う、うん。だから廉がいなくなってしまった時はすごく悲しかった。でも、廉が言ってくれた言葉を思い出して、私は立ち直ることができたの、前に進まなきゃって」

大切な人の死を乗り越えて、新たな道を踏み出した美玖と、それに囚われたままの私。

美玖に会ってから、「境界」に行くまで十日の猶予があり。そして今日は出発の前日。

私は誰にもこのことを言わなかった。私はここで最後に見たかったのはあの「聖域」。私の全てが急速に変わった場所。他を目に収める必要は無い。

その「聖域」にいたのは、以外なことに魁人だった。

「なにしてんのよ？」

魁人はびくつとして振り返った。

「なんだ凜か。新しい曲がなかなか浮かばなくてさ、気づいたらここに脚を運んでた。それよりなんでもまえがこんな時間にここにいるんだよ。まさか記憶が戻ったせいでまた不眠症になったとかじゃねえよな？」

「残念ながら違うわ。気分よ、気分」

「だったら早く帰った方がいいんじゃないか？」

魁人の呆れたような返答。そういえば前から魁人に聞いてみたいことがあった。

「あんたさ、廉の気持ちが知りたくて音楽を本格的にやりだしたんでしょ。で、今まででなんか分かったことはあったわけ？」

私がそう聞くと、魁人は少し肩をすくめる。

「実の所、あんまわかってねえな」

「情けないわね、呆れたわ」

魁人が余計な御世話だ、というように顔をしかめる。

「ま、廉が歌で誰かを幸せにすることに喜びを感じていたことは明らかだな、おまえを元気づけられたって俺に自慢しにきたこともあったぐらいだし」

ちょっと意外。廉が魁人にそんなことを自慢していたことがあったなんて。

「でも、あいつが言うことって少し矛盾しているように思えることもあるな。みんなが一つにならなきゃいけないって言ってる割にはそこに身をゆだねるだけじゃ駄目だって言ったりとか。今思えば、あいつは俺達よりも純粹だったんじゃないかな。俺達が諦めていることを、あいつはなんとかして解決しようと思っていた。たとえばそれが矛盾していても、そうあるべきだと信じていた」

しばらくの沈黙。目の前には三つの欠けた三角と一つの丸。

「それにしても、おまえがこんなことを聞くなんてな、それに、夜歩きをしてるってことは、なんかあったな？」

「別に」

私は慌てて否定する。

「いいや、おまえはなんの理由も無く『聖域』に来たりはしない。なんか隠してるな」

どうやら隠しきれなさそうだ、魁人のおせっかいぶりには本当に困ったものがある。

「明日。私はここからいなくなるのよ」

魁人の訳が分からないといった表情。

「どういうことだ？」

「九日前、美玖が私の所に来て、核融合炉に関する研究の協力をしてほしいって言ってきたの。この前の事件のことで、私は核融合炉のある空間と繋がっているかもしれないから。」

それで私は明日、美玖と一緒に南米の『境界』に行くことになったの」

「おいおい、突然すぎるだろ。学校とかどうすんだよ。なんで俺達に相談してくれなかったんだよ！」

「そのことなら何の問題も無いわ。もうじき、私はこの世に存在しないってことになってる人間になるの」

「どういうことだ」

「あんたは廉が死んだ時のことを知っているわよね。だからよ、廉は人をたくさん殺した人間がこの世界にいやいけないって言った。だから廉が死ぬきっかけを作ってしまった私がこの世界に存在してはいけないの。それで私は国家級の研究所に協力するかわりに、私の存在を消し去ってしまうように頼んだの」

「そんなこと美玖が受け入れるわけないだろう」

魁人の必死なおせつかい。

「いいえ、私はその条件を受け入れないんだったら、今私が繋がっている空間に、核融合炉に飛び込んでやるって言ったの。そしたら快く受け入れてくれた」

魁人が愕然とした表情になる。

「核融合炉に飛び込んでみたいっていうのは本心よ、きつと真っ青な光に包まれてキレイになれる。そして真っ白に記憶は溶かされて私は消えることができるんだから」

「凜・・・」

「だけど廉には生きなきゃ駄目って言われてるし、核融合炉のことを知っておきたいってことも本心ね。まあその代わりに、私は死んだことになるんだけど」

「そんなの、納得できねえよ！」

「だけどあんたが止めるっていうのなら、私はここで核融合炉に飛び込むことができる。丁度ここは核融合炉の裏側だから」

魁人が絶望的な表情を浮かべた。

「残念だけど、もうあんたに会うことは無いでしょうね。あ、そうだ、あんまり私が生きてることを他に話さないほうが身のためよ。」

一応核融合炉の研究は国家機密だしね」

重苦しい沈黙が流れる。やがて魁人が口を開いた。

「わかった。おまえが生きてるんだったら文句は言わない。何処にでも行っちゃえ」

それを聞いて私は踵を返した。頭だけ半分振り返って口を開く。
「あんたはせいぜい元気でいなさい。廉のことを知ってる数少ない

人なんだから。美玖は廉の言葉で核融合炉の研究を始める決意をしたのよ」

魁人が虚を突かれた顔をする。

「凜……」

「さよなら。廉はもうここにはいないけど、廉を死に追いやった人間もここから消える。私のことは忘れて、せいぜいギターをかき鳴らしてなさい。あんたのギターで伝えられることは何かあるはずよ、廉が私達に歌を聞かせてくれたみたいに」

そして私は歩き始めた。なんだかやり遂げた安心感が広がる。なんだ、私は思っていた以上に未練を持っていたじゃない。

と、魁人の言葉に足を止める。

「俺達はおまえのことを忘れねえぞ！おまえが廉を頼っていたようにな、廉もおまえがいたことで強くいられたんだ。そんなすげえやつのことを忘れるわけねえんだよ！だからおまえは安心して美玖の手助けをしてやれ。廉とおまえを覚えてるやつがここにいるんだからな！」

ここで私は自分が涙を流していることに気が付いた。私は自分が消えればいいと思っていたけど、やっぱり誰からも忘れ去られるのは怖かったのだ。

「おまえが廉に対して悪いと思っっているんだったら、おまえも廉のことを想い続けてやれ。何を忘れてもだ。それだけは絶対に忘れんなよ！」

本当にどこまでもおせっかいなやつ。だけど……。

「ありがとう」

私はまた歩き始めた。もう振り返ることもなく。

人類は彼女の罪によって生かされることとなった。
しかし彼女の罪はすでに忘れ去られ、すり減っていき、

その罪は人類に受け継がれた。
それこそが彼女の生きている証であり、
その罪を背負うのも彼女のはずだった。

四、逃避（後書き）

四話でこの話は折り返し地点を迎えます。四話までは凜の過去の話が語られますが、ここまでが一番の歌詞を反映している部分です。五話からは間奏の部分とか完全に私の想像が入ります。言ってみればラストまでのフラグの部分でしょうか。

五、代替

朝起きたら鏡を見る。

老若男女問わず多くの人が行うこの行為は、いつの頃から行われるようになったのかは分からない。それぞれの人には、顔を洗うとか、くまがあるかどうか見るとか何か理由があつて鏡を見ているだろう。

とにかく鏡に映る自分を見て、今どんな姿なのか、それを知ること
でひとまず安心したりするわけだけれど、私の場合は疑問が生まれるばかりだった。

鏡を見て、何を一番気にするかといえば、目だ。
はつきりした理由はないけれど、恐らく私にしか見えていないものがあることを意識し始めたことがきっかけだと思う。

鏡に映る私は、二年前から比べてずっと大人びた雰囲気纏っている。

この目が、「あれ」をみているのか……。

二年前、私が「聖域」の前で倒れてから見るようになったあの蒼い空と碧い海。それらが少しずつ赤みを帯びてきているのは一年前からだ。そのことに関して、「境界」の科学者達はいまだに何が起きているか結論を出せないでいる。それはあの空間内での何かの変化なのか、それとも私自身の問題なのか。

と、いつふうに私は鏡を見るたび疑問に思うのだ。

身支度を整えて、朝ご飯を自分で作るうか、それとも食堂に行つてようかと悩んでいると、扉が誰かにノックされた。どうぞ、と言つと一人の少女が扉を開けて入ってきた。

「おはようございます。美玖^{みく}さんがローラ^{みく}さんと呼んでいますよ。何か分かったことがあるそうです、とにかく106号室まで来てください」

「凜^{りん}」という人間を消し去ることを協力条件にした女を、ここ、

「境界」の科学者達はローラと呼ぶことにした。なんでも核融合炉と唯一繋がりを持つ人間だからだそうだけれど、廉の最も尊敬していた高次元核融合炉を作った人の名前で呼ばれるのは、少し変な感じがする。もつとも、もう慣れたことだったけれど。

「わかったわ、グミちゃん。相変わらず二人とも早起きねえ」

私はそんな呑気なことを言いながら緑の髪をしたこの少女に笑顔を向ける。しかしグミはにこりともせず、

「ローラさんが遅いんですよ」

と言って背を向けるとすたすたと歩いて行ってしまった。

そういえばグミはまだ十四歳、反抗期真っ盛りだったわね……。なぜそんな少女がこんなところにいるかという、それには少し複雑な事情がある。

一年半前、この付近で誘拐事件が起きた。グミはまさにその時、人質として武装勢力に捕らえられてしまったのだ。それから届いた武装勢力の犯行声明には、身代金の要求の代わりに奇妙なことが綴られていた。

レオン・ゼロを連れてこい、と。

レオン・ゼロ。約一世紀前、高次元核融合炉の存在を発表した人物と同姓同名にして、高次元核融合炉の研究の第一人者。その名前と実績から、現代では知らない人はほとんどいない「偉人」だ。しかし、彼はその四年前に亡くなっている。

この世にいない者を要求する。これは明らかに犯人側は人質を解放する気が無い。

すでに犯行声明が送られてきた端末を逆探知して、そいつらの潜伏先を見つけていた保安部隊は、そう判断するとすぐにそこに突入した。

最新鋭の兵器を動員していた保安部隊は、あっという間にグミを救出し、武装勢力を壊滅させた。交渉の余地が無いからこそできた荒療治だったけれど、保安部隊にとっては周囲の脅威を取り払う絶好の機会であったことは間違いなかっただろう。

結果的に、グミはいくつか打撲を負っていたものの、五体満足で解放された。しかし、心に容易には治りそうにない傷を負っていた。ほとんど何も話そうとしない彼女は、親の所在も分からないため、カウンセリングを受けてから「境界」付近の孤児院に通う予定だった。

しかしカウンセリング中にあったある出来事によって彼女の運命は大きく変わることになる。それは彼女の記憶が若干の混乱状態にあることが分かって、そのリハビリのためにやっていたあるテストでの出来事だった。

紙に自分自身の事を書く。たとえば特徴だったり、好きなことだったり。その内容は特に決まっていなくて、ただ単に書くためのものを渡すだけ。とにかくそうすることで記憶を整理していくということで安定を促すこの単純なテストで、グミは常識では信じられないことをやった。

核融合炉からエネルギーを供給する装置の構造を、本物とほとんど同じぐらい精密に書いたのだ。いわばそれは設計図そのものだった。

国家機密である核融合炉の周辺機器の構造を知っているだけでも驚くべきことであつたけれど、それを設計図として書き起こすというのは、まったく信じられないほどの記憶力だった。

その話が「境界」の研究所長の耳に届き、所長は大変感銘を受けた。そして、彼女に保護と高度な教育を約束する代わりに研究所に来ることを持ちかけたのだ。

そうして、グミは「境界」の研究所にやってきた。

ここに来たばかりのグミは、必要なこと以外全く話そうとはせず、自分の殻に閉じこもるようだった。まるで信じられるものをどこかに取り落としてしまったかのように、誰に対しても心を開かなかった。

けれど彼女にとって「学ぶ」ということは何にも代えがたい光になった。一つの数式を覚えるたび、一つの法則を理解するたび、グ

ミは周りの大人に心を開いていったのだ。

まだ人見知りをしたりはするけれど、私に少し反抗するということとはそれだけ心を許しているっていうことだろう。

・・・と、美玖が待っている。106号室まで行かなきゃ。

「おはよう、凜。待つてたよ」

「・・・遅いです」

美玖のいる研究室に入ると、笑顔とふくれっ面。対照的な表情を浮かべた美玖とグミがいた。

「ごめん、ちょっと考え事してて・・・」

「言い訳はよくないです」

グミが無然とした様子でそう言ったので、私は肩をすくめた。相変わらず手厳しいというかなんていうか・・・。

「まあまあ、そう言わず、本題に入りましょう？」

美玖がそう言って話し始めた。

「凜が核融合炉のある空間と繋がっているっていうのは前話したよね。二年前のあの事件で、凜を刺したナイフが持ち主の手ごと異空間に飛んで行ってしまった。これがこれまで私達が立てていた仮説だったんだけど、それだけじゃ説明できないことがあるの」

この研究所で私を「凜」と呼ぶのは美玖だけだ。私はずっとやめてくれと言っていたのだけれど、美玖は絶対に私をローラとは呼ばうとしなかった。結果、私が根負けして今に至る。

「一つはナイフの持ち主の手が消えたのにも関わらず、そこが傷にならずにきれいに手首だけになっていたこと、もう一つは凜自身が傷を負わなかったことよ」

確かに考えてみればおかしいことだ。あの男の手が別の空間に飛んで行ってしまったならそれは手を切断されたのと同義義。それなのに出血すらなかったというのは矛盾している。なにせあの男の

手は最初から無かったかのように消え去っていたのだ。

「凜以外の人が異空間と繋がるのは、あの事件のときのように何か
が凜の体内に入った時、それがどういう選別基準なのかは分からない
けど、そうして凜に害を成したものは、異空間側に吹き飛んでしま
う。でもこの時、凜は必ず傷を負っている。本当だったら凜を刺
した男も凜自身も重傷を負っているはずなのよ。凜を『傷つける』
ことが異空間に飛ばされる条件なのなら、これは明かにおかしいわ」
美玖がここで口を止めた。それから少し申し訳なさそうな顔で、
「ごめん、ちょっと話が唐突すぎたね、理解できてる？」
「多分」

この研究所での話は相変わらずややこしいものばかりだけれど、
慣れることはなさそうだ。今回はまあ矛盾しているのが分かっただ
けもいいほうだろう。

「・・・じゃあ続けるね。それで今回、高次元核融合炉の空間がも
う一つ特性を持っていることが分かったの。実は・・・」

こうやって美玖がもったいぶった言い方をするのは、この先が大
事だということだ。私はつぎの言葉を少し注意して待つ。

「あの空間は、過去改変を行う機能を持っているのよ。凜が傷を負
わなかったのも、あの空間が、凜が刺されたことを『無かったこと
に』してしまったからなの。しかも、その力はものすごく強くて、
多少矛盾が起きてももつとさかのぼったところから過去を変えてし
まう。あの男の腕は多分前からなかったってことにされたんだわ。

この力ってというのはね、高次元核融合炉がちゃんと機能するため
に欠かせない機能なの。

いくら制御が出来るっていつても、核融合をしている近くに機械を
置いたら、すぐに壊れてしまうわ、その度に、核融合炉は故障を無
かったことにし続けている」

無かったことにする。

普通に聞いたら。子供の絵空事のように聞こえるような話だ。この
研究所に来てから聞くことはぶっ飛んでいることばかりだけど、ど

うやら慣れることはなさそうだ。

それにしても、過去を改変してしまうなんて、なんて都合のいい話だろう。

「過去改変の力が強いっていうことは、核融合炉を作ったローラ・ゼロがそれだけ強く望んだってことでしょうね。もしかして、彼女自身も何かやり直したい過去があつたのかしら？」

ここで、ずっと黙っていたグミが言葉を発した。

「死んだ人間を生き返らせることはできるんでしょうか」

ある意味ぶっ飛んだ質問を、美玖は真剣に考えて答えた。

「死んだ人を・・・か。もしその人が高次元核融合炉の空間でそう望めば・・・でも・・・意思があるのかどうかも分からないし、死んだ人は少なくとも私達の世界にはいないわ。」

どこかで・・・天国みたいなところにいるっていう話は信じたいけど、この世界にいないんじゃないかとえ意思があつたとしてもどうしようもないわ」

これを聞いて、私は不意に廉のことを思い描いた。

死んだ人間の意思は決して私達には伝わらないし、その人が生き返ってほしいと願うのは本人ではなくあくまで私達だ。そう考えたとき、私が二年前から凜という人間捨てたのはどういう意味を持つのだろうかという考えがふと浮かんた。もしかしたら私の意思も廉には伝わらないかもしれない、だとしたら私が今やっていることは完全な自己満足、どんな大義名分だつてありはしない。

いや、そんなことはずっと前から分かつてたはずだ、いまさら意識するなんて、私はなんて身勝手な人間なんだろう。

そんなことを思つて、わたしは心の中で苦笑した。

「それにしても、グミちゃんがそんな質問をするなんてちょっと意外ね」

美玖がそう言うと、グミはちよつと慥然とした顔になった。

「ちよつとした興味です。自然の摂理と呼ばれているものに高次元核融合炉が反しているのかどうか知りたいと思っただけです」

何ともグミらしい理系的返答。死んだ人間が生き返るのは無条件で嬉しいと思うのが普通だと思うけど、そんな理屈でこんな質問をするなんて、やっぱりグミは変わってるなと思った。

だから私はすこしからかってやりたくなった。

「過去を変えちゃったりする時点で、思いっきり自然の摂理に反してるとおもっけどなあ」

「過去を改変するのは、度合が問題です！事情を変えるのと、存在すら変えたりするのは大変さがぜんぜん違うんです！」

そうやって必死になって自分が正しいんだと熱弁するグミは面白い。魁人の時とはまた違った感じだけど、この他人をからかう癖が無くなることは当然なさそうだ。

その時、突然、幾度となく私の人生を狂わせてきた最悪の音が外で鳴り響いた。

銃声だ！

「私、見てくるね」

美玖とグミの反応を確認することもせず、私は駆け足で研究室を出た。

今までは銃に怯えているばかりだった私も、今となっては完全に銃は怖いものではなくなっていた。それはこの研究所で分かったことが関係している。

いた！研究所の入り口に、機関銃を持った数人が立っている。その足元に、あの銃声と同時に人生を終わらせられたと思しき警備員が転がっていた。

やりやがった・・・。

私はそうつぶやき、私がこれからできることを考えた。観察すると、人数は四人、そこまで重装備はしてなさそうだった。

あの武装集団から銃を奪って打ち殺すのはどうだろう。いや、それ

は私の腕力じゃ無理だし、それは絶対やりたくない。廉はそれで死ぬ道を選んだのだ。

だったらどっちもこれ以上被害を与えないようにしよう。

普通なら、多少の殺生は覚悟してこちらが被害を受けないようにするものだが、私にとってそれはできない相談だった。

私は核融合炉のある高次元空間上に意識を飛ばした。一瞬だけ見える蒼い空と碧い海。

そして私はやつらのすぐ近くに現れた。

この研究所で分かったこと。核融合炉のある高次元空間は、人意思により自在に形を変える。

流石に核融合炉本体は作者の強い意志で守られているから、私には手出しできないけど、それ以外ならいくらでも操作できる。私は一年がかりでやっと一瞬だけ自ら高次元空間上に入ることができるようになり、目に見える範囲なら高次元空間を通じて一瞬で移動できるようになったのだ。

いきなり現れた女の存在に、この武装集団は大いに困惑した。けれどこいつらは日ごろよく訓練されているのか統率されているのか、すぐに無言で私を撃った。しかし弾丸に私は傷つくことは無い。いや、傷ついてはいるんだけど・・・って、ああもうまどろっこしい！

そしてさっきわかったこと、私を傷つけたものは高次元空間に飛ばされるか、そこに無かったことになる。私が傷を負った事実と一緒に、消えてしまうのだ。まったくなんという都合のいい話。

当然、私に銃を向けたやつらは驚愕の表情を浮かべる。当たり前えんだけど、銃を撃って穴が開かなかった相手は初めてだろう。

それにしても銃声というのはいつ聞いてもいやなものだ。そこで私は音を止ませるため、試しに不敵な笑みを浮かべてみた。効果はテキめん、この武装集団はまるで化け物に会ったかのような悲鳴を上げて退散していった。

こんな乙女にあんな悲鳴をあげるか、普通。

逃げていく武装集団を見ながら、私はそうとひとりごちた。

「助かったよホント、あのまま押入られたらたまったもんじゃなかったね。感謝するよ」

「警備が甘すぎるんじゃない？四人程度の集団に入り口を突破されるなんて」

この研究所の所長という割には、なんだか軽い感じのこの男の言動に呆れつつ、私は言葉を返した。私の指摘に所長は肩をすくめる。「いや、あいつらはプロだったよ、ふつう荒くれ者っていうのは人数に任せて押し寄せる感じだから対策も取りやすいのだが、あの四人はほとんど監視カメラに映らなかったんだ。ところで知っているかい、四人っていうのは潜入部隊として最も適した人数で・・・」

「言い訳はよくない」

そうやって話を別のところに持っていこうとするミリタリーマニア気味の言動を、私はグミの言ったことをまねて遮った。所長はさもありなん、といった様子で頷いたが、気にする様子も無くまた口を開いた。

「ま、警備不足だっていうのは認める。しかしこっちの身にもなつてほしいものだね、最先端の研究とはいえ、未だ必要とされてない研究にはあまり資金は回ってこないんだ」

「国家級の研究所がそんなって、なんだか情けないわね」

所長はまったく、といった様子でまた肩をすくめた。そしてまた口を開く。

「それにしても、あの四人が逃げる様ときたら爽快だったね、まるで化け物に会ったような悲鳴を上げてさ」

「こんな乙女にね」

私が口を尖らせて言うのと所長は吹き出した。

「まったく、今の君にはどんな兵器も通用しない。この調子じゃ、我々の研究が使われるのは当分先になりそうだ」

私が化け物か何か何かのような言い方をされて、少し傷つく。私は腹いせに皮肉を言っちゃった。

「ならなんでこんな研究してんのよ？」

私の皮肉に対して所長は真顔になって答えた。

「今使っているものの本質を理解しようとしなのは、まさに人間の愚の骨頂だよ。君なら知っているだろうが、一世紀前の原発事故は、整備不良や無謀な設計によって事故が起きた。なんでそんなことが起きたと思う？運営している側が、その危険性を知らうとしなかったからさ。結果、大惨事ってわけ。君の双子の弟も、それを誰かに伝えたかったんじゃないのかい？」

急に廉のことを持ち出されて、私は黙りこくってしまった。全くこの男は本当に配慮に欠ける。

「ま、こう言い合っても仕方がないさ。せつかく君が危ない奴らからここを守ってくれたんだ、何か君の頼みごとを聞こうじゃないか」

所長はそんな私の胸中を嗅ぎ取ったのか、話題を変えた。

「そうね……。じゃあまずは今回来た武装集団は何者だったのかを教えてもらおうかしら？」

「おっと、言い忘れていたよ。衛星写真で確認したところ、やつらは『真実の火』と名乗っている集団のようだ。言ってみれば、高次元核融合炉の研究をしている我々を目の敵にしている集団ってところかな。核融合炉自体に恨みがあるのか、それとも宗教的な何かか、理由ははっきりしていないけど、最近勢力を急速に拡大しているらしい」

「迷惑な連中ね」

「まっただ」

所長は大仰に肩をすくめた。

「じゃ、もう一つの頼みごとをさせてもらおうかしら」

所長がどうぞご自由に、といった様子で頷いたのを見て、私は前から文句を言おうと思っていたことを伝えた。

「境界の外で散歩させてもらえないかしら」

道いっぱい立ち並ぶバザール。そしてそこで買い物をする人、人々。

通販とかで食材を注文することが多かった私にとって、これは新鮮な光景だった。もつとも、この辺でバザールが立つようになったのは高次元核融合炉ができた後だけだ。

高次元核融合炉が出来てから人類が最初に行ったことは、環境の修復だった。遺伝子組み換え植物による土壌汚染物質の除去、無害化。そして植林などのつじつま合わせ。

それらの努力が、思い思いの環境を作り出していった。

そうしてようやく安心して暮らせることが分かったと、自称先進国達は核融合炉を使って新たな歴史を刻むことを高らかに宣言した。

しかし、全ての国がそれに賛同したわけでは無く、そういう国の言い分はこうだった。せつかく自分達が住んでいた元の環境が戻ったのだから、いまさら核融合炉に頼る必要は無い。自分たちは自分たちの暮らし方をする。

そのような地域はそれぞれの伝統的な暮らしを守ったりして、しだいに核融合炉に頼っている国とはあまり関わらなくなっていくたいつしか、北米と南米、つまり核融合炉を利用している地域とそうでない地域の間のこの場所は、境界と呼ばれるようになったのだ。初めてここに来たとき、私はとても驚いたものだ。電気やガスを使わず、一定のコミュニティを作り、社会を形作る。境界の「外」は私がもといた場所とは似ても似つかないような所だった。

核融合炉が無かったって、人はこんなにも自分たちの生き方ができる。このことを、私は無性に嫌に伝えなくなった。もう何もかも遅いというのに。

研究所の所長は、私が核融合炉の空間と繋がっていることをあまり知られたくないこともあって、それ以降、私が境界の外に出かけることはほとんど無かった。

だから私は研究所を襲撃したやつらを追い払ったことにあやかっ
て、ここにいるのだ。

一応付き添いとして、グミと一緒にいるけれど、物珍しいからっ
てバザールで売られている物品や食べ物を物色しまくっている私が
何を言っても生返事しかない。ほとんど一人と変わらない状況だ
った。

それにしてもグミが話そうとしない。いつもそんなに喋るほうで
はないけれど、話を振っても続かないというのも珍しい。怒ってい
るというよりは、何か考え事をしている、といった感じだった。

きゆうりのことを言ったときだけは、じっと売られているきゆう
りを見ていたけれど。

ひとしきり品物を見て、満足した私は散歩を続行した。その間も
グミは黙ったまま。私はそんなグミに半ば諦めのような感情を抱き
つつ、川のほうにぶらりと歩いて行く。さすがに話す相手がいない
と暇だ。

そう思っていたら、突然グミが口を開いた。

「ローラさんは、大切な人を失ったことがあるんですか？」

「どうして・・・そう思ったの？」

グミの突然にして突拍子もない質問に対して、思わず私は質問を
質問で返してしまう。

「美玖さんが核融合炉の空間上で人を生き返らせることが出来ない
と言った時です。ローラさんは、なんだか悲しそうな顔をしていま
した」

私が悲しそうな顔をしていただっけ？全く意識していなかったこと
を言われて、私は思わず手を顔に当てた。しばらくそうしていたけ
れど、私はグミの真っ直ぐなまなざしに圧されて、答えた。

「・・・あるわ」

それを聞いて、グミは少し俯き、呟いた。

「わたしも・・・です」

それから、グミは堰を切ったように話し出した。今まで話さなか

ったのが嘘のように。

「わたしは元々北米に住んでいました。父と一緒に。母は私が小さかった時に亡くなりましたから、私にとって父は頼ることのできる唯一の存在でした。」

父の名は、レオン・ゼロ。ローラさんも知っているとありますが、核融合炉の研究者でした」

この子の父親がレオン・ゼロだって！私は驚きを通り越してなんだか怖くなった。この先にもっと驚くべき話が待っているのではないか・・・、そういう予感がしたのだ。

「父は、核融合炉の研究をすることを誇りに思っていました、毎日が発見に溢れているとも言っていて、研究をすることとても楽しんでる様子でした。研究のことを聞くと優しく教えてくれる父をわたしは頼もしくも誇りにも思っていました。」

でも、ある時から、父は変わってしまいました。

確かあれは冬だったと思います。父が仕事から帰ってきたとき、父の顔は蒼白でした。なんだか人目を気にしているような感じで、拳動不審っていう表現が出来てしまうような雰囲気さえありました。その次の日に父は研究所の仕事を辞め、私に境界の外側、南米に行こうって言うてきたんです。

本当は南米になんて行きたくなかったんです。でも、それをしてしまったら父は何をするか分からないほど切迫した表情をしていて、わたしは何も言わずに頷きました。

それが四年前・・・。これはここに来てから知ったことですが、レオン・ゼロ・・・わたしの父が『死んだ』って言われている日です」

またしても衝撃の事実。レオン・ゼロは生きていた。

しかし、ここにきて私はふと疑問に思った、グミは自分の過去を説明している、そのことでグミは私に何を伝えたいのだろうか。

「境界の外での生活は、不便なところがたくさんありましたが、すぐに慣れました。父も前のように優しい父に戻って。今思えば、そ

の頃のわたしが一番幸せだったと思います」

そう言うグミは、目の前を流れる川を、どこか懐かしむような顔をしていた。

「でもそれは一年半前のあの事件で終わってしまった・・・」

一年半前のあの事件・・・。それ自体は私も知っている、グミがそれについて説明しようとしているということは、あのとき私の知っている以上のことが起きたのだろうか。

「わたしが誘拐されたのは、あの武装勢力が父と取引をしようとしていたからです。

そのことも、自分が死んだことになっていることを知っていて、父は一人でわたしを助けようとしたんです。

わたしはやつらに、何保安部隊が来たらわたしを殺す、と何度も言われて完全に抵抗する気力も無くしてしまっていました。ここで死ぬんだ、とも思っていたほどに・・・です。

でも、境界の保安部隊は犯行声明の内容を・・・父がこの世に存在しないことを理由に、その日に強行突入を行うことを決定していました。

その時、父と武装勢力は取引の真つ最中で、やつらは、父の持っている研究データを要求しました、父がどんな時も肌身離さず持っていたメモリースティックを、です。それと引き換えにわたしを解放するというのがやつらの出した条件でした。けれど、父はそのメモリースティックだけは譲ろうとしませんでした。

その間、わたしは無理やり低反動拳銃を持たされ、父に銃口を向けていました。やつらは、わたしにも生き残る条件を出していません。

もし父が条件を呑まなければ、わたしは殺される。でも、父が要求を呑まなかった時点で父を撃ち殺せば、命だけは助ける、と。

その事実をやつらから聞かされた父は愕然としましたが、それでも条件を呑もうとしませんでした。

保安部隊は、まさにその時突入を行いました。

その時、私の頭の中には、やつらの脅迫と生き残るための条件しか浮かびませんでした。

自分は死ぬんだっていう絶望しか……。保安部隊は突入を開始し、父は条件を呑もうとしない……。だからわたしは銃を……」

今までまるで他人事のように過去を説明していたグミの顔が、急に歪んだ。

「父に向けて……。撃ちました」

夕焼けの空に、一人の少女の嗚咽が混じる。

「今思えば、父は保安部隊が来ることを知っていたのかも知れませんが。やつらがわたしを人質に立てこめることを防ぎ、わたしを保安部隊に救出させるために条件を呑まなかった」

もうグミの顔は、涙でくしゃくしゃだった。

「ただ、怖かった……。それだけなんです。父に何の恨みも無かったのに！」

私は愕然とした。グミが体験したことは、私の過去ととてもとても酷似していたのだ。

銃を向けられた恐怖で、助けられずの廉を見殺しにした私と、殺されるという恐怖で、父を撃ち殺してしまったグミ。

「それから、父の遺体は見つかっていません。多分、やつらは父が保護力プセルか何かに包んでメモリースティックを呑み下したのだと思って、運び出したのです」

それからグミは手で涙をぬぐって、私を見た。

「ずっと聞きたかったんです。ローラさん、いえ、凜さんに。あなたの家族は、今のあなたにとってどんな存在かを」

私はそれを聞いてやっと納得した。グミは私の過去を知って、この質問をしなくなった。

だから自分の過去を話したのだ。グミはなんて律儀なんだろう、一つの質問をするために、泣いてしまうほどつらいことをするなんて。私は思わず微笑を浮かべた。そして今思っているとおりの答えを言う。

「とても優しい。かけがえのない人たちよ」

私が言うと、グミは俯いて、しばらく黙った。

そうだ、たとえ私が居なくなってしまう原因を作ってしまったのだとしても、私の家族は家族だったことには変わらないのだ。廉だつて、私の大切な弟だつた。

「あなたのお父さんも、そうでしょ？」

グミは静かに、しかしはっきりと頷いた。

共感、それは孤独の否定だ。グミはこのことを誰にも打ち明けれなかった。けれど私の過去を知って初めて誰かを失う「罪」を持つことに共感をして、話すことができた。

間違はなく、今の私とグミは真に共感していた。たった一つの質問を通して。

「それにしても、どうやって私の過去を知ったのかしら、まさか美玖が言っただんじやないわよね？」

私が質問をすると、グミは赤くなって答えた。

「最初はちょっとした興味だったんです。でも流石に美玖さんには聞けなかったので、境界のデータベースに入ったら、凜さんの過去のデータがあつたんです。今と名前も違いますし、変だなんて思つて、興味本位で見てしまつたんです。ご、ごめんなさい」

申し訳なさそうにぺこんと頭を下げるグミを見て、思わず私は笑つてしまった。

「いいのよ、もう私のことでは無い。私は凜では無く、ローラなんだから」

それにしても、境界の嚴重なセキュリティを潜つて情報を見るなんて、やっぱりこの子は天才だ。

川が夕日を反射し、オレンジ色の帯を作り出す。

「帰ろっか」

グミが頷き、私とグミはもと来た道を引き返した。

研究所に入ったとき、グミが不意に口を開いた。

「大切な人が、自分や誰かの命まで犠牲にしてまで守りたかったものが何か知りたくありませんか？」

私は何か言おうとしたが、グミはそれを待たずにすたすたと歩いて行ってしまった。

罪が受け継がれたとき、

その罪は彼女自身のものに代替された。

しかし、初めにあった罪が報われるまで、

彼女自身の罪の報いを、彼女が受けることは無かった。

五、代替（後書き）

五話は、間奏部分に当たる話になりますが、予想外に長くなってしまいました。

実は、この五話の原稿はパソコンの故障によって一度消失してしまい、一から書き直したものです。書き直す前は7000文字程度だったのですが、この後の話の重要な伏線になるということで、いろいろと入れたところ今ところ最も長い話になってしまいました。今になってみれば書き直したおかげでグミの設定をより深くできたのでよかったかなと思っております。怪我の光明ってやつですかね。もっとも、一曲でこんな長くなることは私も予想できませんでした。

次話から、一気展開が進み、最終話まで一直線に話が進みます！ま、予定ですがね。

六、融解

それは事件だったのだろうか、それとも事故だったのだろうか。そう考えて私は苦笑した。事件が事故か気にするのは警察とかぐらいだ、なにも私が気にすることでは無いし、それを決めるのは「自己」の判断だ。

と、言葉遊びをしている暇ではない。なにせ国一つが滅びたてしまっただから。

原因は諸説あるけれど、とにかくその国は一夜にして滅びた。正確には現地時間で今日の午前二時。その瞬間、その国にいるどの人物とも連絡が取れなくなり、その国に親戚とか恋人とかがいる人たちは大いに困惑した。今じゃこの出来事を報道していない国はほとんど無い。

どこかの国が極秘に作成した原子爆弾を落としたのではないか、など様々な憶測が飛び交ったけれど、境界の科学者達が出した結論は一つ。

その国に大量の放射線が降り注ぎ、生物だけがその機能を失ってこの世から消え失せた。

偶然、その場所に研究用の検量系が置いてあり、それが異常な数値を境界の研究所に送ったのを最後に通信が途絶えたことと、衛星写真を見る限り爆風のようなものが発見できなかったことから、今はその説は有力だ。

当たり前だけど寝ている人がほとんどで、皆自分に何が起こったのか分からずにその現実を受け入れることになった。いや、もしかしたら起きていた人だってそうだったかも知れない。

とにかく私が記憶を失ったあの日とは真逆、午前二時にその国にいる人々は永遠の眠りについた。

生存者は今のところ確認できていない。そのせいで前後関係や原因が分からない。

ただ一つ、分かっていることは、その国が核融合炉の恩恵を受けている国だったことだ。

だから核融合炉に頼っている国では、ある意味自虐的とも言える憶測が飛び交っており、特に私のもといった国で、は持前の二ヒリズムでかなりの混乱が見られるようだ。次は自分達なんじゃないかって。

そうかと思えば境界の外側にいる人々はこの出来事をほとんど知らない。仮に知っていたとしても知らん顔を装っている。その人々はたった数十キロメートルしかその国から離れていなかったのだけど、こんなにも認識の差があるのだ。

そして境界のこの研究所といえは大騒ぎ。なぜなら一夜にして国を滅ぼすほどの放射線を降り注ぐことができるのは、水素爆弾が不要になってその存在を消した今、高次元核融合炉だけだったからだ。

どの職員も皆慌ただしく動き回っていた。専門的な知識がそこまである訳では無い私だけは、その中で特に何もせずについて、話しかてくる人もいなかった。どの人もどの人もこの出来事の実事関係を調べるのに手いっぱい、美玖でさえも会うことが無かった。

ようやく美玖と話すことが出来たのは、次の日の朝になってからだった。

朝の食堂で、明らかに睡眠不足気味な顔をした美玖に話しかけるのは少しためらわれたけれど、あの出来事は何だったのかを知りたかったので、思い切って話しかけてみた。

「おはよう、美玖。昨日はお疲れ様」

ネギ鴨を目の前にして、なんだかばーっとしていた美玖がはつとした表情になった。

「う、うん。頑張ったおかげで何とか原因が分かりそう。何か分かったら所長から召集がかかると思うけど・・・」

美玖がうーん、と唸った。

「何か分かるまで、私達は眠れなさそうだわ」

私はくまのある顔でちよつとした弱音を吐く美玖に心から同情し

た。というよりもなんだか申し訳なく思った。

「早く何か分かるといいね」

「うん。これが私達の役目だもんね、こういう時が私たちの力を発揮する場だから、早く皆に本当のことを伝えられるよう頑張るわ！」
弱音を吐いた美玖に対して、私は同情するような言葉をかけたつもりだったけれど、どうやら美玖は励ましてくれたと勘違いしたようだ。

それにしても、私達の役目・・・か。

私は自分がここにいる意味について考えた。少なくとも、私にとつては鏡音凜かがみねりんという「過去」の人間をこの世界から消し去ることが目的だった。今もそれは成就している。

けれど美玖やここにいる研究員は違う。起こるかもしれない核融合炉の不具合を防ぐため、ずっと核融合炉のことを知ろうとしていたのだ。

恐らくここの研究員のうち少なからずは、核融合炉の不具合が起きた時の為の研究をすることに、疑問を感じていた者もいたはずだ。なにせそれは未来永劫起こりそうにないのだから。

そしてこの出来事を少しでも嬉しく思っている者もいるのだろう。やっと自分の出番が回ってきた、これまで全く日の光を浴びなかった自分の研究が白日にさらされる日が来たのだと。

と、私はそんな邪な想像を試みたりするけど、美玖のそれは純粹に自らの粹割を全うする兵士のような誠意だった。

今、自分にできることは何だろうか、そんな思いが頭をもたげた時、ふと、この前境界の外に散歩に行った時の出来事を思い出した。大切な人が、自分や誰かの命まで犠牲にしてまで守りたかったものが何か知りたくありませんか？

グミがそんなことを言ったとき、何故か彼女の顔には何か使命を果たそうとする義務感のようなものがあつた。

「そつえば、グミはどうしたの？」

私がそう聞くと、美玖がネギ鴨を食べている手を止めて瞬きをす

る。

「あれ、そういえば見てない……。凜は……。知らないよね……」

「うーん……。美玖と一緒にだと思ったんだけど……」

こんな大惨事に、グミを目撃しない。そのことに私は何か予感じみたことを感じたけど、その時は特に深くは考えなかった。目の前のことに気を取られていたというのもある。

けれど、それがその後の私の運命を大きく変えることになるとは、誰が予測できただろう？

所長から召集がかかったのは、その日の昼ごろだった。各々は凝った肩をほぐしたり、欠伸をしたりしながら所長の発表を待った。

特に何もしていない私が言うのも難だけど、徹夜明けの昼ほど辛いものは無いはずだ。そのような状況なのにも関わらず、美玖は真剣な表情を崩さず座っている。

そして皆の注目の中、所長がホールの壇上に上がった。

「ご苦労！」

所長が最初に発した言葉はそんな労いの言葉だった。

「諸君はよくやってくれた、僅か二日足らずで我々はあの出来後の全容を掴むことができた。まさにこれこそが君達の力なのだ」

私はそんな政治家気取りな言動に呆れたけど、流石だな、とも思った。

ここにいる研究員は、ほとんどがエリート。誰にも負けたことが無いような秀才ばかりがいる。

以前、私は廉にこんなことを聞いたことがあった。

ねえ、あんまり勉強してなくても、成績がすごくい人っているけど、それって不公平じゃない？

中学生ならけっこうな割合で思っていることで、ありきたりで他

愛のない疑問を、廉は真面目な表情で考えた。

まあ、普通は陰で努力してたりするのが多いんだけど、たまにそういう人もいるよね、

でも僕はそれは不公平だとは思わないな。

え！どうして？

そんなに努力せずに勉強ができちゃうと、その分の根性っていうか、耐久力が付かないんだよね。だから一度挫折したときに、シヨツクが大きい。僕達がどうってことないと思っていることも辛く感じてしまうこともある。なんでもあんまりにもできる人は、逆に言えば頑張ったっていう経験がしにくいんだ。

だから、勉強ができるってのと、頑張ったっていう経験を足せば、不公平なんかじゃないと思うけどね。なんだか屁理屈っぽい感じはするけど。

これまで誰にも負けたことが無い人間は、純粹な金属でできた刀のような人なのだ。どこまでも鋭くて、どんなものでも切ることができるけど、その分折れやすいような。

所長はその種の人間がどうやってたら自らの能力を発揮することができるか知っているのだ。自尊心をうまく使うことで、その士気が上がることや、たとえ管理職であっても、自分たちが調べたことを、自分が見つけたように言われるのをとてもとても嫌うことを。

と、私が聞きたいのはそんな言葉じゃないんだった。私が愚考している間に話は進んでいた。どうやら、順を追ってまとめて話らしい。

「今日になって軍隊が派遣されたが、生存者の見込みは無し、推定で二千万人が行方不明になっている模様だ。発見された遺体を調査したところ、そのいずれもが極度の放射線被ばくをしていた。設置してあった検量系のデータからも、大量の放射線が降り注いだことは間違いないだろう。これに対する高次元核融合炉の関係だが・・・」

ここで所長は注意を引かせるためか、一呼吸置いた。

「これまでの情報収集で、高次元核融合炉の空間自体が融解を始めている可能性が極めて高いことが分かっている」

私や美玖を含め、その場にいるほとんどの人が息をのんだ。

「空間の融解により、エネルギー自体が流動的で不安定になっているようだ。詳しい原因を突き止めるため、これより調査団を派遣し、各々の国のエネルギー供給装置の調査を行う。それまで諸君は体を休めたまえ。本格的な調査はこれからだ」

以上。所長がそう言うのと、研究員達の安堵が伝わってくるような感じがした。流石に三晩徹夜したいやつはいまい。

高次元核融合炉の空間自体の融解。私はその言葉について考えようとしたけれど、私の頭の中は別のことで埋まっていた。

グミがこの中に見当たらないことを。

流石に私は不審に思った。なにしろ研究員全員に対して召集がかかったのに、グミだけが居ない。そして、グミの性格からして、召集されても来ないなんて絶対にありえない。

ーもしかしたら・・・あの時の言葉って・・・。

グミが何か使命があるような顔をして言ったあの言葉。それをグミは「知ろう」とするために探しに行ったのかも知れない。

だとしたら・・・。

まずはグミがここから出て行っていないかを知るべきだ。

私はそう考え、美玖の使っている端末から境界のシステムにアクセスし、研究所内からの外出者がいるかどうか調べた。流石に重要機密なんかは簡単には見ることはできないけれど、情報の共有がスムーズにできるようにだいたい情報はすぐに探することができる。

そして私はそのログを見て驚愕した。そこにグミの名前が載っていないかったからだ。

私は恐ろしい予感を抱き、次に研究所内でのグミの情報を探した。

そして、検索結果は・・・該当者無し。

予感的中していた。グミのこの研究所内での記録が全て無くなっていたのだ。

さらに悪い予感がした。ここでの記録を操作出来るのは、私が知る限り所長とグミだけだ。所長がそれをやる理由は考えられないから、それをやったのはグミ自身だということになる。だとしたら、グミは少なくともここに帰ってくる気は無い。

これって私が二年前やったこととまるっきり同じじゃない！

私は必死に考えた。グミがこんな未曾有の大惨事の渦中に自分の記録を消し、失踪してまでやろうとしていることは？

いや、それは考えなくとも分かることだ。というか私が最初から分かっていたはずだ。

グミは自分の父親が何に怯えて高次元核融合炉の研究を辞めたのか知りたくなったのだ。

一つの国が減び、その全国民約二千万人が死亡するという惨状を知って、彼女の父、レオン・ゼロが何に怯えていたのか薄々感づいたのだ。そして、それをはつきりさせようとしている。

ならばグミは何処に行っただろう？自分の記録を消したということは、自分の足跡を誰かに追跡させない為だろうか、境界の内側の交通機関を使っている可能性はほとんど無い。つまりグミは境界の外側に行ったのだ。

ここで私はピンときた。グミの父親が持っていたメモリースティックは、一年半前、グミを誘拐した武装勢力のアジトで行方不明になった。グミはそれを見つけようとしている可能性が高い。

私はすぐにその場所を検索した。もし、グミがその場所に行くつもりなのならば、それは危険が伴う。一度壊滅させたとはいえ、集団というのは容易に一つの場所からは離れない。そこに武装勢力が居ないとも限らないのだ。

と、私はその武装集団の名前を見て面食らった。

真実の火。

この前この研究所を襲撃しようとして、私に阻まれたやつら。私はなんだか感心してしまった。一年半前、保安部隊に壊滅させられたのにも関わらず、懲りずに研究所を襲撃しようとするなんて。私達にとって「迷惑な連中」の熱心さは尋常では無いようだ。

その場所は、ここから十数キロほど離れたところにあった。もし、徒歩だったら三、四時間はかかるだろう。体力が多いとは言えないグミなら、もつとかかるかも知れない。

しかし、今から徒歩で追跡しても到底追いつけそうにないし、地形を確認したところ、車両やバイクが通れなさそうな道もある。

あれを試してみようかな。

空間転移。一年前ぐらいから少しずつ出来るようになってきたあれは、今では目の届く範囲ならかなりの距離でも一瞬で移動できるはずだ。けれど今のところ試しているのはせいぜい百メートルがいところだし、ここからは目的の場所は見えない。

と、ここで私は気が付いた。直接目的の場所に移動する必要はない。どこか高いところに上って、だいたいの目安をつけてやれば、多少離れたところに現れても何とかなる。

それを実践すべく。私は念のため自分の携帯端末に地図の情報を入れてから、研究所の屋上に上がった。美玖にこのことを伝えようとも思ったけれど、やめた。たださえ忙しいのにグミのことで心配をかけるのはどうかと思ったからだ。爆睡している美玖を起こすのがためらわれたっていうのもあるけれど。

目的の場所はここから南西方向に約十五キロメートル。私はその方向を向くと、おもむろに足を踏み出した。

この前やったとおり、別に歩きながらじゃないと空間転移が出来ないわけじゃないんだけど、やっぱり移動するのだからこうするほうがしっくりする。

そして一瞬だけ見える空と海。

それらが見えたのは一瞬だったけれど、私はそれらの変容ぶりに面食らった。空は今までとはくらべものにならないくらいに赤色を

帯び、まるで赤い霧に包まれているようで、海はそれを律儀に映していた。これまでのこの空間の変化は、核融合炉の空間の融解の兆候だったのかも知れない。

気がつくとは私は森の入り口にいた。携帯端末で確認すると、目的の場所はここから一キロメートルほど先。

どうやら上手くいったようだ。私は誰もいないのに少し得意げに笑顔を作り、意気揚々と歩き出した。

森の中に佇む、なかなか古い木造の建物。あの武装集団のアジトだった建物の扉を目の前にして、私はなんだか拍子抜けしてしまった。

武装集団のアジトといったら、監視カメラやら柵やら物々しいものが設置してあると思っていたけれど、ここではそんなものは無く、ただの山小屋のように見える。

まあ一度保安部隊に壊滅させられたのだから、その時に取り払われるかしたのだろう。

そう思いつつ、私は無遠慮に扉を開け、この建物に入った。生々しく弾痕が残る廊下を歩きつつ、私は境界と、その内側の事に思い浮かべた。

今、世界中にある核融合炉の恩恵を受けている国は、あの出来事のおかげで大混乱に陥っている。そして核融合炉の研究者達は、それが何故起きているのか躍起になって調べている真つただ中だ。

それなのに、私はこんなところで何をやっているのだろう。そんな今更な疑問が浮かんできた。いつもの自分なら、そんなこと他の人に任せて美玖の手伝いでもしているはずだ。

どちらにせよその理由ははっきりしていた。

そうしなかったのはグミが自分の記録を消して失踪するという、二年前私がやったことの際限を見せられたからだろう。

と、もう一つ。これはほとんど予感のようなものだったけれど、グミが知ろうとしていることが、あの出来事の真相に近づいている気がしたのだ。そして、それを私も知りたいが為にこうして追いかけているのだ。

やっぱり私は身勝手な人間。

そう思っただけを滲ませた時、私は丁度大広間に出て、そして見た。

部屋に一人佇む少女の姿を。

グミは私が居ることに気が付いていない様子で、手持ちの携帯端末で何かを見ていた。

そのあまりに熱心な、思いつめた瞳に私はぞっとした。

「グミ……」

私の問いかけに、グミが弾かれたように顔を上げる。

「ローラ……さん？……どうしてここに！」

「自分の記録まで消して、失踪した仲間を探さないやつがどこにいるのよ。あなたのやった事は、『探さないでください』ってメモを残して家出するようなものよ？」

私がそう指摘しつつ近づくと、グミは俯いた。

「ごめんなさい」

「なんだ、分かっているじゃない」

まるで親子か何かのような会話。私は少し緊張を解いたけれど、まだ話すべきことがたくさんある。

「もしかして、今あなたが見ているのはあなたの父さんの研究データ？」

さっと、グミの顔がこわばった。

「は……い。わたしはこの武装集団が父の遺体を運び出す時に、父の手のひらからメモリースティックが落ちるところを見ました。そのすぐ後に保護されたので拾うことが出来なくて、でもそれからそれを見るのが怖くなってしまったんです。父を変えてしまった研究内容を見るのが。」

でもあのニュースを見てから、もしかしたら、父はこれを恐れていたんじゃないかと思いました。それがもう起ってしまったているのなら、もう恐れている場合手はない、と思ったんです。でも、それだけ恐ろしい内容なのなら、他の人に知られずに自分で判断すべきだと思つて、こういった形で・・・」

「まあそれは逆効果だったけど」

私は思わず苦笑してしまった。グミは天才だけれど、一人で抱え込もうとしたり、家出のような形をとるのはやっぱりこの歳ならではだ。その為に自分の記録を消したりするという向こう見ずな無茶をすることもそれにぴたりと当てはまる。

私は少しほえましく思ったが、ここが今も活動を続けている武装集団の、「真実の火」の元アジトであり、安全ではないかもしれないことを思い出した。

「グミ、よく聞いて、ここを所有していた武装集団は、この前研究所を襲撃しようとしたやつらと同じなの。だからここ安全とは言えない、それを見るのは後にして早く出たほうが・・・」

「そういうわけにはいかない」

私はグミの後ろから聞こえた声にはつとした。そして考えられる限り最悪の状況に陥つていることを認識する。

見ると大広間の入り口の全てに、銃を持ったやつらが陣取つていた。その中の一人に、グミがこれまで見たことも無いような憎悪を顔に浮かべた。

「おまえはッ」！

グミがこんな激しい口調になるということは、あの男は・・・まさか。

「やはり覚えていたか。まったく、あの時と全く同じ場所で、同じものを巡つて対峙することになるとは、運命を感じてしまうな」

同じ物を巡つてだって！こいつらは、間違いなく「真実の火」と名乗っている武装集団だ。しかもこいつらは、今この瞬間、グミの父親の研究データを狙っているのだ。

「うるさいっ！」

そう言うグミの目は烈火のごとき怒りを宿している。それを見て男はやれやれといった風に首を振った。

「穏やかではないな、ならば単刀直入に、我々の目的を話しておこう。我々が欲しているのは、あの時と同じ、そのレオン・ゼロの研究データだ。

我々は保安部隊の突入により、壊滅的な被害を被ったが、何とかレオン・ゼロの遺体は回収することができた。だが、彼はメモリースティックを飲み下したりはしていなかった。まったく骨折り損だった。

だが我々は保安部隊が撤収した後、必死にそれを探し回り、幸運なことに見つけることができた。だがそれには嚴重なロックが掛かっていてな、我々には見るのが叶わなかったのだ。

そこで我々は君を待っていた。レオン・ゼロの一人娘である君なら、何か知っているのではないかと思ったのでな」

ここで私は大きな勘違いをしていたことに気が付いた。

この武装集団。「真実の火」は核融合炉を目の敵にしているのは無い、核融合炉の情報を欲しているのだ。この前研究所を襲ったのも、多分破壊では無く情報の略奪が目的だったのだろう。

そんな事実を知って、私は自分の迂闊さに舌を噛んだ。外壁に警備が無いからといって、この部屋に監視用のカメラか何かが無いという保証は無いのだ。

なんだか自分が不甲斐なく思えて、無性に言い返したくなった。

「それで一年半も待ってたってワケ？」

なら質問があるわ。そんなに気長に待ったり、境界の研究所を襲撃したりしてまで、高次元核融合炉の情報を欲しているのは何故？「こんな八当たり気味の言動に対して、この男はよくぞ聞いてくれましたという風に腕を広げて見せた。

「それは我々の名乗っている名前にこそある。『真実の火』という名前にこそ。

高次元核融合炉は多くの国で使われているが、民衆にはほぼその実態を知られていない。それぞれの国の政府がそれを意図的に隠しているのだ。高次元核融合炉のことが本当はよく分かっていないことも含めてな。そんなものを使うことは出来ないというのが第一の理念だ。

そしてもう一つ。高次元核融合炉の実態を知らせようとしない愚かな政府に代わって、我々がその真実を世界に向けて発信するのだ。そんな演説ぎみな話をするこの男に、私はとてもとても嫌気がさした。

この男は、この武装集団は、情報を発信するだけで問題の解決方法をまるで考えていないのだ。

「そんなことをしても、人々の混乱を誘うだけよ、何にも解決になっていないわ」

「だがその中で民衆は誰につくか選択するのだ。そして我々が唱える真実も下へと必ず集い、我々が世界を先導してゆく存在となるのだ」

くだらない。

私はそう強く思った。真実を民衆に伝えようとっておきながら、そこには権力への欲求がある。

けれど境界の研究所に二年間いて、政府が核融合炉の実態を調査することに消極的なことは少なからずある。そんな実感を思い出して私はなんだかもどかしくなった。

「民衆に真実を伝える為だ。その情報を我々に提供気は無いか？」

そこまで黙っていたグミが、まるで怒りに耐えかねたかのように口を開く。

「これをおまえたちには渡さない、決して。どんな目標を掲げても、私の父を殺した貴方たちには何も渡すものなんか無い！」

それを聞いた男はおやおやと言うような表情をした。

「ふむ、交渉決裂だな。貴重な逸材なのだが、仕方がない。もう口ツクは解いてしまったのだろう？」

ぞつとして、隣を見ると、グミがこわばった表情を浮かべている。その表情が、私達がいかに絶望的な状況に置かれているのかを雄弁に物語っていた。

前を見ると、男が腰に下げているホルスターから銃を抜いたのが見えた。私はとっさにグミを庇い、その怒りと恐怖が支配している顔を目の前にする。

銃声は二発。しかし私がグミを庇ったことで二発ともこの空間から消え去った。

わずかに聞こえる驚きの声。しかし人数のせい、撃った本人であるリーダー各の冷静さのせいなのか、この前のように恐怖に囚われる者はいなかった。

「ローラ……か。仲間からは聞いていたが、本当に銃器で殺せないとはな、ふむ……」

そうしてわざとらしく考えるしぐさを一瞬して、男は鼻で笑った。私はその音を聞いただけに、ぞつとするほどの悪意を感じた。「レオン・ゼロの娘よ、さつき君は、我々が父を殺したと言ったな」目の前のグミの顔が、より深い怒りの表情を帯びる。

「まあ真実を知って怖気づくような者など、生きていても仕方がないからな、自分を見捨てた者を殺した君は、ある意味正しかったというわけだ」

「うるさいっ！」

グミがそう言って、男に突っ込んでいこうとする。

「グミ！駄目っ！」

私は何とかグミを抑え込もうとしたけれど、その時グミが全く信じられないほどの力で私を押しつけたせいで、私は体制を崩してしまった。

「グミっ！」

空間転移をしようにも、体制を崩してしまったせいで上手く異空間に行くことが出来ない。私は何もできず、目の前でグミが撃たれるのを見ているしか無かった。

その一発は、グミの左胸を正確に捉えていた。どう見積もっても助かる見込みが見いだせない程に。

その光景が、私がずっと感じていたはずだった感情を一気に噴出させた。

この世界に対しての敵意を。

グミが何をしたっていうの！

一年前のあの事件だって、グミは何も悪いことはしていない！グミはそうせざるをえなかった。それなのにまたこんなやつらに利用されて、こんなところで・・・こんな！

あの時も、廉が居なくなってしまった時だってそうだった！

廉はこの世界のために世界から居なくなることを選んだのだ。私のことを理解してくれた人たちが死ななければいけない世界。ここはきつとそんな世界なんだ！

私はこの部屋にいる、グミを撃ったやつらをたまらなく憎らしく思った。それこそ私が持つ感情の全てに打ち勝つほどに。

こいつらにグミと同じ目に遭わせてやりたい、こんな世界のこんなやつらなんか消してやりたい。

そんな感情が私を走り出させるのに、さして時間は掛からなかった。

私は何の考えも無く、グミを撃った男に突進する。それを止めようと放たれた弾丸はどれも私を傷つけることはできず、私は怒りに任せて男に殴りかかった。

あれ？

我に返った私が見たのは、赤い霧に包まれた空と海。

「久しぶりだね。こうして向かい合うのは」

背後から声がして、私はぎょっとしながら振り返る。

その姿に、私は自分の目を疑った。

そこにいたのは、紛れもなく十歳の時の自分。母が死んだ時と同じ、真っ白なワンピースを着た私だった。

「ずっと、待っていたよ。君がここに来るのを、君が世界を憎む瞬間を」

十歳の少女にしてはなんだか変な話し方。そこで私は直感した、この少女は、廉れんの口調をまねているのだ。

「あなたは・・・誰？」

私がそう聞くと、この少女は微笑を洩らした。

「僕が誰かだつて？本当は知っているはずだよ、だつて僕は君の一部だつたんだから」

報い。

それは「この世界」にもたらされ、人類が等しく受けることになった。

そしてそれを実現したのは、

他でもない彼女の罪だった。

六、融解（後書き）

五話から三週間もたってしまいました、何とか六話まで書くことができました。

まあ個人的にいろいろとあったというか。

人生何があるかわからないものですね・・・（遠い目）。

七、決意

鏡よ、鏡。

九年前の自分とはいえ、目の前に全く別の動きをする自分の姿を目の前にして、私はひどく違和感を覚えた。いや、違和感を覚えたのは、目の前にしたのが九年前の自分だったから、かも知れない。

もつとも、目の前の人間に「自分の一部だった」って言われて平静を保っているほうがおかしいとは思うけれど。

それにしても、私の一部だつて……？

「もしかして……あなたは廉^{れん}……なの？」

自分の一部だった、と言われたら廉しか思いつかなかった。あの時、廉という存在は私の中のかんりの部分を占めていた。そのせいで、廉がいなくなった時、私は薬物乱用と相まって抜け殻のようになってしまったんだから。

そんな自己分析を言い訳のように考えてみるけど、私のこの発言が、廉が生きているかもしれないという私の淡い期待から出たのは、火を見るよりも明らかだった。

何故なら、私は廉のような言葉使いを聞いて、懐かしい思いに囚われていたのだから。

そしてその問いを聞いたこの少女は、曖昧な笑みを浮かべて口を開く。

「僕が誰なのか気になるのは当然だと思うけれど、それよりも聞いておきたいことがたくさんあるんじゃないの？例えば今、世界がどうなっているのか、とか」

その言葉に私ははっとした。

そうだ、いま世界は核融合炉の空間融解のせいで大混乱に陥っていて、その中で父親の遺した真実を知ろうとしたグミは……。

「グミは……」

それはもはや祈りのようなものだった。

「グミはどうなったの？」

それを聞いた少女は、ため息混じりに答えた。

「僕はそういう質問を期待したんじゃないんだけどね、『そっちの世界』のことは君のほうが詳しいはずだよ？」

私は思わず呻いた。さっきまで私は、この少女の言うそっちの世界 現実世界にいた。

私だって、グミがどうなったか分かっていたはずなのだ。私のその反応を見て、少女は追い打ちをかけるように言った。

「まあ僕は君だから、君を通してそっちの世界を見ていたんだけどね。何ならその質問に答えてあげようか。グミに放たれた二つの弾丸は、見たところ一発は心臓の右心室あたりを貫通していたね、二発目は・・・」

「黙って！」

私が叫ぶと、少女はすぐに口を閉ざす。同時に、グミを撃ったあの男に対する憎悪が、突如として蘇った。

そうだ、私はあの後、あの男に突進して、殴りかかって、それから・・・？

私は思わず周りの景色を見た。あるのは見渡す限り広がる空と海のみ。

どうして私はここにいるのだろうか？私がここに来るのは、空間転移をするときぐらいだ。それだって一瞬しかここにはいない。比較的長くいたのは、私が記憶を取り戻すためにマンションの十三階から飛び降りた時だ。

それだけ私を傷つけることがあの時起きたのだろうか？

もしかしたらあの男は手榴弾でも持っていたのかも知れない。武装勢力のリーダー格なら、それぐらい持っていたても不思議では無い。でもあんな近距離で爆発させる理由が分からないし、何かを爆発させるような音も光も無かった。

あの時、いったい何が起きたのだろうか？私がそう考えていると、不意に少女が笑った。

「そう、僕が聞いて欲しかったのは君が何でここにいるのか、だよ。多分君は今それを疑問に思っている、当たっているかな？」

少女のそんな言い方に、私は少しむっとした。けれど当たっているのは事実だ。

「じゃあ、私が何でここにいるのか、あなたは知っているんでしょ？ だったら、なんであなたがそれを知っているのかも合わせて教えなさい」

私の高圧的な命令口調に、少女は顔をしかめたが、それはすぐに嬉しそうな表情に変わった。まるで出番を待ちかねていた役者のように。

「じゃあ、全部話させてもらおうかな。君とこうして向かい合ったのは二年ぶりだし、次はいつ会えるか分からないからね。

結果から言うと、君は一つの地域を滅ぼした。それも、あの森が跡形もなく吹っ飛ぶほどの爆発を起こしてね」

私は何を言われているのか分からず、動揺した。それほどの爆発が起きたなら確かにここにいるもおかしくは無いけれど、そんなことが起こるような要因は考え付かなかった。

私のそんな様子を見つつ、少女は楽しげに続ける。

「爆発を起こしたのは、高次元核融合炉のエネルギーの一部だ。それが一時的に『そっちの世界』に解放されて、だいたい一キログラムのウランが核分裂した時と同じぐらいの熱量が放出された。爆心地は地上だったから、多分半径五百メートルにいた人々の生存は絶望的だろうね」

そう淡々と語る少女とは対照的に、私は動揺をより一層深めていた。

確かあの建物の近くには、森の間に家を建てて、土地を利用して自給自足を行っている比較的『近代的な』暮らしを行っている集落があったはずだ。

「どうして・・・そんなことが起きたの？」

どういうことなのか全く分からず、十歳の少女にまるで頼るよう

に質問をする十九歳。

はたから見たら既に奇妙な光景だけれど、少女が楽しむように語る様子は、さらにその光景から現実感を奪っていった。

「どうしてって？それはね、君があをの男を、この世界を憎んで、消し去ってしまいたいと望んだからだよ。この空間は人の意思を尊重する。だからこの空間はそれに答えて、核融合炉のエネルギーを少しだけそちの世界に放った。それだけのことだよ。

これが二年前とかだったら、こんなことは起こらなかっただろうけど。核融合炉のエネルギーを無秩序に放つなんて、ローラ・ゼロの意思が許さないだろうし。まあそれだけローラ・ゼロの意識が弱くなってしまっているってことなただけ。

昨日の、国が一つ滅びたことも、それが原因だね、核融合炉の膨大なエネルギーを、ローラ・ゼロの意識が弱くなってしまった今、抑えきれなくなってしまうんだ。ここの空が赤くなってしまうたのも、その現れかも知れないね。

とにかく、いまの核融合炉を制御している意識が、君の意思に負けた結果、一時的にこの空間はローラ・ゼロの意思に逆らって君に従ったっていうことだね」

私は愕然とした。私がそう望んだだけで、それだけのことが起きてしまう。そう考えるだけで、体が震えた。それだけ、恐怖を感じた。

嘘だ、何かの間違いだと割り切ることもできたかも知れない。いくら廉とはいえ、間違っ事も多々あったりもするのだ。

でも、私はもう気づいてしまっていた。

この少女は、核融合炉のことを話す時にとっても嬉しそうなのは廉と同じだ。けれど、この少女はあまりにもあっけらかんとしている。世界を愛しているがゆえに命を絶つと宣言したあの暗さが、どこにも見当たらないのだ。

まさか・・・この子は・・・。

「あ、そうそう。なんで僕がこんなことを知っているかも話すんだ

ったね。

僕が生まれたのは、三年前、僕らが『聖域』の前で記憶を失った時だよ。君はあの時、核融合炉に飛び込むという淡い願いを持つと同時に、彼を、廉を欲した。その願いを高次元核融合炉が受け取ったんだ。

そして、君はこの空間にこの姿で残り、僕が君から分かれて生まれた。君の持つ廉のイメージを受け継いでね。結果、記憶は持たないけれど、いっぱしの一般知識だけを持った僕が、現実世界に現れたっていうわけさ。今思えば、それがこの空間の歪みの兆候だったんだろうね。普通、ここには人が入ることは出来ないから。

君が僕のことを廉だと思ったのは無理もない。何せ、僕は君の持つ廉のイメージそのものなんだから。

まあ、僕が君の首を絞める夢を見たのは、なんていうか出来すぎた話だと思っただね。君のせいで、母さんと父さんが死んでしまったことの贖罪のつもりだったんだろうけど、そんなの完全な一人芝居だよな」

予感は、していた。

けれどとはつきりと言われることで、私はこの三年間ただ逃げていたことを否応なく見せつけられた。人格をこんな風に分離して、廉のイメージだけの人格で一年を過ごし、この二年は別の名を名乗ってあの国から逃げてきて。

もう私は何を抛り所にしていいか分からなくなっていた。それと同時に、自分がそんな自己満足でしかないものに頼らなければならなかったことに気が付く。

激しい自己嫌悪で歯を食いしばる私を一瞥すると、少女は急に真顔になり、どこまでも広がっている海に視線を移した。

「本当は、僕は君に帰ることで消えるはずだった。でも、あの時、僕は消えることを拒んだ。君の廉に居なくなつて欲しくないという思いが、僕にそう望ませたんだ。」

結果、君がそっちの世界で鏡音凜かがみねりんとしてマンションの一室に現れ、

僕はこの姿になってここに残った。

まあ、それから君はすぐに凜という名前を捨ててしまったんだね。

そして、それから僕は、もう君の持つ廉のイメージだけの存在では無くなった。その頃から、僕はこの空間の意味、もとい、ローラ・ゼロの意思を読み取ることが出来るようになったんだ」

少女はどこか寂しげな表情を浮かべた。

「これで君の質問には全て答えたよ。かわりに、とは言っちゃなんだけど、今度は僕のほうから質問させてもらおうかな。次はいつ会えるか分からないし、僕はそっちの世界には干渉できないからね。僕が君に聞きたいことってというのは、君がこれからどうするかってことなんだよ」

私はそんな質問にただ呆然とするだけだった。

聞いている話があまりにも現実離れしているからでは無く、これから私はどうするのかという問いに全く答えられないという事実に対して。呆然とするしかできなかったのだ。

私のそんな様子を見て、少女はため息を吐いた。

「一応僕は君の一部だし、僕からの意見も言っておこうかな。決めるのは君だけど、何も思いつかないんだったらやってくれると嬉しい。・・・っ！」

少女が息を呑むと同時に、周りの空間が歪み始めた。少女が焦った表情を見せる。

「くっ！もう帰っちゃうのか！とにかく、僕の頼みは一つだけ、廉の意思を探してほしいんだ。あんなふうに自殺をするんだったら、廉が何かしらのメッセージを残さないはずが無い。僕が言うんだからそれは間違いないよ。それを見つけて、そしたら・・・」

少女がその後何か言う前に、私の意識はこの空間から切り離された。

眼下に広がっていたのは、巨大なクレーターだった。私は条件反射的に自分の位置を携帯端末で確認したが、そこは、「真実の火」の元アジトからほとんど離れていなかった。

その光景は、私を無条件でその場にへたり込ませるには十分に圧倒的なものだった。

あの時の憎悪が呼び覚まされ、私は醜く顔を歪める。と、同時に、グミが撃たれた時の映像が、不意に頭の中で再生された。

もう一度グミの顔が見たい。そしてまた自らの罪を分かち合いたかった。罪という思い枷を、唯一分かち合い、共感できる少女とまた語らいたかった。

ただただ叫んだ。私の理性はどこかに吹き飛び、獣か何かのように吠え続ける。ほとんど暴力的と言っていいほどの喉の使用に、声帯が耐えられるはずもなく、すぐに私の声は風のような音しか出さなくなった。

98

から爆発させるかのように溢れ出て、私に口を閉ざすことを許さなかった。

感情の奔流に身を任せ、叫び続けた私は、自分の活動限界が来たのにも気が付かず、意識を闇に落とした。

どうやら、私はそれからかなり長い間気を失っていたようだ。

目を開けると、そこには見慣れた白い天井が見えた。意識ははっきりしなかったけれど、体がこの場所を覚えていて、ここが境界の研究所であることに気が付くのにはさして時間は掛からなかった。

仰向けで寝ている体勢から上体を起こす。窓の外から見える景色から、もう遅い時刻であることが分かった。

ぼんやりと窓の外を見ていると、これまでの出来事が少しずつ意識に上ってきた。

「真実の火」の元アジトにグミを探しに行ったこと。そしてそこでグミが撃たれ、怒り狂った私はグミを撃った男に殴りかかり、私はそのまま高次元核融合炉の空間に飛ばされたこと。そしてそこで私の一部だという少女から様々なことを聞かされたこと。

それから・・・。

そうだ、それから、あのクレーターを見たのだ。

ぎゅっと唇を噛み、俯いていたところに、誰か人が入ってきた。

「凜！よかった！」

声音からも、その呼び方からも、入って来たのは美玖みくだとその姿を見なくても分かった。

「凜だったら！私達の誰にも連絡も入れないでここを抜け出すなんて私すごく心配したんだからね！」

私は美玖の言葉に全く反応せず、ただ俯いていた。そんな様子を見た美玖は、気まずそうな声音になる。

「・・・凜の行った先で何が起きたのかは、大体予想がついている

わ。あなたは、あのクレーターの畔で、一人だけ生き残っていたし、意識を失っていたあなたは、とてもひどい顔をしていたって聞かされているわ」

それから美玖の口調は、少ばかり強いものとなった。

「凜の居場所は、あなたの持っていた端末のおかげですぐに分かった。でもね、凜がこの研究所から抜け出していたのに気付いたのは、グミから私にメールがあったからなの」

それを聞いて、私は弾かれたように顔を上げた。

「え……」

「私も驚いたわ。あの頑固者なグミが、私に『助けて欲しい』って伝えてきたのよ。自分が知ってしまった事実はあまりにも危険で、残酷すぎるって。だから私達に力を貸して欲しいって。もちろん私はその内容を確認したわ」

美玖がまるで我が子を自慢するような得意気な表情になった。

「あの子は偉いわ。もし私が同じ立場だったら、一人で抱え込もうとしていたかもしれない。それほどあれは危険な情報だったわ。もしあれが境界の内側の人々の間に広がってしまったら、それこそ今とは比べものにならない混乱が起きるわ」

それから美玖は、いつになく真剣な表情になる。

「凜、よく聞いて。レオン・ゼロの研究データによると、この前の事件の、高次元核融合炉のエネルギーの流れが不安定になった原因は、核融合炉を作ったローラ・ゼロの『意思の影響力』が、弱まってしまったことなのよ」

私は目を見張った。あの空間に入っていないのに、レオン・ゼロはそこまで突き止めていたのだ。しかも、事前に。

「それで、このままだと……」

「ローラ・ゼロの意識の影響力が消えてしまったら、核融合炉が消滅する……か」

私がそう言うと、美玖は首を横に振った。

「私も最初はその程度で済むと思ってた。それだけでも人類はエネ

ルギーの供給源を失ってしまうから、大混乱は免れないでしょうけど・・・」

美玖は、躊躇いがちに口を閉じたが、迷いを振り切るように首を振った。

「高次元核融合炉のある空間は、厳密に言うと異空間にある訳では無いわ。元々この世界は四十数個の次元で構成されていると言われていて、私達がこうやって存在している空間は、それらが折りたたまれて、三次元の空間と、一次元の時間が存在している。

高次元核融合炉は、その折りたたまれた次元を広げて作られた場所に作られているの。

その空いた空間だって、少しずつ溶けていって、最後には消えてしまわずだったのだけど、ローラ・ゼロが核融合炉を作ったことで、その空間は存在が固定されたんだわ。

でも、もしそこでローラ・ゼロの意識・・・核融合炉を作るという意思が消えてしまうと、それによって固定されていた空間自体が融解を起こしてしまう。

空間はそのまま消えるだけだけど、核融合炉を形作っているのは、あくまで私達の世界の物質。つまり核融合炉の空間が消えてしまつと・・・」

美玖は重要な事を言う前に一呼吸おく癖をかなり大袈裟に披露してから、言った。

「核融合炉はこちらの世界に来てしまう。そんなことが起きたら、私達は、人類は・・・いや、地球に住む生物の全てが消え去つてしまう」

驚きは、した。けれど、それは私の中にはただの事実としか伝わらず、何の感情も覚えなかった。

廉と、グミが居なくなってしまったこの世界では、何もかもが無意味に思えたのだ。そのせいで、人の意思が時間経過で消えてしまふほど脆弱であることを、私はとても素直に納得した。

そんな私の心情を知ってか知らずか、美玖はあまりにも意外な出

来事を伝えた。

「まだ私は見ていないけれど、あなた宛てに、グミからメッセージがあったわ。まったく、グミらしいわ。直接あなたに送るんじゃないって、私に伝言として伝えるなんて、変なところが頑固なんだから」
「えっ・・・！」

あまりに意外な言葉に、私は間抜けな顔で美玖の顔を見つめた。その眼には自らの使命を果たそうとする意思が、手で触れられそうなど強く宿っていた。

「見るかどうかはあなた次第だけど・・・」

私は束の間躊躇った。自分が守ることが出来なかった相手から、まさかメッセージが来るとは夢にも思わなかったのだ。

けれどそれを見るか見ないか、というのは、明らかに愚問だ。

「見せて・・・」

私がそう言うと、美玖は頷いて、立ち上がった。

美玖が自分の研究室のコンピュータを操作するのを、私は緊張した面持ちで見ている。

情報技術の発達で、ほとんど無くなったデータの読み込み時間でも、今の私には無限にも思われた。

けれどそんなことは完全に気持ちの問題で、一分も経たずに美玖の操作するポインタが、送り主がグミのメールのアイコンで止まる。題名は、付いていなかった。

そこまでやっておいて、美玖席を立ち、私を見た。ここからは私に読んでほしいということだ、流石に二年間も一緒に過ごしていると、このぐらいの意思の疎通は一秒と掛からない。

私はコンピュータの前に座り、マウスを握った。

たった一回アイコンをダブルクリックする。それだけの事なのに、私の心臓は嫌というほど脈打ち、手を震えさせた。

そして、私は手の震えかも意図かも分からない手つきで、そのアイコンを開いた。

『先ほどは身勝手な内容のメールを送ってしまったて、ごめんなさい。でも、もう一つだけ聞いて欲しいことがあります。』

ローラさんに会ったら、このメールの内容を見せて欲しいのです。ローラさん本人しか見ることの出来ないように、簡単な質問を付けておきます。』

そしてその質問とは、このような内容だった。

『わたしの父親の名前』

「どうにかしてハッキングしようとしたんだけど、あまりにもロツクが嚴重すぎて、私には解くことが出来なかったのよ。この質問の答えも分からないからどうにも手出しできなくて・・・。

凜、あなたは何か聞いているの？」

美玖がそう言っているのを聞きながら、私はグミの質問に完全に、美玖の質問には間接的に、キーボードを叩いて答えた。

『レオン・ゼロ』

背後で、美玖が息を呑む音が聞こえた。そういえばグミは自分の事を美玖に話していなかったんだ。まあ私がこれを聞いたのもかなり最近のことだけだ。

まさかあれほど重大な情報の入手先が、グミの父親だったとは、美玖も想像出来なかったのだろう。

その単語が入力されると同時に、新たな文章が表示される。

『突然研究所から出るような真似をしてしまって、ごめんなさい。美玖さんにはもう伝えてありますが、私が研究所を出たのは、私の父の研究データを手に入れるためです。』

一年半前のあの事件で、わたしはこの武装集団が父の遺体を運び出す時に、父の手のひらからメモリースティックが落ちるところを見ました。

保護された後、わたしはそのことを思い出して、密かにそのメモリースティックが回収されることを望んでいました。そうすれば、父が変わってしまった原因が分かるのですから。

でも、それが保安部隊に回収されることはありませんでした。もし、境界の研究所に渡っていたら、必ず内容が明かされるはずです。わたしはそれで、やつらがあのメモリースティックを回収していたことを知りました。

あの類の武装集団ならば、必ず情報を政府との交渉に使うはず。それなのにやつらは何の動きを見せてこない。明らかに、やつらは父の掛けたロックに手を煩わせていたようです。

ちなみにこのメールのロックも、父のものを参考にしています。ですから、もし美玖さんがこれを解こうとして出来なくても、気にしないで欲しいと伝えて下さい。

話を戻します。それから、事件から一年ほど経った時から、わたし宛てに奇妙なメールが届くようになったのです。

要約すると、おまえの父の秘密が知りたいか、ならば真実の火のアジトへ来い、と言うような内容です』

私はこの時、境界の外に散歩しに行った日の、あの不可解な言葉の意味を知った。

大切な人が、自分や誰かの命まで犠牲にしてまで守りたかったものとは何か。

グミは、彼女の父の研究の内容を知りたがっていた、しかし同時に、グミはそれを知ることを恐れていて、それを知るためには憎むべき相手の誘いに乗らなければならない。

グミはその事を、思い悩んでいたのだ。

『もちろん、それは間違いなく畏でしよう。もしわたしが指定された場所に行ってしまったら、データのロックを解いた途端にデータを奪われて、わたしは殺されてしまうことは目に見えていました。保安部隊を連れて行っても、すぐに感づかれて逃げられてしまうでしょう。』

だからわたしは機会を、やつらが焦れて動き出す時を待っていたのです。

でも、昨日のあの事件が起こって、父があれほどまで恐れていた

こは、これだったのではないかと思ったのです。だとしたら、それはもう取り返しがつかないところまで来ているのではないかと思つて、わたしは居ても経つてもいられなくなったのです。

今、わたしは真実の火の元アジトにいます。既に父のデータの口ツクを解いてしまつていたので、やつらに見つかつてしまつたら、もうだめかも知れません。

一言で言つてしまうと、父が恐れていたことは、人類はこのままだと滅んでしまうという事です。研究データは、既に美玖さんに送つてあるので、詳しいことは美玖さんに聞いて下さい。

わたしから言えるのは、今人類を救えるのは、核融合炉と繋がりを持つているあなたしかいないという事です。でも、それをしてしまったら凜さんは多分生き残ることは出来ないでしょう。

わたしは絶対に凜さんを死なせたくありませんから、その方法を詳しく教えることは出来ません。

わたしはどうすれば人類が助かつて、凜さんも死ななくて済む方法を探します。レオン・ゼロの一人娘として、絶対に見つけてみせます。

ですから、待つていてください』

それがグミの遺した最後の文章だった。

不意に、グミがあまりにも熱心な様子で携帯端末を見つめていた姿が脳裏に浮かんた。

自らの使命を全うするかのような、思いつめた瞳。

グミは、あの時必死に考えていたのだ。一つの結論で満足せず、もつと良い方法を見つけるために。

そうだ、あの瞳はあの時未来を見ていたのだ。過去に囚われて、「逃げ続けて」来た私とは全くの反対だ。まるであの時の廉のように。

そうやって未来を見ることが、とても大事な事のように思われた。でも、そのグミも死んでしまった。廉も、グミも、もうこの次元空間上のどこにも存在しないのだ。

私は逃げ続けたことで、廉の遺してくれた言葉を無駄にしていた。しかも最悪な事に、そのことをグミが死んだことでしか気づけなかったのだ。

だからこそ、私は思った。もうこれ以上、廉の遺してくれたものを無駄にしてはならない。罪を感じているなら、その人の意思を未来に連れて行くべきなのだ。

「美玖」

私と同じようにコンピュータの画面を見ていた美玖に、私は向き直った。

「私はグミのやろうとしていたことを継ごうと思う。高次元核融合炉と繋がっているのは私しかないんだし、グミのこのメールを見たのは私と美玖だけ。核融合炉の融解を止めるのは簡単な事ではないだろうけど、きつとやり遂げて見せる。そしたら・・・」

私は、今でもはつきりと覚えている廉の顔を思い浮かべる。その瞳が見ていた未来も含めて。

「廉が目指していた世界に少しでも近づけるように、出来る限りの努力をしようと思う」

美玖が驚いた表情になり、少しだけ沈黙が流れたが、それはすぐに美玖によって破られた。

「うん」

相槌と共に、美玖が目には涙を浮かべる。

「廉とグミを、喜ばせてあげようね」

今までになく強く、私は頷いた。

この時、私は十代になってから初めて、「努力」という言葉を、自分の意思で言った。

それに気づいたのは後になってからだっただけで、とても不思議な事にそれは私の決意をより強くするための力になってくれた。今までは下らないとあれほど思っていたのに。

七、決意（後書き）

前話からまたしても三週間も掛かってしまいました。遅くて申し訳ないです。

今回は、誤算をしていました（汗）

七話目は、六話目で全て入れる予定だったのですが、そんなことできるわけがなかったのです。

突然ですがいくつか解説をしようと思います。たぶん長くなるのでめんどくさかったら読まなくてもいいですよ？

まず一つ。話の中に出てきた「森の間に家を建てて、土地を利用して自給自足を行っている比較的『近代的な』暮らしを行っている集落」というのは、私が社会科に教科書のコラムで読んだことがあったもので、たしかなんとかフォレストリーとかいう名前だったはずです。つまりは、ある程度森を切り開かずとも、ログハウスの家に住んで生活水準を落とさず暮らすこともできる、という考え方なのです。

二つ目。恒例の詩が、今回では凜の回想的な内容になっております。これは、この物語が最終局面に入っていることを意味します。まあ言ってみれば今までの詩は読む人にちよつとした誤解というか間違った予想を与えるための罠のつもりでした。が、しかし。

私の意図しないところで最終話の非常に重要なフラグを作ってくれちゃっていたのです。

というわけで最終話に対する補足のようになりしました。まさかここで文章が独り歩きするとは……。執筆とは恐ろしいものです。ところでこんな詩を吟じているのは誰でしょう？ここまで読んでいるならお分かりだといいなと（ちゃんと伏線が効果を發揮しているかどうか、という意味で）思っておりますが、これはもう一人の凜の仕業です。凜の少し意地悪な性格と、廉のちよつと大袈裟な言い

方が合体した感じですかね。（実はすごく重要）

さて、上に書いた通りこの物語はここから最終局面を迎えます。で
きるだけ悩みながら、早く投稿できるように頑張ります。

感想お待ちしております。送られたらほぼ確実に返すと思います。

八、回帰

それから私と美玖^{みく}は、核融合炉の融解を止める方法を、どうやって探すかを話し合った。

高次元核融合炉は、元々はローラ・ゼロの意思によって作り出されたものだ。だから、私の意思を用いて核融合炉を維持する、というのが一番手っ取り早くて確実な方法だ。

しかし、それには超えることが難しい壁があった。

ローラ・ゼロの意思は、核融合炉を形作ると同時に、核融合炉を守っているのだ。しかも、それはかなり強い干渉力を持っていて、意識を送り込んで形を変えるところか、核融合炉に近づくこともできない。

そして問題は、あの空間自体がローラ・ゼロの意思を核として出来てしまっているという事だった。あの空間は、核融合炉があることによつて、その存在を固定されている。つまり、核融合炉を作った意思が消えることは、そのまま空間の消滅に繋がってしまうのだ。「せめてローラ・ゼロがどんな思いで、核融合炉を作ったのかが分かればいいんだけど・・・」

それが分かれば、ローラ・ゼロの意思に偽装して、核融合炉を凜の意思の干渉下におけるかもしれない」

美玖はそう言が、ローラ・ゼロは約百年前に死んでしまっている。いまさらその思いを知ることとは叶わない。しかも、廉が言っていたようにその功績を知る者はほとんどいないのだ。

その時、私はあの空間でもう一人の自分が言ったことを思い出した。そういえばあの少女は、ローラ・ゼロの意思を読み取ることが出来るようになったと言っていたけれど・・・。

「凜、どうしたの？」

そんなことを考えていたら、美玖が訝しげな表情を浮かべて聞いてきた。これまで活発な議論を繰り広げていたのに、私が急に黙っ

たので気になったのだろう。

美玖の言葉と同時に、私はもう一人の私の事と、あの少女と話した事をまだ美玖には伝えていないことに気が付いた。

「実は、あの爆発があった時に、私は核融合炉の空間に飛ばされていたの。そこで、核融合炉の空間の側にいる私に会ったの」

普通に聞いたら突拍子もない私の発言に、美玖が驚愕の表情を浮かべた。

「それじゃあ・・・凜があ空間と繋がっているのって・・・」

「うん、あの空間にその私が居ることで私自身も核融合炉の空間と繋がってるんだと思う。」

それで、その私は、核融合炉の空間にある、ローラ・ゼロの意思を読み取ることが出来るって言うてて・・・」

私は、核融合炉がローラ・ゼロの意思に一時的に逆らって、そのエネルギーをこの世界に少しだけ放出したこと、そしてそれが原因であの爆発が起こった事を話した。

その原因が私だったことは、言えなかった。それを口にするのは、どうしても恐ろしかった。

結局、私はまたしても逃げたのだ。

その埋め合わせにはならないと知っていても、核融合炉の空間にいる私が自分の廉に対するイメージから生まれたことも話した。

それが無意識下での完全な自作自演だったことも含めて。

「そう」

それを聞いて、美玖は静かに頷いた。

「ずっと疑問に思っていたのよ。凜があの時記憶を失ったって聞いて、実は凜に会う前に瑠香と会っていたの。その時にね、凜の一人称が僕になっていたことと、たまに廉が言っていたことを全く同じイントネーションで言っていたこともあったって聞いたの。」

記憶を失っていても、自分の癖や口調は変わらないこともあるって事は聞いたことがあったけれど、他人の口調になるってというのは聞いたことが無かった」

私が自虐的な思いと共に、自分を陥れるような事を言おうと口を開こうとしたとき、美玖がそれを遮るように言った。

「でもね」

美玖は諭すような優しい口調で話す。

「それは凜が廉れんのことを大切に思っていたことの表れなんだと思う。そうでなきゃそんな事は起きないわ。それだけ凜は廉の事を強く思っていた。そうでしょ？」

だから、それだけは覚えておいて欲しい。凜はそれほど強く人を想えるっていう事に自身を持って欲しいの」

美玖は少し照れくさそうに笑った。

「うん・・・」

そういう風に言われると、なんだかこっちも照れくさくなる。ものは言いようだけれど、それを聞いて私は少し気持ちが軽くなった気がした。

「核融合炉の空間にもう一人の凜がいるなら、とても強い味方になるわ。また会って、ローラ・ゼロの事を聞くことは出来ないかしら？」

私は少し考え込んだ。

もしあの少女が、ローラ・ゼロの意思、つまり彼女がどのような思いを以て高次元核融合炉を形作ったのかを知っていれば、美玖の言う様にその意識に偽装して、核融合炉の空間の融解を止めることが出来るかも知れない。

「核融合炉の空間に入ることはそんなに難しいことじゃ無いわ」

美玖は少し驚いた表情を見せる。この二年間、私は空間転移をする時以外では、ほとんど核融合炉の空間に入ることは無かったのだ。そりゃそうだ、落ちたら確実に死ぬであろう高さから飛び降りるのは、たとえ安全だとわかっていてもいい気はしない。私がバンジージャンプを嫌う理由がここにある。

「屋上に行きましょう」

私は少しいたずらな笑みを浮かべて、立ち上がった。

「よっころしょ・・・と」

外は清々しい朝の空気でいっぱいだった。私は核融合炉の空間から帰って来てから実に一日半も気を失っていたことを美玖から聞いて驚いたけれど、今度は私が研究所の屋上のフェンスを越えるのを見て、美玖が目丸くする。

「ちよつと凜、危ないよ」

「うん。だから美玖はこっちに来ないでね」

美玖は私のそんな言動に驚きを通り越して呆れた表情をする。

「何をするつもりなの？」

美玖のもつともな疑問に、私はすつとぼけた口調で返す。

「ここから飛び降りることで私が確実に死ぬ状況を作り出して、核融合炉の空間に私自身が行くのよ」

当然ながら美玖が絶句する。傍からみたら飛び降り自殺をしようとしている私を、美玖が止めようとしているようにしか見えない。

しかも、驚愕の真実を告げられたようなドラマチックな場面さえも連想させる。

私はそんなどうでもいいことを考えるほど、「飛び降りる」という事がどれだけ心配されるかなど考えていなかったし、それが態度にも出ていた。

死ぬかもしれないというのに全く意に介していない、ある意味狂人的な雰囲気だ。

「大丈夫・・・なの？」

なので、美玖がこのような態度をとるのは当たり前だった。美玖が心配するのはごもつともだけれど、安全なのは実証済みだ。

「うん。二年前にね、記憶を取り戻した時にこの方法を使ったの。なんだかんだで話しそびれちゃったけど、今のところこれが一番手っ取り早い」

そう言って、私は建物の淵に立つ。案の定、眼下には恐怖を嫌でも感じさせる距離が広がっている。

これだけ気にしていない様子を見せつけておいて、私は怖さで目を一瞬背けてしまふ。後悔してしまっただのも二年前と変わらずだ。私が自分を情けなく思ったのは言うまでもない。

「それじゃあ、ちょっと行ってくるね」

私が手を振ると、美玖は不安げな表情のまま頷く。

「気を付けてね・・・」

私は頷くと、少し助走をつけて飛び出した。ダイバーよろしく頭から真っ逆さまに落ちていく。ちよつとカッコつけたつもりだったのだけど、そんな飛び降り方をした私は内臓が潰れると思うぐらいの恐怖に晒された。

しかし境界の研究所がそこまで高くなかったことで、私に目を閉じるほどの時間は無かった。

地面につく瞬間、私は真っ青な光に包まれる。

それは、巨大な筒だった。

膨大なエネルギーが、作り出されては消えていく。太陽のような暴力的な輝きが、その力を誇示しているような光景に、私は声も出なかった。

そして私はその「意思」によって、そこからはじき出される。

「また来たのかい？こんな短期間でまたここを訪れるなんて、いったいどんな生活をしているんだい？」

気が付くと、見渡す限りの空と海。

「あんたは私を通してこつちの世界を見ているんでしょう？」

あの時と同じ、真っ白なワンピースを着た少女はばつが悪そうな表情を見せた。

「なんだか手厳しいね・・・」

「あんたは私の一部なんですよ？自分ぐらいには厳しくしなきゃ」
そんな感情論的な私の受け答えに、少女はため息をつく。

「わざわざここに来たってことは何か用事があるんでしょ？」

「そ、あんたがローラ・ゼロの意識を読み取り事が出来るって言うから、それを聞きに來たってわけ。私と美玖はね、ローラ・ゼロが核融合炉を作った時にどんな感情を抱いていたのかが分かれば、彼女の意識に偽装してこの空間の融解を止めることが出来るんじゃないかって考えたのよ」

それを聞いた少女は、少し意外そうな顔をした。

「流石にあの研究所にいるだけあるな……。実はね、僕が君に廉の遺しているかもしれないものを探してほしいって言ったのは、そのことに関係しているんだ」

廉の事と、ローラ・ゼロの意思。全く関係の無いようなことを繋げて話されて、私は訳が分からず怪訝な顔をする。少女はそんな私の様子を愉しむように目を細めながら話を続ける。

「僕は確かに、ローラ・ゼロの意識を読み取ることが出来る。でも、今のところこの空間がどういう風に作られようとしたのかってことしか分からないんだ。核融合炉が存在しているから、核融合炉を作るっていう意思を見つけることはできるんだけど、その時にどんな感情をともなつたかっていうのは、上手く読み取ることが出来ないんだ。」

どちらにせよ、ある程度その意思や感情に目星を付けとかなないと、それを見つけることすらできないってこと」

今のままではローラ・ゼロの意識を読み取ることが出来ない事は、分かった。けれど、それがどう廉に繋がるのかが分からない。

「それでね、一つ引つかかったことがあったんだ。僕の知ってる廉は、普通中学生が知ることが出来ないはずのことまで、核融合炉の事を知ってた。少なくとも、レオン・ゼロがローラ・ゼロの研究を使うことで名声を得たことなんて話は、一般国民には隠されていたはずなんだ。」

しかも、そんな情報はあの研究所の中でも見たことが無い。君を通してそっちの世界を見ていたけど、どうもその情報だけが意図的に消されているような感じがしたんだ。

多分廉は、核融合炉の研究者の誰かが流した情報を見ていたんだと思う」

ここで私はこの少女が何を言おうとしているのかが分かった。その情報が何故、五年前までネット上で見ることが出来て、今は跡形もなく消えているのか。

例えば、その研究者が何らかの理由で研究が嫌になって失踪していたからとか。

「そんな情報を流せるのは、あのグミの父親、レオン・ゼロしかない。もし、本当に廉が彼の情報を見ていたんだとしたら、全てに納得がいく。

だから、廉は僕達が知らない事を知っていた可能性があるんだ」

少女は、もう完全に真剣な表情だ。

「あれから君たちがグミの手に入れた情報を読み返してたときに、それが確信に変わったよ。核融合炉の誕生の秘密は、すなわちローラ・ゼロの生きた証でもある。レオン・ゼロの研究成果が、あれだけのはずが無いんだ」

「つまり、ローラ・ゼロが核融合炉を作った時の感情を知るためには、その感情がどんなものだったのかにある程度目星を付けなければならぬ。で、その情報を廉が遺していること知れないってことでしょ？あんたの説明は回りくどいのよ」

私がつんざりして言うと、少女はため息交じりに返す。

「物事の前後関係を知っておくのは大事なことだと思うんだけどね……。まあ君の言う通り、廉が何か遺していないか調べて欲しいって言ったのは、そういう理由からなんだ」

一石二鳥だった。この少女が何故あのような事を聞いたのかという事と、ローラ・ゼロの感情を知る手がかりが同時に掴めたのだ。私は満足げに頷く。

と、そういえば。

「ここからは、どうやって出るの？」

少女は、またため息をついた。

「僕としてはもつといてくれると話し相手になるからいいんだけど、一刻もはやく出たいのかい？」

「当たり前じゃない」

私がすぐに返事をする、少女はあからさまに残念そうな顔をする。

「即答とはね……。分かったよ、君を研究所の屋上に戻す。美玖はまだいると思うから、ちゃんとこのことを話すようにね？」

「分かてるわよ」

私のつつけんどんな返事をよそに、少女は私に近づき、手を握った。

一瞬のうちに、私は研究所の屋上に戻っていた。目の前にはフェンスの菱形模様に彩られた美玖が見える。

「凜！よかった」

そう言って美玖は私に近づいてくる。私はそのとても緊迫していたであろう影がありありと浮かぶ顔を見て、唐突に意地悪をしてやりたくなった。

空間転移を使い、美玖の背後に現れる。美玖には、私が消えたように見えただろう。

案の定、美玖はきよろきよろと周りを見回している。そんな美玖に私はそつと近づいた。

「ワッ！」

「ひゃあっ！」

大声を上げつつ、両肩を勢い良く掴むと、美玖は面白いように驚く。そんなことをやりつつ、世界が滅びるかもしれないのに何やつ

ているんだか、と思ったのはある意味奇跡だと言えるかもしれない。
「ちよつと凜！何のつもりよ！」

「ごめんごめん、美玖があんまりにも心配そうな顔をしていたからさ、なんだか意地悪してみたくなっちゃって。それにしても、美玖はすごくいい反応をするわね」

そう言っ て私は笑いだす。

「心配して損した・・・」

そんな私の様子に美玖は頬を膨らませたけれど、すぐにつられて笑い出した。

青い空と、それに響き渡る二人の笑い声。

なんとも平和的な光景だった。

ひとしきり笑ったあと、流石に事を起こさなければと私は話し出す。

「えつと、向こうに行つて分かった事なんだけど、今のままじゃローラ・ゼロの意思を読み取るとは出来ないって。読み取るためには、その感情にある程度目星を付けとかなないといけないみたい」
それを聞いて、美玖は少し残念そうな顔になる。

「でも、向こうの私は、どうすればそれを知ることが出来るか考え付いていたわ。」

グミの送ってくれた情報の中で、あの時廉が話した事が無かつたことに目を付けていて、あのデータがレオン・ゼロの研究の全てじゃないのかも知れないって考えたみたい。

廉の話していたことは、当時の一般国民には知らされていなかったことだったの。もしかしたら、レオン・ゼロはあれ以外の研究データを元々ネット上に公開していて、失踪したときに全て消去してしまった可能性がある。

だから、廉はあの時レオン・ゼロの研究資料を見ていた可能性が高いのよ。

核融合炉の誕生の歴史は、ローラ・ゼロの生きた証みたいなものだから、あれだけ核融合炉に詳しいレオン・ゼロなら、当時の彼女

のことも知っていたかも知れない」

そう話しながら、私は空恐ろしいものを感じた。私と美玖は何度か核融合炉の事についてネット上でも情報収集を試みたことがあったけれど、廉が話していた事はどこにも載っていなかったのだ。普通、どんな情報でもどこかしらに転載されているものだが、それすらないという事は、それだけ興味を持たれていないということだった。

人というのは、自分が頼っているものを、ここまで知らなくとも気にもかけない。そんな事実には私はもどかしさの混じった恐怖を覚えた。

「ということは、廉が私達は必要としている情報を知っていたかも知れないっていうこと？でも、廉は・・・」

「これは核融合炉の空間にいる私が言っていたんだけど、廉があんなふうな姿を消すんだったら、何か私にメッセージか何かを残さないのは、廉の性格からしてありえないと思うの」

私はあれから、廉のパソコンを見てみようとも思ったのだけれど、どうしても怖くて、見る事が出来なかったのだ。

「そうよね、それは一理あるわ。それだったら凜は一度帰って、私はここに残って調査して、何か分かったら連絡を取り合いましょう」「うん」

私は強く頷いた。

そうして、準備と整えるために自分の部屋に戻ろうとしたとき、聞きなれた声が唐突に聞こえた。

「話は聞かせてもらったよ」

見ると、屋上の入り口には所長が立っていた。当然ながら私と美玖は度胆を抜く。

「い、いつから」

私が呟くように言うと、所長は不敵な笑みを浮かべる。

「壁に耳あり障子に目あり、だ。君達が美玖君の研究室に入ってから聞いていたよ。監視カメラを切ったからと言って、誰も聞いてい

ないとは限らない。あのような事件があつてからなら、なおさらだ」
私が言葉に詰まっている様子を見ながら、所長は口を開く。

「非常に興味深い話だ。レオン・ゼロが失踪したとき、研究データも一様に消去されていた事は聞いていたのではな」

そう話す所長には、いつものような立場にそぐわない軽さは無い。
「確かに、ローラ君の双子の弟が核融合炉の事をそれだけ深く知つていて、齟齬が無いのならその可能性は十分にあるだろう。」

私も君達がその情報を入手しに行くのはやぶさかではない」

「でしたら・・・」

美玖がそう言つと、所長が遮るように言つ。

「だが、事はそう単純では無い。」

先ほど、ローラ君に対して政府から捕捉命令が出たのだ。三日前のあの事件と、境界の外でも爆発、その事に君が関わっているか調べるためだ」

愕然として、言葉も出ない私に、所長はさらに言葉を重ねる。

「三日前の事はともかく、あの爆発ではローラ君がその場にいた。

これは何かあつたと思えん。美玖君にも話していないようだが、あの場で何があつたのかね？」

所長の目には、一切の妥協を許さぬ厳しさが宿っていた。私はそれを見て、境界の研究所は何かしらの情報を手に入れている事を直感した。

あの爆発の原因が私であることの根拠を。

私は観念して、あの爆発の原因を話した。もうどうにでもなれという投げやりな感情が私の頭の中を占め、美玖が驚愕の表情を浮かべている事にも関心は向かなかつた。

「ふむ、そういうことか・・・」

話を聞き終わつた所長は、しばらく考え込むように額に手を当てていたが、その顔には特に驚きなどの感情は見られなかつた。

「つまり、核融合炉は一瞬でも君の意思を受け取つたということかね？」

私が頷くと、所長は神妙な顔をする。

「このまま君を政府に受け渡してしまってもいいとは思っていたが、どうやら我々にはあまり時間が残されていないようだ。一度ほかの意思に負けた意思は、その意思に完全に負けるのに大して時間は掛からないのが常だ」

所長がもう一度私を真正面から見る。

「あの爆発の事に関しては、君が糾弾を受けないという保証は無い。だがその前にもう一度、君に別の人間として動いてもらう。少しでもある手がかりを、無駄にするのは度し難いのでな。君はローラではない別の人間として祖国に入国し、情報を手に入れたまえ」

「・・・はい」

私が頷くと、所長は満足気に頷き返し、少し意地悪そうな笑みを浮かべた。

「そうだ、新しい名前は・・・どうするかね？」

美玖がちらつとこちらを見る。その眼に期待があることを私は目ざとく受け取って、同時にこの所長には敵わないと思った。

「凜・・・鏡音凜にしてください」

私が静かに言つと、所長は驚きの白々しさで答える。

「いい名前だ」

この男、本当に気が利いているというかなんというか。私はそんな所長になんとなく対抗したくなって、尋ねた。

「じゃあ、所長さんは自分の名前のことをどう思ってるのかしら？」

所長は少し驚いた顔を見せ、答える。

「私が所長になってから、私の名前を聞いたのは君だけだよ。皆聞こうとしないのでな、少しばかり寂しく思っていた。

かむいがくぼ
神威学歩。それが私の名前だ」

私はこのヨーロッパ系の男の名前がかなり日本風だったことに関して大いに驚く。某ゲームの主人公（色白だった）の名前がアフリカ系の名前だった事を知った気分となんとなく似ていた。

「母方が君達と同郷でな、この顔は父の方が色濃く出た。ギャップ

の一つだから若いころは良い話題の種になったのだが・・・」

「神威所長・・・って」

美玖と私は顔を見合わせる。

「なんかイメージと違う」

私がそう言っていると美玖が吹き出した。

旅客機の窓から見える地上は、やはり眩しいほどの光に彩られている。

私がここを離れてから二年が経ったけれど、これだけはちつとも変っていない。夜の華やかさではこの国に勝るものは無いだろう。

私はこの国で使われているエネルギーが、人が「最低限文化的な生活」を送るためのものからどれぐらい逸脱しているのか考えようとして、その尺が存在していない事に気が付く。

月々の電気料金は、どれだけ電力を使用しているかではなく、送電設備にどれだけお金がかかっているかに影響されるのだ。一つの家ですらそんなものなのだから、国全体でどれだけエネルギーを使っているのなんて分かりようが無いのだ。

旅客機はこの国の心臓部分にも見える一際明るい場所へ向かっている。

私の住んでいた「聖域」のある都市は、日本という国の中心部だけあって、空港もある。聖域を一目見ようといつもはたくさん観光客がこの便に乗るのだが、今日はあの事件のあったせいか空席もある。

やがて旅客機が着陸し、私は空港に入り、入国審査を受ける。国籍はこちらの国では無く境界でのものだったことを、私は少しばかり寂しく思った。

久しぶりに見る日本語、空港に並ぶたくさんの商品と、それを売る店。それぞれの情報から、自分が欲しいと思うものを見つけて、

人々店に入っていく。私はなんとなく、誰も入っていない店が無いかどうか調べてみたけれど、当然ながらそんな店は存在しなかった。そして私はその中のどの情報に惹かれるでもなく、真っ直ぐに出口を目指した。私が最初に行きたかったのは、あの聖域だったからだ。深い理由は無い。ただ、人類が滅びてしまふほどの事件に向き合うための覚悟を決めようと思ったのだ。

ここから聖域までは、電車に乗って二十分ほどのところにある。私はその間、ホームや車内でまたしてもたくさんの広告情報に晒される。

二年前には気にならなかったこの光景も、ほとんど広告の存在しない境界から帰って来てみると、なんだか可笑しく思えてくる。結局、どんな会社も、繋がりを持っていなければ勝負なんてできないのだ。たとえ、どんなに個人が繋がりを持っていなくとも。

それは、奇妙に捻じ曲がった構造に見えた。

やがて私は見慣れた町へとたどり着く。もう遅い時刻だったけれど、華やかな街明かりと共に、たくさんの人々が行きかっている。

境界の研究所の発表により、ひとまずは原因がはつきりしたことである程度混乱は無くなっているようだ。

私はそんな雑踏の中を歩いていき、全ての発端となったものの裏側に位置する場所に向かう。

時刻はそろそろ午前二時を回るところだ。私は悠然とそびえ立つ三つの摩天楼と、その間にある三つの掛けた扇と一つの丸を目の前にした私は、ここであつた出来事を一つ一つ思い出す。

廉がいなくなってしまった夜。記憶を失い、廉の疑似人格に入れ替わってしまった夜。魁人と会い、忘れないと言ってもらえた夜。私にとつてもここは　この街のこの場所は　特別な場所だった。恐らく、ローラ・ゼロにとつても。

そう思つて摩天楼を見上げた瞬間、「それ」は現れた。

To m e l t d o w nの文字と、48:00:00:00:00の時間表示。

それはタイマーにしてはあまりにもばかげていて、私は口をわずかに開けたまま茫然としていた。

でも、すぐに直感する。

崩壊が始まったのだ、と。

本音と建て前は必ずしも表裏の関係であるとは限らない。

私がそのことに気付いたのは、やっぱり全てが終わってからだったけれど、「これ」は、つまりそういう事だったのだ。

真っ直ぐで、素直で、残酷な思いがこの出来事を起こしたのだから。

八、回帰（後書き）

前話から一か月以上かかってしまいましたが、無事八話も書き終えることができました。一応初作ですので、いつ止まってしまうかわかり不安です。

まあ題材がこの炉心融解であるかぎりそれは無いと思います。終わりも見えていますので。

最初に言っていた八話まで到達してしまったわけですが、まだ三話ぐらい続く予定です。次の話では私がずっと書きたかった描写が出てくるので楽しみです。試験がすぐにあるので困っております。高校生であるうちは逃げられぬ宿命ですね。

九、探究

死刑囚には死刑執行の時期が伝えられることは無い。

けれどいつか死ぬことだけは分かる。だからいつ死んでもいいように心の準備をする人もいるし、はつきりとした期限が無いゆえにそれが出来ない人もいる。

しかし世界はそんな日本の制度を完全に無視するような形で、人類にはつきりと死刑執行の宣言をしてしまった。

To melt downの文字と。

48:00:00:00から始まったカウントダウンで。

「なんなのよ・・・」

私は思わず呟いた。キッチンタイマー、目覚まし時計云々、時間表示をするものにはだいぶお世話になっている身だけれど、こんなに馬鹿げていて恐怖を感じるものは見たことが無かった。

それも当然だ。何せこれは人類の滅亡へのカウントダウンに他ならないのだから。

私はその文字が醸し出している奇妙な威圧感に気圧される形で、数歩後ずさる。私の頭の中といえば、早く何とかしなければという焦燥感でいっぱいだった。

早く核融合炉の融解と止めないと、早くローラゼロの意思を見つけて出さないと、早く・・・。

気が付くと私は聖域に背を向けて走り出していた。

それからの事は、あまり覚えていない。その時私が恐怖に支配されていた事は明らかだけれど、気が付いた時にはあら不思議、私は二年前に住んでいた部屋にいた。

二年前から全く家具の配置も、本棚の中の配置も全く変わってな

私の部屋。私がいつも使っていた椅子に座ると、放置されたことに抗議するかのように埃がふわっと舞う。

掃除、しとこうかな。確かクローゼットの横に掃除機があったはずだ。

そうして私は日常だった場所に逃げ道を求めて、立ち上がる。

と、見慣れた風景に何か異質なものが混じっている事に気が付いた。僅かに、だが確かに、その光はあった。生命の輝きを連想させる、それでいて自分を消し去ってしまいそうなほど暴力に満ちた光が。

ベランダからその光は差し込んでるように見える。私はそれにつられるようにベランダに向かった。私の理性はそれを猛烈に止めようとしたけれど、私の運動中枢までは届かない。

マンシヨンの十三階から見たのは、一際大きな摩天楼と肩を並べるように天までそびえる、巨大な光の柱だった。

私のほかにその方向を見ている者はいない。代わりに向こう側のマンシヨンから、僅かに太鼓か何かを叩くような音と、誰かの怒声が聞こえる。

確か向かいはログハウスのような雰囲気をもンシヨンで再現する、ちょっと変わった建物だったわけ。建てられてすぐに父さんと廉と一緒に見に行ったときに、木で作られた無駄に大きい螺旋階段があったのを鮮明に覚えている。吹き抜けになっていて、駆け上がった時に音が良く響いたのだ。

そこまで見聞きして、私はようやく理解した。

逃げることはできないんだって。

そう思うと、不思議と冷静になった。この期に及んで逃げ道を探していた自分に対して苦笑漏らすほどには、状況をつかめてくる。

境界での決意は、どこに行ってたのやら。

私は気を取り直すと、持ち主がいなくなってからほとんど足を踏み入れることの無かった廉の部屋の扉を開けた。

人にはそれぞれ物語がある。どれだけ平凡な人生だろうと、十四

年も生きていれば立派な伝記を書けるぐらいのイベントはあるし、そんなことをしなくなつてその人の物語はどこかに存在する。

そこは悲しいほど、私の双子の弟の部屋だつた。

本棚に置かれたたくさんの本。身長があまり伸びなかったから買い替えることも無かつた、子供のころに父さんに買ってもらつた勉強机。あの時、廉が様々な情報を目にしていたであろうデスクトップパソコン。そして睡眠薬。

持ち主がいらないからこそ、その影を連想させてしまうそれらを前に、私はしばし立ち尽くした。私と廉の境界線上で、廉の事を自分が思っていたほどには知らなかつたことをもう一度認識する。

そして、知りたいと思つた。世界を愛していると言つた私の双子の弟が、どうしてそう思い、高次元核融合炉を知り、そして逝つてしまつたのかを。

そうして、私は廉の部屋に満ちていた物語を貪つた。それは私が知っていた通りの廉の姿で、全て私が知っている物語ばかりだつた。私の知らない廉の姿は、その中のどこにも無かつた。

それから、どれぐらいの時間が経つたのだろう。廉の部屋の中で私が見ていない物は、廉の使っていたパソコンだけだ。

知ることも大事だけど、知らないほうが幸せなこともあるかも知れないと思つてさ。

廉は、この四角い箱を使って、いったい何を知つたのだろうか。

このパソコンは一応共同で使う事にしていたので、パスワードは知っていた。まあ私は自分でノートパソコンを買つたからこつちは使わなかつたのだけだ。

ログインして、デスクトップが表示されたとき、思わず私は息を呑んだ。画面に映っていたのは、父と、母と、廉と私。

それは、母が殺されてしまつた日の写真に他ならなかつた。あまりにも脆かつた、日常と言う名の幸せをありありと思い起こさせる笑顔が、私の目を射止める。

私が茫然としていると、画面右下でバルーンが「新着のメッセージ

があります」と、その存在をアピールした。

私がつられるようにそのバールンをクリックすると、たくさんのメールと思しきデータが表示された。差出人の欄をざっと見ると、どうやらそれは親しい人々、私や美玖たちからのもので、どうやら廉は一部の人のメールをインターネットを開かなくとも見られるように設定していたらしいことが分かった。

その中の一番上に表示されているメールの差出人と、日付に目が留まった。日付は、廉がいなくなってしまった日の午前四時。そして、差出人の名前は、鏡音廉だった。

それが私の驚愕と罪悪感を煽ったのは、言うまでもない。廉はあれから、少なくとも二時間以上は生きていたのだ。どうして止めてやれなかったんだらうと、私は何度思っても消えない問いをまた頭の中で反復する。

そしてあの少女が言っていたことは、本当だった。廉はいなくなってしまう直前に、ここに何かを遺していたのだ。

束の間私は目を閉じて、深呼吸をする。この部屋には、廉の物語はあっても、廉の気配は無い。まるでここに彼の存在が吸い寄せられてしまったかのようなだった。

私は、その未開封のメッセージを開いた。

『ただ一人の家族の君へ。』

これが読まれる頃には、僕はもうこの世界にいないだろうけど、君は元気になっているかな。突然あんなことになって、とてもびっくりしていると思う。正直、僕は君に合わせる顔が無いよ。

君は僕の事を思い出したくも無いかもしれない。当然だと思う。僕は逃げるための手段として、ここから居なくなることを選んだんだから。

だから、こうしてここに文章を残しておくことにするよ。僕が君に知ってもらいたい事はたくさんあるけど、君が知りたいと思っているとは限らないと思うから。

僕の思い過ごしかも知れないけど、どうして僕高次元核融合炉の

事に興味を持ったのかを、君は疑問に思っていると思う。

僕はその答えを、ちゃんと残したい。でも、それを知ってしまったら、君はこの世界に絶望してしまうかも知れない。だから、君が冷静にこれを知ることができるよう、ちょっとした質問でロックをかけようと思う、

質問は、僕が守るって言ったものの、それをいま僕が君にメールで送るとしたら、なんて打つか？」

その先に、何か入力するためのボックスがあった。

母さんが生かしてくれた君を、僕は何があっても守るよ。

そんなことを質問にするなんて、なんだか廉はひどく自暴自棄になっっていたようだ。

私は迷わず、それを肯定するためにキーボードを打つ。

『鏡音凜』

しかし、何も起きなかった。私はひどく動揺する。廉が見ていたのは、私では無かったのではないかという考えが、頭の中をかき回した。

と、ボックスの横にもう一文文章があったことに気が付いた。

『普通に答えるだけじゃ、だめだよ。ヒントは、僕がこの文章をどうやって送ったかってこと』

そう云われても、あれはもう五年も前の事だ。そんなこと、分かるはずが無い。

私は舌を噛んだ。廉が私達に伝えてくれたことの根源を、知ることが出来ないのではないか、そしてこのまま核融合炉の融解を止める手立てが見つかからないのではないかという焦燥感が、私を焦がした。その時、突然携帯端末が鳴りだした。慌てて取り出すと、美玖からの電話だった。

『凜！電話に出ないから、何かあったのか心配したのよ！それに、聖域でのあのカウントダウン！いったい何があったの？』

甲高い声が、美玖かなり動揺していることを物語っている。

「ごめん、私もあれを見たせいですごく混乱しちゃって、電話に気

が付かなかった。何が原因か分からないけど、あれから、聖域から光の柱みたいなのが見えるの。多分核融合炉の融解は、かなり進んでると思う・・・」

電話越しに、美玖が息を呑む音が聞こえた。私は僅かにしまったなと思った。現状報告をするにしても、ストレートに言い過ぎた。

『そっか、本当に融解は進んでしまっているのね・・・。それで、凜、目当ての情報は手に入った？』

少し時間が開いたけれど、思っていたよりも冷静な声で質問が来た。

「それが、廉がメッセージを残している事は分かったんだけど、廉がそれに質問を載せてロックしているから見るできないのよ」

『どんな質問なの？』

「廉が、守るって言うていたものだって、いつも言うていたから鏡音凜って漢字で打ったんだけど、それが答えじゃないみたい。廉がどうやって自分のパソコンにメッセージを送ったか、っていうのがヒントで書かれてたんだけど・・・」

『うーん・・・。普通に考えたら携帯端末で送ってると思うけど、それじゃどんな答えになるのか想像がつかないわね』

私はおもむろに腕を組んだ。そうしたときに、自分のタッチパネル式携帯端末が目に入る。その瞬間、ある考えが頭の中をよぎった。「美玖、答えが分かったわ。私は今からこっちの役割に専念するか、美玖はそっちで調べものをして頂戴」

「え！ちよつと凜・・・」

私は居ても経ってもいらなくなって電話を切った。そして画面にもう一度向き合う。廉も、私と同じタッチパネル式の携帯端末を使っていた。けれど、それはちよつと変わったやつで、テンキーも一緒についているタイプだったのだ。

子供の頃、私が使っていたのは旧式のテンキーがメインの携帯端末だった。それで文字を打った時に、予測変換で数字が表示されているのを見たことがある人はいるだろうか。

廉のヒントは、この事を云っていたのだ。つまり。

『22*77555599000』

「か」は、2を一回、「が」は2を一回と*を一回、というふうにテンキー上では打っているのだ。こういう頓智では流石だなと思った。確かに冷静になってみないとこれは分からない。

私がエンターキーを押すと、僅かな読み込み時間を経て、新たな文章が表示された。

『質問の答えが分かったみたいだね。自分言うのもなんだけど、ここから先はどうか心して読んで欲しい。知って、どうするかは君の自由だけど、できることなら僕は君に絶望なんかして欲しくない。』

ちなみに、この先の文章は今日書いたんじゃない。今年になって書いたものに少し修正したものだよ。言ってみれば遺書みたいなものかな、どうして書いたのかは文章の後の方に書いてあるよ。

最初に、僕がどうして高次元核融合炉の事に興味を持ったのかを知ってもらおう。

父さんが死んでしまって、僕らを守るものが何一つ無くなってしまった時、僕が君を守ってあげなきゃって思った。でも、僕は力も無かったし、当然お金を稼ぐこともできない。僕はそれが悔しくてたまらなかつたんだ。

だから僕はこの世界がどのように出来ているのかを知ろうと思つたんだ。非力な自分でも何か出来ることがあるのかどうかを探したかった。そうやって本を読んだり、ネットの海を泳いだりして、高次元核融合炉がこの世界を支えている事を知った。でも、高次元核融合炉の事はその頃の僕にはとても理解できるようなものじゃなかった。それがまた悔しくて、その時から僕は必死に勉強をした。』

それは父が死んでしまった日から変わった、私が見ていた廉の姿そのものだ。

『そうして僕らが中学生になった時に、僕は偶然、高次元核融合炉の情報をより詳しく載せているサイトを見つけたんだ。』

その人は高次元核融合炉の研究をしている人で、名前はレオン・

ゼロ。高次元核融合炉の存在をこの世界に発表した研究者と、同姓同名だった。

その人は、日記みたいな感じで研究成果を載せていつていたんだ。どうやら核融合炉が作られた時に、何があったのかを調べていたみたいで、昔話みたいに当時の出来事を語るのが、とても面白くて、彼が高次元核融合炉の研究をすることに生きがいを感じているのが伝わって来たよ。

君に直接読んでもらいたかったんだけど、そのサイトはもう無くなってしまった。まあ無理もないと思ったけどね、それだけこの話は怖い情報だったから。

だから、代わりに僕が伝える。僕が最も尊敬する女性の物語が、忘れ去られてしまわないように、君がもしその時を迎えて、何もわからないうちに消えてしまわないように」

廉のあの射抜くような眼が、脳裏に浮かびあがった。間違いなく、この先に「私の知らない廉」がいると直感する。

『ローラ・ゼロには妹がいた。歳はそんなに離れていなくて、とても仲の良い姉妹だったみたいだよ。名前は、マリウム。戦場での取材を主とするジャーナリストで、言うならば戦場カメラマンだったんだ。』

彼女は、環境破壊に端を発した紛争での悲惨な光景を写真に写し取って、こんな争いは止めようってメディアを通じて発信していた数少ない記者だった。自分の近くで紛争が起きているのに、他の国の情勢を知ろうとする人はほとんどいなかったからね。

戦場カメラマンとして働く日々は、やっぱり辛いことが多くて、たびたびローラに愚痴を漏らしていたみたいだ。その度に、核融合炉の研究者である彼女は、研究が成功したときに世界がどんなに素晴らしいものになるかを話した。そして核融合炉が出来たらやりたいうことを二人で出し合って、たくさん約束をした。

ローラはマリウムから世界のあり様を聞いてその使命感を強くして、マリウムはローラの研究から希望を得る。そんな二人だった。

けれど、それは最悪のタイミングで引き裂かれることとなった。

当時、同僚だったレオンに、ローラがプロポーズされたことからそれは始まった。レオンと同じようにローラも彼に惹かれていたから、あっさり承諾して、二人は入籍することになった。そのおかげで研究所内はちよつとの間とても明るくなって、当然マリウムも喜んで、結婚式に行きたいとローラに伝えた。

式の当日、幸せの絶頂の中で、ローラはマリウムの到着を待っていた。マリウムも、女性として新たな道を歩むローラの姿を想像して微笑んでいたに違いなかった。

そして、それは起こった。

マリウムの乗っていた旅客機が武装グループにハイジャックされて、当時の聖域にあった摩天楼に突っ込んだんだ。丁度そのころ、今の高次元核融合炉の元になった空間がそこには存在していて、衝突のショックで異次元空間が開いてしまったんだ。

そして、今の核融合炉の空間は、旅客機ごとマリウムを呑みこんでしまった。

それを、ローラは、そのことをニュースで知った。自分が研究していたものにマリウムが飲み込まれることが何を意味するのかをよく知っていて、絶望を深めることになった。

マリウムは、その空間に入ったことで、どんな形も成さないほど小さな粒子にまでバラバラにされてしまったんだ。

ローラが今の核融合炉の空間が人の意思を反映する空間なんじゃないかって言い始めたのは、丁度その頃からだった。同時に、ローラは一冊の本を書き始める。電子書籍では無く、直筆で。

マリウムが異空間に消えてから約一か月後、ローラは摩天楼の屋上に立っていた。時刻は午前二時、丁度その建物にあった監視カメラがその様子を捉えていて、その建物で、異空間に繋がる扉を起動していたのも見られていた。今と違って、あの空間は機械で制御されていて、扉さえ開ければ誰でも何でも入ることが出来たんだ。

そして、ローラはそこから飛び降りた。今の聖域の彼女が自ら開い

た異空間への扉に向かって。マリウムとの約束を実現できる世界を作るために、彼女との約束を守るために。

後に、レオンは彼女が書いた本を見つけ、高次元核融合炉の存在を発表した。

そして、現在のレオン・ゼロが、奇跡的にその本を入手したんだ』求めていた情報は、手に入れた。ローラ・ゼロは、マリウムとの約束を守るために、高次元核融合炉を形作つたのだ。でも、私には釈然としないものが残る。これだけじゃない気がしたのだ。廉が、世界のためと言って死んだ理由が、ローラ・ゼロの行為をなぞることだけではないという直感が、私を美玖には連絡させず、その先の文章を読ませた。

『その本から核融合炉の作られたいきさつ、創造者の思いを知ったレオン・ゼロは、もっと研究に勤しんだ。僕も、この話を知って皆に伝えたいと思った。

でも、レオン・ゼロがその後の研究で見つけたものは、到底希望とは呼べないものだったんだ。

問題は、二つあった。一つは、ローラが高次元核融合炉を作ってから、誰もあの空間には入ることが出来なくなってしまったこと。二つ目は、核融合炉を作った人の意思が、たった一人の意思だったことだ。

誰も核融合炉に入ることが出来ないという事は、核融合炉が故障しても、誰も直すことは出来ない。そして人間一人の意思では、核融合炉は百年ぐらいしかその意図に従わないことが分かったんだ。

そして、もう核融合炉が出来てから一世紀は経っている。レオン・ゼロは、そのことに恐怖したみたいだ。一度だけそのことをサイトにアップしたけど、見る人がほとんどいないうちにほかの情報ごと削除してしまった。

当然だけど、僕も怖くなった。レオン・ゼロの云ったことは確かに的を射ていたし、本人も情報を消してしまうほど恐れていたんだ。何年後かも分からない未来に、確実にこの世界が終わってしまうん

だから。

だから、僕は世界がいつ終わってしまってもいいように、僕が出来ることで少しでも世界を良いものにしようって思ったんだ。だから、僕はこうして遺書を書いた。本当は、自分で生きて、出来る限り頑張ってみようって思ってたんだ。

でも、あの時、僕は人を殺してしまった。本当は、行動できないぐらいの傷を負わせて、警察にでも引き渡せばよかったんだ。それなのに僕は君を殺そうとしたあの人たちが許せなくて、躊躇無く頭を打ちぬいてしまった。しかも最悪な事に、僕はその時にどうしようもなく快感を覚えていた。人を殺すことを嬉々としてやってしまっただ。もうすぐ終わりが来るって言うのに、自分が理想としている世界の害悪になってしまった自分を、どうしても許せなかった。あの場にいる全員を打ち抜いた後、後悔するように銃を見つめていた廉の瞳が、不意に脳裏をよぎった。

『僕から語れるのは、これで全部だよ。最初の方に書いたように、これを知ってどうするのかは、君の自由だ。もしかしたら、戸惑っているのかも知れないし、怖いとも思ったかも知れない。でも、君はそれを吹き飛ばすことが出来るって信じてる。だって、君はあれだけ僕が脅してしまったのに、僕の事を忘れずにこれを読んでいるんだから。』

最初の質問で、僕は君を守るって言ったことを答えにしたけど、今でもその気持ちは変わらないよ。自分勝手だって思うけど、たとえこの世界から居なくなっても、僕は君の事を想い続ける。同じ世界に居なくても、君と僕は繋がってるって信じてるよ。』

文章は、それで終わりだった。

私は、ふっと微笑を洩らす。これから自殺するっていうのに、廉はひどく冷静だった。

普通、自殺という選択肢は選ぶものではない。現実と言う名の敵に対して、自分が完全に敗北してしまったときにそれは現れるのだ。だから、あがいて克服する人はいるし、無論傍から見たらそんなに

たいそんな事ではないこともよくある。

でも、廉は死ぬ前にこんなことをするぐらい冷静で、自殺を「選んで」いた

窓からは、少し陰りのある赤色の光が部屋に差し込んでいた。それを追って、窓の外の光景に目が行く。

私が気づかないうちに日は昇っているところか、もうすでに落ちてかけていた。その泣き腫らしたような赤色が、核融合炉の放つ光と合わさって現実感のない光景を作り出す。

こうやって、溶けるように少しずつ、少しずつ、世界は死んで行っている。ローラ・ゼロが核融合炉を作り出したその日から。

もしかしたら、廉はあの時から世界をこういう風に見ていたのかも知れない。だから、自殺を選んだ。終わりゆく世界が、少しでも綺麗であるように。

終末というものが、少しでも幻想的に、魅力的に感じてしまうことは、私にもある。自殺という選択肢が、「楽になれる」という印象を持つことと同じような意味で。

そう考えると、ずっと自分の中に落ちるものがあつた。けれど、そのことに、何故か私は行き所のない、もやもやしたものを感ずる。その感じのせいか、急に誰かと話したくなり、美玖の携帯端末に電話をする。

『もしもし……。あ、凜！急に電話を切ったから、びっくりしたのよ！』

「ごめんごめん。閃いたら居ても経つてもいられなくなっちゃってさ」

『もう、凜はいつも一人で突っ走っちゃうんだから。たまには私の事も頼ってほしいわ』

頼る。その言葉を聞いて、私は一瞬言葉を詰まらせた。それは、私が廉にして欲しかったことに違いなかったのだ。そしてその思いが、私に口を開かせる。

「うん、そうする……。まずはこっちの情報と、美玖の情報を合

わせよう」

私は、廉の遺言から得られた、ローラ・ゼロが高次元核融合炉を作ったいきさつ、それから、廉がどうして核融合炉のことを深く知るようになったのか、そして、なぜあのような形でいなくなってしまったのかを全て話した。

自分でも意外なことに、それを話すのは思っていたよりも辛くは無かった。代わりに、そのような友人がいることを、心のどこかで感じた。

美玖の言うには、あのカウントダウンが現れて以降、境界の研究所はそれはもう大変な騒ぎだそうだ。あれから調査隊が組まれ、日本も含む各国の核融合炉の繋がる装置などを調べまわっているそうだが、核融合炉は全く異常を起こすことなく、今までそうであったようにエネルギーを送り続けている。

あのカウントダウン自体が誰かの陰謀なんじゃないかとも思われたが、映像を出力している装置も見られず、何をやってもあの文字は消えないようだ。

調査が難航していることで、静まりかけていたあの混乱が、また繰り返している。世界中の人達が、あのカウントダウンのせいで様々な心情の変化を抱えているようだ。

ある者は絶望し、またある者は認めず、結構な割合の人は自分のとる態度を決めかねている。あの事件で漠然としていた不安が、一気に形として現れてしまったのだ。

『なんていうか、不気味ね。役割自体はきっちりとなしつつ、高次元核融合炉は私達にその牙を剥けようとしている。一刻も早く、核融合炉の融解を止めないと・・・』

私は電話越しに頷く。

「うん。これから核融合炉の空間に入って、ローラ・ゼロの感情を完全に読み取る。それから、向こうの私と協力して、核融合炉の融解を止めるわ」

『あ・・・凜、ちょっとそのことをお願いがあるんだけど』

「何？あのカウントダウンの正体なら、ちゃんと確かめるわよ」

『うっん、そうじゃないの。私の個人的なお願いなんだけど、もし核融合炉の融解を止める方法が見つかったら、一度こっちの世界に帰って来て、私達に相談して』

私は一瞬躊躇し、そして返事をした。

「わかった、絶対帰ってくる」

『うん。じゃあ気を付けてね』

耳障りな回線を切断する音が、耳の中にこだまする。

さて、これからあの恐怖体験をしなきゃなんないのか・・・。

と、私は窓の外を見ながらいささか呑気に思う。しかし、そんな心配はする意味も無かったし、実際必要も無かった。

突然、私を中心に世界が歪み、私は思わず動きを止めた。声を上げる間もなく、私は周りを赤い霧に囲まれた部屋の中心に立っていた。

見ると、白いワンピースを着た少女が、もとはちよつとしたパノラマだったであろう広い窓に向かっている。そしてその先には、逆さまになった To melt down の文字と時間表示だった。

「やあ、僕が作ったこれを、皆は楽しんでくれているのかな？」

少女は、ただ無邪気に言う。

世界は動き、止まらない。そうでなくては、崩れてしまうから。

たとえ、どんなに歪んだ形でも、貪欲に進み続ける。

けれど、時として私達は世界に止まれと望む。

自分自身が崩れるのを、何よりも恐れているから。

十、追憶

純粹さは、時にどんな傷も癒し、そして、どんな刃にも勝る。

目の前の少女が言ったことは、そのことをありありと表していた。

「どうして・・・」

私は逆さまになった To melt down の文字と、カウン
トダウンに視線を投げつつ、戸惑いながら言う。

「どうしてこんなものを作ったのよ！」

私がどんなに困惑しようと、少女は全く表情を変えない。ただ楽
しそうな笑みを浮かべ、くすくすと笑うだけだ。

「どうしてって？それはね、この世界の人達に、廉が味わった絶望
を感じてもらおうと思ったからだよ。廉に自殺しなきゃいけないな
んて思わせた世界を作り上げてきた人達でも、そうやって追体験を
させたらどうなるか、君も興味あるだろう？」

私はそのあまりにも真っ直ぐな悪意に気圧される。けれど、それ
を押し返すように、私の中で怒りが言葉となって湧き出した。

「そんなことをして意味なんてあるの？あんたのやった事はね、い
たずらで殺人予告をするようなものよ！」

「でも、実際問題これから世界は滅びるよ？」

「それを、私達が止めるんでしょう！」

氣に入らない・・・。

この少女は、自分のやった事を正しいと信じて疑っていない。私
はもどかしさのあまり手を強く握りしめていた。そのまま数秒間少
女とにらみ合う。

やがて、少女が急に気の抜けたような微笑を洩らした。

「やっぱり、君はそう言うんだね・・・」

「？」

この少女は、元々私から生まれたというのに、相変わらず何を考
えているか分からない。そう、例えるならばあの時の廉のように。

「それじゃあ、君が見つけたローラ・ゼロの記憶を、もっと鮮明に読み取ろうか。まあ、既に君の得た情報からここまでは再現したけどね」

少女は先ほどの悪意が無かったこのように話題を変え、ついでのように両手を広げる。すると、二十代半ば見えるヨーロッパ系の男女が現れる。女性は窓から見える Tom meet down の文字・・・ではなく代わりに現れていた摩天楼を眺めていた。

『正気なのか、ローラ・・・』

男が、女性、ローラ・ゼロに問い直すように言う。彼女は振り返らず、冷然とした態度で答えた。

『ええ、もちろんよ。間違はなく、この空間は人の意思を反映させる機能を持っている。あなたも知っているでしょう？あの事件で、被害者の全ての遺族が彼らの言葉を、丁度あの時刻に聞いているのよ。一人や二人程度ならそれこそ笑ってしまうような話だけど、これが百人以上も確認されている。なりより、あの時刻に私自身もマリアムの声を聞いた。』

これがあの空間の作用でなくて、なんだと言うのよ。胡散臭い心靈現象よりも、よっぽど信用できるとは思わない？ねえ、レオン』

男、レオン・ゼロは少し言葉に詰まりつつ、しかししっかりと口調で言う。

『そのことに関しては俺も賛同している。だが、それだけであの空間が人の意思を反映させるといふのは短絡的すぎると思う。あの事件では、乗客は誰一人として生き残っていないんだぞ』

突然現れた男女と、その会話の非常識さに、私は茫然とするだけだったけれど、ここまで聞いてようやく話の流れがつかめた。

これは、マリアムが飛行機事故で亡くなってからの事で、どうやら、核融合炉の空間の事について、ローラとレオンが議論しているようだ。

ローラの言い分は事故当時に彼女を含む百人を超す人に、事故で亡くなった人達の声が届いたことを理由に挙げ、核融合炉の空間が人

の意思を反映するのではないのかと言っている。

対して、レオンは飛行機事故で「死にたくない」という思いを核融合炉の空間が反映しなかったことから、また違う理由があると言っている。

いや、違うな・・・レオンは何かを止めようとしている・・・？
ふふつ、とローラが微笑を洩らし、会話の中で初めてレオンを振り返る。

『テロリズムというのはね、レオン』

いきなりな話題の転換に、レオンも私も訳が分からず顔をしかめる。少女だけが、無表情だった。

『力を持たない者がやるもののよ。飢えに苦しみ、圧政に虐げられても、自分達がそれを止めると言えないから、言っても聞き入れてもらえないから暴力に訴える。それをどこにぶつけていいかさえ分らない者たちが、あのような事件を起こすのよ。』

きっと、あの飛行機は元々原子力発電所に落ちるはずだったのでしようね、もしそうなっていたら、私達はこの研究を続けることすらできなかったかもしれない。でもね、あの飛行機がああ空間に墜落したことで、私達は被害を受けず、しかも研究のヒントを受けたのよ、たくさんの方が犠牲になって生じたこの機会を生かさない訳にはいかないでしょう？』

『だからって、あの空間に直接飛び込むなんて、無謀にもほどがあるだろう！』

レオンが声を荒らげる。

『私にとってね、これは復讐でもあるのよ。もしこれが成功すれば、私達はもう争う必要が無くなる、有り余るエネルギーは、戦争の意味を無くすでしょう。そうすれば、今の軍需産業で儲かっている者達は行き場を無くし、戦犯者は裁かれる。マリウムが心を痛めていた光景を生み出し続けた者達に決定的な打撃を与えられる。』

それにね、もし仮に私が何も成し遂げられず、ただあの空間に消えるだけだとしても、絶望が人々の間に広がるでしょう。私の研究

の一部は、もう広く知られているもの。

どっちに転んでも、私はマリラムを消し去ったこの世界に復讐することができる。それが私の願いよ、レオン、あなたなら分かるでしょう？」

沈黙が、二人の間を流れる。それは、意外な事に拒絶では無くある種の共感のようだった。私には理解できない何か、まるで二人を結びつける「鎖」のようにそこに在った。

『それでも・・・俺は賛成できない』

やがて、レオンが静かに口を開いた。それを受け取るローラの表情からは、失望では無くどこか満足したような雰囲気が伝わる。

『やっぱり、私は幸せな女・・・』

そう言うと、ローラはレオンの方へ歩き出し、しかしすれ違っその部屋から出ようとする。その進路上に私がいて、通常の空間ならば正面衝突する状況になる。が、そうはならず、ローラは私をすり抜けるようにして通過していった。

その直後、目の前の光景が歪み、今度は街明かりに照らされる夜空が現れる。皮肉な事に、私はその明かりの少なさにどこか物足りなさを感じた。そのぐらい、今の夜の街とは明るさが違ったのだ。

「どうやら、さっきの会話の前にローラはレオンに、核融合炉になる空間に飛び込むことを伝えていたみたいだね、多分、自分が書いた『本』のことも伝えていたんじゃないかな」

「そのようね」

私はここがあの摩天楼の屋上であることを目で確認しつつ答えた。

『これで・・・最後ね』

不意に、頭に直接響くような声が、どこからともなく聞こえる。反射的に振り返ると、ローラが屋上に出てくるのが見えた。彼女は私達のほうへ歩いてくる。その表情からは、これから成すことの決意では無く、どこか戸惑っているような雰囲気が伝わってきた。

ローラはおもむろに足を止めると、来ていたコートの中から何かの端末を取りだし、じっと見つめる。

『ねえ、マリウム。正直、私はこの世界が憎い。あなたや私を幸福の絶頂から突き落とすようなこの世界を、どうしても許すことが出来ないわ。でも、あなたが良いものにしようとしていた世界を救いたいと思う。』

だから、私は賭けをする。もしこれが成功したら、誰もここには立ち入らせなくさせる。だってあなたは、ここにいるんだもの。誰にもあなたの場所に踏み入れさせたくないわ。

そしてもし、これが失敗したなら、私はこの世界の破滅を望む。こんな世界なんて、壊れてしまえばいい。

私は復讐のためだったらこの身を投げるのも構わないわ。あなたがいない世界に、私が生きる意味なんて無いもの。』

彼女のマリウムへの独白に、私は思わず息を呑む。それは、廉やグミがいなくなってしまうってから世界に抱いた感情と同じものだった。そして自分自身を消し去ろうとする願望も。

ローラが、手に取った端末を操作する。すると、摩天楼の正面の景色が歪む。

『今そこに行くわ、マリウム』

そう言つと、ローラは走り出し、その歪みに飛び込んだ。

そして、世界は変わる。

私の周りに広がるのは、見渡す限りの海と空。私と少女は、しばらく無言でそれらを眺めていた。

「やっぱり、そうだったんだ・・・」

少女は、何かを惜しむように呟いた。そして、私の方を向く。私も、少女の方を向き、見つめあう。

「ずっとこの空間上で、この空間を形作り、制御している意思を探し続けてきたけど、そんなもの最初からここには存在しなかったんだ・・・」

少女の言葉に、私も遅れながらも理解した。ローラ・ゼロが核融合炉を作った時の思い、その意思が意味することを。

私の思いと、ローラの思いが合致していた。それが答えだったのだ。

そうでなければ、この空間に入ることすらできなかったはずなのだ。この空間は、もはやローラの意思を中心として存在しているのでは無い、私という存在を核としてここにあるのだ。

そして、それが示すのは、ローラの意思に偽造して高次元核融合炉を制御することが出来ない、ということだった。

理由は二つある。一つは、ローラ自身が、この世界の破滅を望んだことだ。ローラの意味が完全に消えれば、核融合炉はローラが失敗したと受け取り、その望みを果たす。今のこの段階は、その前触れに過ぎないのだ。

二つ目は、私がこの空間の核であることで、ローラの意味が私の思いと同調し、定着してしまったことだった。

少女は、核融合炉を構成している意思が、この空間上で見つけることは出来ても、その感情を読み取ることが出来ないことを疑問に思っていた。だからその感情に目星を付ければ読み取れると思っていたらしいが、それは全くの間違いだった。

核融合炉を構成していた感情は、私自身が受け持っていたのだから。

美玖が立てていた仮説は、正確に言う間違いだった。いくら元々の次元を拡張して出来ていたとしても、核融合炉の空間が消えれば、その中にある物質は存在すら許されなくなる。しかしこの世界に今も存在する私が、核融合炉の中核を担っていることで、ローラの意思が消えても、核融合炉自体は残ってしまうのだ。

少女は長々と話し続けたが、私の耳にはその声は届かず、情報だけが私の頭の中で反復される。

どちらにせよ、結論は一つだった。

核融合炉の融解を止めるためには、私が消えなければならない。

それだけ。

少女曰く、私が核融合炉の融解を止めようと思うのなら、核融合炉が完全に融解を起こす瞬間、つまりローラ・ゼロの意思が完全に消える瞬間に、核融合炉に飛び込むのが最も確実なのだそうだ。しかも、その時に何かを望めば、ローラの意思に邪魔されることなく、何かしらの思いを核融合炉が拾うことだってありうるそうだ。

しかし、それをやれば確実に私は死ぬ。

「もしかして、グミが私に教えなかった人類を救う方法って、このことだったのかも知れないわね」

私は、終始茫然としながら話を聞くだけだったけれど、不意にグミの事が頭をよぎると、不思議と頭が冴えた。

「十中八九、そうだろうね。君が核融合炉の核だってことを知らなくても、ローラ・ゼロの意思が完全に消える時がチャンスだってことは分かるだろうしね。僕も、実はその方法が使えるんじゃないかって思っていたけど」

「それにしても、皮肉ね」

私は自嘲気味に言う。

「核融合炉が出来た時も、ローラが高次元空間上に飛び込んだ。そして、その融解を防ぐために、今度は別の人間が飛び込む必要があるって。まるで生贄みたいじゃない」

少女は、何も言わない。

「こうなるとあなたの作ったこのカウントダウンが、ちょっとは役に立つものになったって訳ね。私の余生を百分の一秒単位で表しているなんて、ちょっと洒落たものじゃない」

どこかの科学館が何かで、八十まで生きると仮定してあと何秒で死ぬか、というカウントダウンを作る。という端末のことを思い出して、私は思わず口を歪める。

「まあ、あなたにとっても同じこと、そうでしょ？」

私が聞くと、少女はようやく口を開いた。

「すでにこの世界を救う事に決めてるんだね・・・」

そんな少女の言葉に、一瞬私が言葉を失う。そして、私とこの少女は限りなく核融合炉を作った人物に近い道を歩んでいることに気付く。

「当たり前でしょ？ 廉が愛してると言っただ世界を、このまま滅ぼす訳にはいかないんだから。あなたがもし、私が廉に対すイメージで生まれたんだっただら分かるでしょう？」

「まあ、そうだね」

少女は苦笑する。

「じゃ、あなたもあと丸二日の余生を楽しみなさい。私は元の世界に戻るわ」

「君も、楽しめるといいんだけどね・・・」

「・・・どうかしらね」

カウンタダウンは、あと二十四時間を切っていた。

私はなんとなく目を閉じ、自分の部屋を思い浮かべる、核融合炉が私を核としているなら、元の世界に戻るくらいは出来るはずだ。

少しして目を開けると、狙い通り私の部屋が視界を埋める。やっぱり、私は核融合炉の核となったのだ。そう思うと、何故かこの部屋が見知らぬ誰かの物のように見えてくる。

今なら、廉の気持ちが少しは分かるような気がした。あと少しで終わってしまうものというのは、たまらなく愛おしいのだ。この世界は、もうあと一日で終わる。そして、それを止めるには、私がこの空間からあと一日足らずで消えなければならない。

どちらにせよ、「私の世界」は終わるのだ。

私は、自室に置いてあったテレビをつける。美玖が便宜を図ってくれて、水道とか電気は使えるようにしてもらったから、これも見る事が出来た。テレビは貴重な情報源だ。

ソファに座って見ていると、やはりというかニュースとか特番しかやっていなかった。それぞれの中継所で各地の混乱が伝えられ、名前なんか聞いたことも無いような専門家達が活発な議論を繰り広

げている。

どこもかしこも、狂乱状態だった。まるで、目的地を失ってしまった蟻の行列のように、人々の生活も、議論も、夜遊びも無茶苦茶になっていた。

そのカウントダウンを作ったのは、私の分身とも言うべき人です。彼女は、貴方達を絶望に陥れるために、あれを作りました。

そして、私がこの世界に存在することで、核融合炉のエネルギーがこちらの世界に漏れ出てしまいます。

限界だった。

私は、そこにあつた花瓶を、叫び声を上げながらテレビに投げつけた。すごい音がして、液晶が割れ、画面がブラックアウトする。しかし、音声は止まらなかった。司会者の焦ったような声と、専門家達の声が永延と流される。目を逸らそうとして、テレビ台の横の時計が目に残る。その秒針が、刻一刻と動くさまを見ると、言いようのない恐怖が私を支配する。それにつられ、あの少女の忍び笑いが耳の奥で再生され、反響すると、それに罪悪感じみたものが加わる。私の鼓動は、どんどん速くなり、耳の中でひどい耳鳴りさえし始めた。

私は、無我夢中でテレビの電源を消した。部屋には、時計の秒針の音と、私の荒い呼吸だけが残った。

もう何も、聞きたくない。

私はソファに座り込み、目を閉じる。二十四時間ずっと半狂乱状態で起き続けていた私は、驚くほど早く眠りに吸い込まれた、

私は、アパートの一室にいた。

一瞬、私にはここがどこか分からなかったけれど、そんなことは問題にはならなかった。目の前にいるのは、真っ白なワンピースを着た十歳ぐらいの少女と、同じぐらいの歳に見える少年だったから

だ。

母が撃ち殺される一週間前、私と廉は誕生日でもないのに新しい服を買ってもらったのだ。どうして買ってもらえたのかは今になっては分からないけれど、一週間後に遊園地にまで連れて行ってもらえると聞いて、私と廉は大いにはしゃいでいたのだ。

少年と少女は、とても、とても幸せそうだった。

やがて、廉が父親に呼ばれ、少女は一人になった。残されて暇そうな少女は、春風に揺れる窓のカーテンを見つめていた。

私は、ゆっくりと少女に近づく。いきなり押し倒し、馬乗りになってその首を絞めた。

私がいなければ、あんなことにはならなかったのに！

けれど、私は急に恐ろしくなつて手を放す。すると、少女は何事も無かつたかのようにこちらを振り返った。その無垢な瞳に、私は何かを言おうとしたけれど、ここ数日の不養生のせいで乾いて切れた唇から零れ出たのは、金魚が酸素を求めて吐き出す泡のような言葉にならないものだった。

こんなことをしても、何も変わらないのだ。

私は、夜の街を歩いていた。街明かりは暴力的で、とても怖がりだ。

「『聖域』？ そいつはもの好きだな。まあ海外からの最大の観光地ではあるが・・・どうしてそんなところに行くんだ？」

隣を歩いているのは・・・多分、魁人かいとだろう。

「核融合炉に飛び込んでみたいと思って」

そういえば、あの頃はまだ高校生になつたばかりだったわけ？ だとしたら、ずいぶんと不用心だったものだ。

私の発言に魁人が面食らい、私がそれを茶化していると、いつの間にか聖域の前に来ていた。

「廉がね・・・言った言葉だったのよ」

ああ、そうだ。

「核融合炉に飛び込んでみたいって」

この想いだ。核融合炉を繋ぎとめてしまったのは。廉を求めたこの気持ちも、全ての始まりだったのだ。そして自分を消し去りたいという想いも、彼女の想いと一致した。

私が一歩踏み出すと同時に、世界が歪む。

隣にいた魁人は消え去り、街中を歩いていた人々は誰一人として居なくなつた。ただ、残るのは街明かりと、私だけ。

私はあの日魁人に言われた通り、自分の家に帰ることにする。

帰り道にも、誰一人としてすれ違うことは無かった。私は、無感動に、何も考えないように、ただ道を歩く。

家に着いた時刻は、あの日とは違ってまだ真夜中だった。そういえば、あの時は魁人に病院に引っ張っていかれて、いろんな検査を受けさせられたんだっけ。まったくおせっかいなやつだ。

廉がいなくなつてから、私がここを離れるまで、三年。一年間は記憶が無かつたけど、二人で住んでいた部屋に一人で住むというのは、なんだかんだ気にしたことは無かつた。まあそれどころじゃなかつた、とも言えるけど。

しかし今になって、急に二人分の生活スペースの広さと静寂が、寂しいものを感じた。

この光景が、他のどんな家庭にも広がっているのだろうか。そう考えると、胸に何かがつつかえたようになり、これまで一度も止まることの無い呼吸が乱れ、上手に息ができなくなる。

夢・・・よね。

目を開けると、そこは見慣れた自分の部屋だった。昨日の夜、私が花瓶を投げたせいでテレビ台はそれはもう悲惨な事になっている。

束の間、私はあのような暴挙に出たことを後悔した。

毛布も何も被らずに寝てしまったから、ひどく体が冷えていたし、しかもおなかも減っていた。私はソファに座って寝ていたせいで固まった肩とか首とかをほぐしながら立ち上がる。とりあえず体を暖めて何か食べとかなないと、何も出来そうにない。

シャワーを浴びて、また自分の部屋に戻ると、時計は午後二時を指していた。・・・どうやら十時間以上寝ていたらしい。ソファに座ると悲惨な状態なテレビがまた目に入り、ため息が出た。まさかこのままにしておく訳にもいかない。私はうんざりしながらとりあえず向こうで買っておいだ携帯食料を食べる。

すぐに食べ終わって、床に散らばっているテレビの残骸を片付けようと思ったところに、美玖^{みく}から電話が来た。

『もしもし、凜？よかった！このまま連絡が取れなかったらどうしようかと思ってたのよ』

「う、うん」

そういえば美玖に帰ってきたら連絡するって約束していたっけ。

忘れていた事に自己嫌悪して、言葉に詰まった。

『こっちの報告からするわね。あのカウントダウンは二十四時間を切ったけれど、依然として各国にある核融合炉のエネルギー出力装置は、全く問題なく作動しているわ。境界のほうでも、結構な割合でローラ・ゼロの記憶の一部が出てきているだけで、あのカウントダウンには意味が無いっていう意見が出ているわ。でも、そういうこと以外は全く進展がないの・・・。えっと、凜、核融合炉の空間で何か分かったことはあった？』

「う・・・うん。なんとかローラ・ゼロの記憶を再生して、当時の状況を知ったんだけど・・・」

今度は戸惑って、言葉に詰まる。あの少女と見た光景や、そこから出た結論を頭の中で転がしてみるけど、それらは私の中の感情の障壁に阻まれて上手く形にならない。

美玖は、私の次の言葉をじっと待っている。けれど、その間に私が

絞り出せた言葉はたった一つの実事だけだった。

「どうやら私、核融合炉に飛び込まなきゃいけないみたい・・・」

美玖が息を呑むのがはつきりと分かった。

「そ・・・それって・・・」

美玖は明らかに狼狽している。分かりやすい性格は今も昔も変わっていないようだ。しかしそんな美玖の様子とは対照的に、私の混乱は静まり始めた。

「ローラ・ゼロはね、核融合炉を作るために自ら異空間に飛び込んだわ。その時に、彼女が抱いていた想いは、彼女が失った人の事と自分を消し去りたい、その人の元へ行きたいっていうものだったのよ。そしてそれは・・・」

私の頭の中で、あの日の事が再生される。同時にあの想いも。

「私が記憶を失ったあの日、あの瞬間の私の想いと一致していたのよ。廉を求める想いと、廉がいないのなら核融合炉に飛び込んでやりたいっていう想いが」

それから、私はローラ・ゼロがどのようないきさつで核融合炉の空間が意思を反映することを主張し始めたのか、そして、感情の一致によって私が核融合炉の核となっていたことを話した。

「そんな・・・そんなこと・・・」

美玖はもう泣きそうな声だった。

「そんなの・・・嘘・・・よね？」

そして美玖のそんな質問に、私は逆に驚いてしまった。ここ二年、美玖が嘘だ、と言うようなことは一回も無かったはずだ。それは美玖の単純な性格では私に対して疑うことをほとんどしなかったためだけれど。こんな言葉が出るほど、美玖は動揺していた。

「み、美玖っ、あのね・・・」

美玖のあまりな動揺に耐え切れず、私は美玖の求める通り嘘を吐こうとした。

僕達は、多分歴史に刻まれることは無いと思う

でも、そんなことできるはずが無かった。私も美玖も口をつぐみ、

重苦しい沈黙が流れる。

「全てが嘘だったら、本当によかったのにね」
ぽつりと言う。

『そう』

しかし、その一言で美玖は全てを理解したようだった。

『それでも・・・』

少しの間があり、電話越しでも美玖の真剣な表情が見て取れるような深呼吸の後、美玖は食い下がるように言った。

『それでも、私は・・・諦めないよ』

「うん・・・」

何を、とは訪ねなかった。そんなことを聞いてしまったら、互いの決心を揺らがせてしまいそうだった。

「じゃあ・・・なんていうか・・・」

急に、あんなに動揺してしまった自分がばかしくなって、少し顔を赤くしながら私は言葉を吐き出す。

「これからよろしく」

『そうだね、こちらこそよろしく』

そう言つて、私と美玖は笑い合う。この世界が消えてしまうまであと十二時間もないけれど、これまで散々暗い気持ちにさせられたのだ、最後ぐらい希望を持ちたかった。

丁度その時、玄関のインターホンが鳴った。私はびっくりして玄関を振り返る。

「人が来たんだけど・・・誰だろう？」

『マスコミが何かかもしれないわ、気を付けて』

美玖がそう言うので、私はおっかなびっくりしながら玄関まで電話を持ったまま行き、慎重にドアを開けた。

「よう！凜、元気にしてたか？」

ドアを開けた先には、なんと魁人がいた。二年経つてはいるけれど、その雰囲気はあの時とほとんど変わっていない。

安心してドアをちゃんと開けると、魁人の後ろには同じぐらいの

歳に見える二人の女性がいた。二人ともずいぶん大人びて見えただれど、瑠香るかと？であることはすぐに分かった。

「一つ国が減ぶわあんなカウントダウンが出るわ、俺たちやしつちやかめっちゃかだよ。そんなときにここの電気が付いてたもんだから、気になって来ちまったよ。」

どうせ、あの時みたいは何か厄介ごとに巻き込まれてんだろ？それも核融合炉のことだよ。手助けに来てやったぜ」

どうやら魁人は、あの時から性格も変わっていないようだった。

「おせっかいなやつね。二年前と何も変わってないわ」

私が苦笑を浮かべながら言うと、魁人も同じように苦笑を浮かべた。

「おまえも、その物言いは変わってねえな」

「ふふっ。それじゃあ、みんな上がって。出すお茶もないけど勘弁してね」

「大丈夫。そういうのは私が持って来ているわ」

瑠香が手に持っていた鞆を見せながら言う。そういうところは、流石瑠香お姉さまだ。

「あらま、リビングがひどいことになってる。掃除しなきゃだね。でもこの画はちょっとドラマチック・・・」

そして相変わらず変な事を言う？だった。

「そうね・・・まずは掃除からかしら。恥ずかしいところを見られちゃったな」

私は苦笑して、部屋の隅にあるはずの箒を取りに行った。

それぞれの想いがあって、それぞれの物語が存在する。

それは輪廻に見えて、全く別の想いが生まれている。

しかし、たとえ同じ想いを抱いていたとしても、

それは全く別の物語でさえあったのだ。

もしかしたら、その世界さえも。

十、追憶（後書き）

ローラとレオンに関係については・・・いろいろと妄想してみてください。キャラが増えすぎてしまうのもなかなか大変ですね。オトナって難しい（棒）

実はこの作品のプロットを決めていた段階では、名前があるのは凜と廉だけで、その他は名前がなく、完全に鏡音凜だけの話になる予定でした。しかし、一話からいきなり魁人が乱入し、それからどんどん人数が増えていきました。

人間関係も描くことから、鏡音凜という一人の人間としての物語になっていったかなと思います。やはり人間一人では生きてけないんですね。

十一、要求

火事場の馬鹿力とは、よく言ったものだ。私がテレビに投げた花瓶は、結構な重さがあつたはずだけれど、それがテレビの真ん中をきれいに直撃していたのだ。よくそんな力が出たものだど、私も含めてみんな驚いていたけれど、魁人かいとに限っては「女は怖ええな」と言っただけでいた。

片付けが終わってから、廉の部屋からもソファを持ってきて、四人でテーブルを囲んで座った。溜香るかがお茶を淹れて、全員に行き渡ってから、自称「作戦会議」を始めた。美玖は、私の部屋のパソコンを使ってテレビ電話でテーブルを囲んでいる。

「聞くと夢も希望も無くなっちゃうような内容だからあまり皆には話したくなかったんだけど、もうカウントダウンも十二時間切っちゃったし、全部話そうと思うわ」

「おう、どんと来い」

「私に力になれることなら何でもするわ。彼を救ってもらったもの」
「もちろん、廉君れんの事も教えてくれるよね」

美玖だけは無言だったけれど、それぞれが返事をしたので、私は話し始めた。

「まずは、核融合炉を作ったローラ・ゼロのことから話すわね。」

一世紀前、人類は深刻な環境問題に襲われていて、そのせいで各地で紛争が相次ぎ、多くの命が失われ、世界中の人々の心がバラバラな状態だった。その中で、核融合炉の開発が急がれていた。ここまでは歴史で習ってるよね。それで、実際に核融合炉を開発したのは、ローラ・ゼロっていう女性だったっていうのは、廉から聞いていると思う・・・えっと、？は・・・」

「知ってるわ。あたしも廉君から聞いた」

驚いて、その場の全員が？の方を向く。

「実は十四のころ、あたしは廉君とメールでやりとりしていたこと

があつたの。あの時は夜遊びばかりしてたんだ。学校にも家にもほとんど寄り付かなくて、そうやって遊んでてもなんか虚しくて、親にも失望されてちゃってさ、私なんか必要ないんじゃないかって思つて何度も自殺を図っちゃつてた。

周りから見たらただの悩める中学生だったかもしれないけど、だいぶ危なかったんだよね。まあ私はバカだったからなかなか死ねなかったんだけど・・・と、ごめん話の腰折っちゃったよね。話、続けていいよ」

？があまりにも開けっ広げに言うものだから、私は終始茫然としていた。

「いや、まだ廉とどうやって知り合つたのか聞いてないぞ。それだけは聞きたいよな？凜」

「う、うん」

そついうわけで、魁人がいきなり振つてきても生返事しかできない私だった。

「そつか、なら話すね。それでさ、確実に死ぬる方法をネットで探してて、その中で廉君が立ててるサイトがあつたんだよね。自殺サイトだと思ったら完全に釣りでさ、なんだかんだで廉君とチャットで話し込んで友達になっちゃった。

でさ、凜と廉君つてあの時から両親が居ないじゃない。そのことを知つたらなんかいたたまれなくなっちゃつて、それから自殺しようつてことを廉君にチャットしてたらなんだかどうでもよくなつたんだよね。大人達が聞いたら絶対怒るような話を、廉君は怒ることも、聞き流すこともせず真面目に聞いてくれたしさ。

その時だったかな、廉君から核融合炉の事を聞いたのは。スケールが大きすぎてあたしには十分理解できなかったけど、みんなが一つのものを共有しているつていうことになんだかじんと来ちゃつてさ。大人達なんて別世界の住民みたいに思つてたけど、偉そうにしてるように見えて結局はおんなじ生き物なんだなつて分かつて、そしたら自分でやってたことがばかしく思えてきてさ、自然に

学校に戻ることが出来たんだ。まーそれからは大変だったけどね、結構な時間休んでたし。

今にして思えばさ、廉君はあたしと同じ年とは思えないくらい大人びてたよね、勉強も結構教えてもらってたし、あたしみたいなやつを真剣に聞いたりしてさ」

「確かに、あいつはなんていうかマセたやつだったな。普通、同級生との会話に核融合炉の話なんてしねえっての。それで俺達には到底思い当たらないような事を平気で言つてよ、同じ年には思えなかったな」

魁人が同意すると、？がそれにつけ加える。

「そうそう、しかもさ、廉君はあたし以外の人達の相談にも乗ってたんだよね。しかもその子って学校でいじめられてたらしくて、それ聞いた時はホントびっくりしてさ、カウンセラー目指してんのって聞いたちゃったよ」

そういえば、廉はネットでいじめとかがどういう風に起こっているのかを調べていたんだっけ？廉は調べるだけではなくて、なんとか解決しようとも試みていたのだ。それこそ、廉が目指している世界のために。

そう考えると、廉をとて誇らしく思えた。

「だから、廉君が拳銃で自殺したって事をニュースで見た時は、すごくショックだった。あんなにあたしを助けてくれた人が、あんな風に逝ってしまうなんてさ。あたしは彼から貰うばかりで何も返してあげられなかったんだ。それが、すごく悔しかった」

「・・・本当に、逝っちまったんだよねあ」

魁人がポツリと言うと、五人とも黙ってしまつてしんみりした空気が流れる、しかし、そう長くない時間で、？が耐え切れなくなつたように両手を振った。

「あー、ごめん！変な空気になっちゃったね。話、続けてくれるかな」

？がそう言うので、私は少しわざとらしく咳払いの真似をして話

し始める、

「廉から話を聞いてるってことは、ローラ・ゼロが核融合炉の元となった空間に飛び込んだことで核融合炉が作られたっていうことは知ってるわね？ 廉は、その話を核融合炉の研究の第一人者、レオン・ゼロがネット上にアップしてしたのを見て知ったのよ。その話を元に、私は核融合炉の空間で直接ローラ・ゼロの記憶を探ったわ。」

内容を要約すると、ローラ・ゼロにはマリウムっていう妹がいて、その妹がね、飛行機のハイジャック事件で犠牲になってしまったの。しかも、飛行機が突っ込んだ先にはちょうど核融合炉の元になった空間があつて、それが衝突の衝撃で空間が開いて、飛行機ごと乗客を呑みこんでしまった。

その時にその乗客の親戚とか親しい人々が、同時刻に彼らの『声』を聞いたのよ。当然、マリウムの声もローラに届いていた。それから、ローラは核融合炉の空間が人の意思を反映させる機能を持っているって考え始めたのよ。

そうして、ローラは核融合炉の元となった空間に飛び込むことを決意した。そして、彼女は飛び込む瞬間、二つの事を願っていたわ。一つは、核融合炉を作ること成功したら、だれも核融合炉の空間内に立ち入らせなくすること。二つ目は、自分が失敗してしまつたら、この世界を壊してしまう事よ。

前者は、核融合炉の空間に消えたマリウムと二人だけで会いたいという願望。後者は、マリウムを殺してしまった世界に復讐するため、そして、自らの危険を顧みないのはマリウムが死んだ世界に絶望していたから、彼女はその様に願った。

だから、核融合炉は融解を起こしているのだと思う。核融合炉を繋ぎとめていた彼女の意思はもうすぐ消えてしまうのよ。そうなつたら、核融合炉はローラが失敗したとみなすわ。そして核融合炉は彼女の願いを叶える。核融合炉の膨大なエネルギーならば、世界を滅ぼすなんて造作も無いことだわ。

でも本来なら、ローラの意味自体が消えてしまうのだからその瞬

間、核融合炉も存在できなくなってしまう。だから、融解を起こしても完全に消えてしまうのなら問題は無かった。でもね……」

私は、ちらつと魁人の方を見る。

「三年前、私が記憶を無くしたあの日に、私が核融合炉と繋がってしまったことで、安心できない状態になってしまったわ。あの時、核融合炉に私が干渉してしまったの。」

失ってしまった誰かと会いたかったという想いと、その人がいない世界に絶望して、自分を消し去ってしまいたかったという想いを、核融合炉はローラの意思と間違えて拾ってしまったのよ。

その結果、私はローラ・ゼロの代わりに核融合炉の存在を継ぐになってしまった。だから、私が消えない限り核融合炉の融解を止めることは出来ない。で、今の私は死ぬことが出来ないから、ローラ・ゼロの意識が完全に消えて、核融合炉が完全に融解したときにあの空間に飛び込むしかない……っていうのが今の状況ね」

私が話し終わると、しばらく沈黙が流れる。しかしそれも長くは続かず、魁人が微笑を洩らしたことで沈黙は途絶えた。

「で、だ。話はそれで全部か？」

「え？」

魁人のいきなりな疑問に私はまともに反応できなかった。

「その話だけだとよ、何の解決方法も浮かばねえ。それじゃあ俺達が来た意味が無いってもんだ。それにもっと聞きたいことがある、そうだよな？」

魁人が言うと、瑠香と？が同時に頷く。

「そうね、凜が記憶を無くしたときにどうして廉の口調になったのかとか、そもそも凜が記憶を無くした理由が知りたいかな」

「あたしも廉君がどんな人だったのかもっと知りたいよ」

私はそんな魁人達の態度に面食らってしまった。あと十時間ぐらいで人類が確実に滅んでしまうということを聞いても全く動揺もせず、逆にもっとそのことを知りたいと言うのだ。

「凜……」

画面越しに美玖が心配そうに私を見る。どうやら美玖は、瑠香達
が聞いた内容が私にとって辛いものであることを危惧しているよう
だ。実際、私も話すのは気が引けるけど、瑠香達のそんな態度に躊
躇いはどこかに飛んで行ってしまった。

「分かったわ。じゃあまずは、瑠香が言ってた私があの時どうして
記憶を失ったのかって事を話すわ」

と、説明することにしたのは良かったのだけれど、今更になって
私自身もよく事態を把握しきれていないことに気付く。

記憶を無くしていた時の事を思い出そうとするけれど、それはど
こか自分のことでは無く、寝ながら映画か何かを見ていたような感
じで、細部まで思い出すことは出来ない。

「ごめん、魁人。私、記憶を無くしていた時の事をよく思い出せな
いの。ちょっとあの時の事を説明してくれる？」

私がそう言うと、魁人が意外そうな顔をする。

「覚えていないのか？あの時お前の元々の性格も消えてはいなかつ
たから、人格が入れ替わるとかそういう感じでは無かったのにな。

確か、お前が聖域の前で急に倒れて俺が凜の名前を呼んでいたら、
目を覚ました時に凜って誰って言いやがったんだ。それで俺が無理
やり精神科の病院に連れて行って、検査を受けさせた。で、それか
ら家に帰らせたな」

うん、そこまでは覚えている。それから私は家に帰って、自分の
部屋にあるものを物色して、それから……。『君』の首を絞める
夢を見た……。いや、違うな……。

そうだ、あの時私が夢の中で見ていたのは、少女の顔では無く、
高校生の私の顔だった。そのことを思い出して、私は完全に思い違
いをしていたことに気が付く。

廉のイメージだけの人格で『僕』が過ごしていた時、『私』は核
融合炉の空間にいたのだ。つまりあの時私は記憶を失っていたので
は無く、人格自体が別のものと入れ替わっていたのだ。

今、核融合炉の空間にいる『僕』も私を通してこの世界を見ている

ようだから、人格が入れ替わっていた時の記憶に主体性が無く、曖昧なのはそのせいだろう。どうやらあの一年間、私の意識はひどく薄い状態のようだったから。

「あゝ。凜？考えはまとまった？」

？の気の抜けたような言葉に、私ははっとした。どうやら結構な時間、考え込んでしまったらしい。

「うん、なんとかね……。結論から言うと、あの時の私は人格自体が入れ替わっていたって事。核融合炉が私の想いを拾った時点で私は仮想人格を一つ作っていた。それがあの時の一人称が『僕』だった私ね。」

核融合炉は、廉に会いたいつていう私の願いを、私自身が廉の疑似人格を持つことで処理した。だから、あの時の私は廉と同じような口調で、性格の私のままだった。同時に、私の人格を核融合炉の空間内に閉じ込めることで私を消し去ったのよ。

だけど、他にもないあの時の私が記憶を取り戻すことを望んで、核融合炉の空間に入ったことで状況は変わったわ」

「はいはい！質問！」

突然、？が手を上げて話に割り込んできたので、思わず私は？を怪訝な目つきで見ってしまった。

「核融合炉が融解してる原因を知った時とか、今の話の中で核融合炉の空間に入るって言ったけど、凜はどうやって核融合炉の空間に入るの？」

「えーと、それは……」

そういえば美玖以外には核融合炉の空間にどうやって入るか見せたことが無かった。絶対驚かれるだろうなと思いつつ話す。

「そこから飛び降りるの」

私がベランダを指さして言うと、案の定、？が啞然とした顔になる。

「今は核融合炉の空間の核になってるって知ってるから飛び降りる必要はないけど、私を傷つける物は核融合炉の空間に飛んで行って

しまう事を利用したの。

小さいものならそれが出来るんだけど、私自身が原因で危ないときには、核融合炉の空間に自動で避難しちゃうみないなのよね」

私が捕捉をすると、魁人が呆れたようにため息を吐いた。

「全くお前は、危険を顧みないといつかなんと云うか・・・」

そんな魁人の言葉に私は大仰に肩をすくめ、話を続けた。

「本来なら元々の私の人格と疑似人格が一つになって、疑似人格の方は消えるはずだったみたいなんだけど、なにせあの時の私は廉の疑似人格だったから、私の方から消したくないって思ってしまったのよね。その結果、あの時の私の人格は今、核融合炉の空間に独立して存在しているわ」

「へえ」。ってことは今でもその子と会話できるんだ。自分と会話するってなんか面白そうだね」

？が感心したように言くと、瑠香が難しい表情をする。

「それにしても、核融合炉って何でもありね。人の想いを拾ってそこまでしちゃうなんて。しかも今では私達の生活に無くてはならないものだけど、それがこの世界を滅ぼそうとしているのよね・・・」

「そうね、私も、核融合炉の空間のことがよく分からないわ。あそこにいる子だって、元々は私の一部だったのに、今では何を考えているかさっぱり分からないわ」

瑠香の言葉に、私も同意する。

と、流石に私も魁人達の態度を不審に思い始める。それぞれ話している話題はかなり強いショックを受けても無理のないものだ。しかし、魁人達はまるでそれを予知していたかのように平然としている。

「そういえばさ、皆どうして私を助けに来た訳？普通は様子を見に来るとかそんな感じだと思っただけど」

私がそう言つと、？がしまったという様に舌を出す。

「あーあ。美玖。ばれちゃったよ・・・」

「え？」

私は困惑して、画面に映っている美玖を凝視する。美玖は後ろめたそうに視線を逸らしている。

「実は、午前中に美玖から電話があつてな。凜を助けて欲しいって言われたんだ。その時に大まかな説明を受けて、凜が一晩連絡が着なくなっていることも聞いたんだ。それで溜香と？と連絡を取り合つて、ここに來たつて訳だ」

魁人が説明をする。

「入つて來た時のあれ、嘘だったのね・・・」

「ああ、美玖からはそういうことにしといてくれて言われてたかな。ともかくお前を安心させることにするにはああやった方が良かったつてことだ」

「美玖・・・」

私が呟くと、美玖が申し訳なさそうに目を伏せる。

「ありがとう」

そして私のはつきりと言うと、美玖は驚いた表情を見せる。相変わらず分かりやすい性格だ。

「皆に会うことが出来たのは、あなたのおかげよ。あのままじゃ、私はたった一人で事を抱え込んだままこの世界から消えることになつてたでしょうね」

「凜・・・よかった」

見ると、美玖は目に涙を浮かべていた。そんな美玖の反応に私は思わず苦笑してしまう。

「それじゃ、会議を続けるか」

魁人が言うと、その場にいる全員が頷いた。

それから、私達は誰も犠牲とせず、核融合炉の融解を止める方法を模索した。しかし、良い方法は一向に見つからず、誰もが焦りを見せ始めていた。

「ローラ・ゼロの意思が完全に消えるまで凜が核融合炉を制御できないっていうのがもどかしいなあ。どーしてそんなに執念深いのか？」
「それだけ彼女の意思が強かったって事だと思う。凜だって彼女の意思に逆らってできたのは一瞬だけエネルギーを外部に放出するにとぐらいだったし」

？が少し投げやりに質問すると、美玖が丁寧に説明する。

「それだ、ある程度の強い意志だったらローラ・ゼロの意思に逆らえるんだろ？それで何とかならないのか？」

魁人が説明に食いつき、私の方を向く。

「うーん……。それなんかいけそうなんだけどな……。核融合炉の空間を掌握しているのは私なんだけど、空間の要になっている核融合炉はローラ・ゼロの支配下にあるってことが障害になってるのよ。だから美玖が言ってたみたいに一瞬だけ核融合炉を掌握することはできても、持続的に支配することは出来ないし、今じゃ核融合炉に近づくことさえできないのよね」

「外側からでも、内側からでも無理……。か。まいったな」

妙案だと思ったのだろう。魁人が顔をひどくしかめながら頭を掻いた。しかし魁人の言ったことは本場で、私が核融合炉に飛び込む以外、打つ手を見つけないことは出来なかった。

そう思っただけで、私が諦めかけた時、美玖が意見を出した。

「今思っただけで、ローラ・ゼロの意識が消える瞬間なら、凜は完全に核融合炉を掌握できるんじゃないかしら？ローラ・ゼロだって核融合炉の空間に飛び込む瞬間に自らの意思で核融合炉を作ったのだから、凜だって何か自分の願いを核融合炉に聞かせることができるはず……」

そういえばあの少女もそんなことを言っていた。あの時私はひどく混乱していたからよく考えなかったけど、改めて考えてみると……なるほど上手く使えば何かできそうだな。

「でも私、何を望めば……」

「それを今から考えればいいだろ」

私が呟くと魁人が呆れたように言った。

しかし美玖の挙げた案には問題があった。それは、ローラ・ゼロの意思が消える瞬間という非常に短い時間で事を成さなければならぬという事だった。

ローラ・ゼロがやったように核融合炉に飛び込みながら願えば確実だけど、それだと核融合炉に聞かせることのできる願いは一つだけだ。

それでは人類と私、どちらも救うのは難しい。

「死ぬ前に一つだけ願うだなんて、なんだかとてもドラマチック・・・」

「こら、お前が死なない方法を探すんだろ」

私がぼつりと言うと、魁人に叱られた。

「うん、まあそうなんだけど。願うことができるのが一つだけだしなあ。やっぱり廉が望んだ世界を実現させたいかな」

私がそう言うのと、魁人はため息を吐き、瑠香は微笑を洩らした。

「ほんと、凜はブラコンよね・・・。人格が変わった時だって、わざわざ廉の人格になっていたもの」

そう言われると反論ができないのだけれど、ブラコンなんて言われ方をしたせいで、私は頬を赤らめた。

「それは・・・あれだよ、双子だったからよ・・・」

「あら、双子だからって仲がいいとは限らないのよ？」

流石は瑠香お姉さまである。またしても反論できない私はぐっと口をつぐんでから苦し紛れに話を逸らす。

「そんな事を言うんだったら、美玖だって廉の事を恋い慕っていたじゃない」

そう言うのと、今度は美玖が顔を赤らめ、？が反応する。

「り、凜っ」

「え、そうなの！詳しく聞かせてよ！」

？が露骨に反応したので、私は生前の廉がどのような人だったのか。そして、私達が廉とどんなふうに関わっていたのかを掻い摘ん

で話した。

その過程で廉が死んでしまった時の事も話さなければならなくなり、戸惑いながら説明した。

「なるほど。あれほど廉の事に執着したのはそんなことがあったせいだったのね・・・」

「でも、廉君がいたから今の凜があるっていう事なんだ。なんだか皮肉・・・」

瑠香と？がそう感想を述べる。

「確かに、そうかもしれないわね。結局、私は過去に縛られてばかりだわ」

私が自嘲気味に言うと、美玖が反論した。

「そんなことない。凜は今まで皆を助けようって頑張ってきたじゃない。それに、核融合炉の事をここまで解明できたのは、あなたのおかげよ。」

今だって、こうやって皆で解決策を探しているじゃない。それって未来に向かっているって胸を張って言えることよ」

「未来・・・か」

私はぽつりと呟くと、皆頷いた。私はなんだか気恥ずかしくなつて、場違いな質問をしてしまう。

「そつえば、夢ってある？」

しかし皆それを真に受けて、それぞれ近況を教えてくださいました。

魁人は大学に通いつつバンドで活動しているようだ。本格的にアーティストとして活動するかは悩ましいところだけど、腕はなかなかのものらしい。たまに大会で優勝するのだと自慢していた。

瑠香は哲学系の学科のある大学に通っている。なんでも廉の言っていたことが哲学的にどうなのかを検証してみたいらしく、日々勉強に明け暮れているようだ。

？はすでに働いていて、それなりに稼いでいるようだ。核融合炉が無くなるかも知れないから、今の会社辞めとこうかなと苦笑しながら言っていた。

美玖は言わずもがなで、皆それぞれ、大人への道を歩んで行っていた。私だけが取り残されてしまったような気がして、少し寂しかった。

けれど、それではつきりした。私の夢は、私の願いは……。

「私、決めた」

そう言っただけで私が立ち上がると、皆に注目される。

「核融合炉が世界を滅ぼしてしまうなんてこと、絶対にさせない。何に替えても皆を守って見せる。それで……」

深呼吸をして、この想いが私の本当の想いだと確認する。

「廉の望んだ世界を実現してみせる」

少し間があってから、美玖が不安そうに声を上げる。

「でもそれじゃあ、凜は……」

美玖が言おうとした事を魁人が遮る。

「一つ確認させてくれ、お前はそれを核融合炉に願う気か？」

「そう、それなら私は心の底から願うことができる……はず」

私がそう答えると、魁人は満足したように頷いた。

「お前にしちゃ、いい答えじゃねえか。そう望めば全てが上手くいくかもな」

「確かに、それならいろんなことが詰め込めるわね……。それに廉はあなたに生きて欲しいって望んでいたものね」

魁人に続き、瑠香も賛同する。

「それじゃあ、反論はなしね」

私が言っただけで、皆が頷いた。

「んじゃ、そろそろ出発しましょうかね」

「おう！人類を滅ぼそうなんて考えたやつが作ったものなんてぶち壊しちまいな！」

「私達ができることはこれまでにけど、頑張っただけで頂戴！」

「廉君が望んだ世界だもんね、あたしはきっと成功すると信じてるよ！」

魁人、瑠香、？がそれぞれ励ましてくれた。

未だ不安げな表情の美玖に、私は苦笑しつつ話しかける。

「前にも言っただけど、あなたのおかげで私は皆に会うことができ、ほんとによかったと思ってる。だから、絶対にこれが無駄にしない」「凜・・・頑張ってね」

見ると、またしても美玖は目に涙を浮かべていた。それでも無理やり笑顔を作ろうと奮闘する姿に、私はとても勇気づけられた。

「それじゃ、行ってくるわね！」

私はそう言っ、空間転移を使って部屋を後にした。

世界に対して要求する。それは、私だけでなく、たくさんの人々が行っている。

たとえそれがそんな状況でも、どんな時代でも。

願いは、どこにだって存在していた。

十一、要求（後書き）

書き始めた当初は八話で終わる予定でしたが、伸びに伸びて十一話まで来てしまいました。ですがついに次回が最終話です。

なので十一話はこれまでのおさらい的な内容と最終話に向けての発射台になっています。

第二話でネルは出ていましたが私の力量不足で一言しかセリフがないという完全な脇役になってしまいました。

しかし今廉の新たな側面を語るためのキャラとして大いに活躍してくれたので、私としてはうれしいかぎりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8318u/>

炉心融解 -the another melt down-

2011年12月27日19時52分発行